
ななしのワーズワード

奈久遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ななしのワーズワード

【Nコード】

N3817Y

【作者名】

奈久遠

【あらすじ】

世界最悪のサイバーテロリスト『ワーズワード』。彼は己の生命をかけたある計画を実行するが、それは原因不明の失敗に終わってしまう。結果、地球とは全く異なる世界に飛ばされてしまい……そして、ワーズワードの冒険が始まる。

Warp World 01

ある『計画』を立ててみた。

今日までの仕込みは上々である。

オープンテラスのカフェスペースでランチの到着を待つ間、俺はエアロビューを立ち上げ、暇つぶしをすることにした。

そういえば、『ワーズワード』の名で呼ばれるようになったのはいつからだったか。

自分の脳内にある記憶野を検索しても良かったが、ネット上の検索サイトの方が、よほど手間がかからない。

ワーズワード	による検索結果	約	1	768	400	件
(0.832 秒)						

検索結果の上位には、ニュース記事及び、それをネタにした掲示板へのリンクが並ぶ。

そこに躍る文字は、どれも物騒なものばかりだ。

21世紀最悪のサイバーテロ。破られた世界最高のセキュリティ、崩れたCOIN神話。犯罪史上最大の被害額。麻薬カルテルを壊滅、正義の使者ワーズワード。情報提供者に賞金支払5億COINを検討

エアロビューを流れる同じような記事、そのどれもが自分の行いの履歴だが、その中でもっとも目につくのはやはり、『COINサイバーハッキング事件』を取り扱ったものだろう。

COIN Cash Obtainable In Network saving 是世界統一通貨サービスの略称及び、そのチャージデバイスの愛称である。

これまで無数に発行されていた、いわゆる電子マネーが全世界規模で統合されたのは何年前の話だったか。

統一通貨名については、元と円が早々に負け、ユーロとドルとの一騎打ちとなったが、アジア諸国及びアフリカ勢の強烈な横やりにより、最終的には新たな統一通貨名『COIN』が正式採用されることとなったのだ。

そしてチャージデバイスとしての『COIN』は、亜金属製の円貨型デバイスで統一されている。この場合の円貨とはジャパニーズ『Yen currency』ではなく、丸いタイプの貨幣、という意味だ。

直径3cm大、やや大きめのCOINは、掌に握りしめて認証デバイスカざすことで認証される。

COINには世界最高のセキュリティとして、『ミーム認証』が用いられた。

『ミーム』とは、人類のみが持つ個人識別が可能な情報遺伝子である、らしい。らしいというのは、それは完全に『COIN』に特化されたブラックボックステクノロジーであり、一般にはミームなるものの技術情報は一切公開されていないからだ。

21世紀の巨人。ノーベル・サイバーテクノロジー賞3年連続受賞のサー・エクシルト・ロンドベル教授の完成させた、このミームなるヒト識別技術はまさに完璧であり、世界最高と言うに異論はなかった。

だが、それは破られた。

正確には俺が破ったわけだが。

ハッキングに成功したとはいえ、そこはさすがの世界一の技術の詰まったサーバーである。

俺がそこにアクセスできた時間は、3分32.550秒のみ。

そんな短時間で行えたのは、事前にリストアップしておいた、チャイニーズマフィア・コロンビアカルテル・ジャパニーズヤクザと言った、暴力と麻薬で生計を立てている人種に関連するCOIN口座のセベラルパーセント、126万8052口座の残高を0に書き換えることくらいだった。

もつとも俺の興味はミームなる技術の解析にのみあり、その後の口座消去はただのお遊びだったのだが。

だったのだが、世の中的にはそのお遊びは思ったより大事だったようで。

電子空間に溶けて消えた闇資金は日本円にして27兆2000億あまり。単一個人が起こした事件の被害額としては、世界一となった。

もちろん口座情報だけでなく、入出金明細、ミーム情報、バックアップもキツチリと消してあげたので、削除された口座を復旧させるには、厳正な本人情報確認が必要とされた。削除された内の26.85%は口座名義人が名乗り出ることなく、また本人確認に訪れたアホの子がその場で逮捕されたりと、一連の報道はなかなかの盛り上がりを見せた。

手を抜かないからこそ遊びは面白いのだ。

ネット上の無責任な議論は、その被害者が犯罪集団であることに対する喝采と、世界最高のセキュリティを突破したその技術力の高さを賞賛する方向に傾き、名もなきサイバーテロリストは一時英雄

と呼ばれた。

だが続いて、被害者の数十万人が世界中で同時多発的に発狂した。そんな、地球を沸騰する地獄の釜の底に突き落とす事態となつては、その名声も地に落ち、俺は世界最悪の犯罪者として、めでたく憎悪の対象へと昇華した。

『ワーズワード』の名はその頃から呼ばれ始めたものだ。調べてみると当時無名の俺に懸賞金をかけるにあたり、米国『STARS』コードネームが付けた識別名であるとのこと。

ほう、それは今初めて知った。

『ワーズワード』という響きが気に入った俺は、その後の印核軍施設乗っ取ってみるテストや、ハッキングした人工衛星影像による金成恩^{キム・ソンウン}8、760時間追跡動画をI t u b e（アイチューブ：フリーの動画投稿サイト）で公開した際には、その名を使わせてもらった。

米大統領選の電子投票ジャックは、民主党候補のアホが「いまだ核物質を放出し続ける日本に、その収束まで継続的な懲罰金を課すべきである」などと、アホなことを言い出すから、仕方なくやっただけである。大変遺憾である。

とはいえ、選挙地図を真っ赤にしたのはやりすぎだったかもしれないな、反省。

ハッキングがばれた後の再選挙でもアホの方は普通に落ちたので、別にやらなくてもよかったかもしれない。

その行動のどれもが世界に衝撃を与え、やがてワーズワードの名

を知らぬ者はなくなり、俺はついに世界の敵たる23人のテロリスト
ト 『エネミーズ23』 の中でも最高賞金首の指名手配犯となつた。

あらゆる人類の生存活動から、既にして切り離せなすことのでき
ない電子ネットワークの領域を脅かすこの俺は、まごうことなき世
界の敵だ。

それを俺は否定せず、また自らの行動に、一切の後悔も反省もな
い。

『できるからやった』

それだけだった。

W a r p W o r l d 0 1 (後書き)

折角ユーザー登録したので、お話を投稿してみるテスト

Warp World 02

「お待たせいたしました」

そこで、ようやく注文のランチパスタが到着した。

道路に面したこのオープンテラスには心地よい陽射しが降り注いでいる。

やはり食事は明るい場所で取るのがよい。

そして、これが最後の食事になる。

俺はパチリとエアロビューを閉じると、スプーンとフォークを手持った。

俺の帰宅を識別したハウスキープシステムが、自動的に室内をライトアップし、気温の調整を始める。

PCルームにつく頃には、『アイシールド』もすぐに装着可能な状態にスタンバイされる。

パソコンの主流は、汎用機からデスクトップ、ノート、スマートフォン、エアロビューと、その時代を反映して変遷してきたが、やはり最新のヘッドマウントタイプ、『アイシールド』は最強だろう。

モバイル利用はエアロビューで我慢するしかないが、感応入力のも

快感と、球面立体ディスプレイの感動を一度覚えてしまった者が、GUI (Graphical User Interface) のみをサポートするオールドPCに戻れるはずもない。

アイシールドを装着した俺は、思考により行動し、思考により喋り、思考により存在する、ネットの住人たる仮想体^{アバター}となる。

アバターは正式には VUI (Virtual User Interface) といい、感応入力をサポートした第三世代インターフェイスである。

ネット上のオープンスペースに出れば、自分と同じような、それでいて千差万別のアバターにすれ違うことができる。

通貨がネットワーク上でやり取りされる世界経済がリアルであるならば、アイシールドにより、実現される仮想世界もまたリアルである。

アバターというインターフェイス上で、巡回サイトをチェックし、エアロビューを展開し、動画を見なければテレビを付ける。

新聞紙コンテンツでニュース配信を受け取り、動画再生時は映画館アプリを利用する。

それは、現実世界の自分自身となんら変わらない行動様式だ。

『パソコンとネットワーク』が創りだす仮想の空間は、人類にとつての、もう一つの世界として成立していた。

時計を見る。時計は14時12分、帰宅後20分が経っている。

「さて、そろそろ時間だな」

ネット内でサードディスプレイを立ち上げ、中国国家航天局の人工衛星「中天王88」にアクセス。

コンソール起動、キー入力、全てが3秒以内に完了する。物理的な行動を必要としない感応入力は思考の速度がそのまま、操作速度となる。

俺くらいアバターを使いこなせるようになれば、下手なマクローを起動させるより、その場でリアルタイムコーディングを行った方が早いくらいだ。

手早く中天王88のサテライト・ビューをハッキング、近地上観測モードに切り替える。

中天王シリーズのメインOS「大鵬」^{ダーベン}は純中国産、オープンソースでもここまで酷くないだろうとの評価を受けるセキュリティホルの固まりだ。

その割に、並列処理の性能は比較的高く、一機あたり、20003000のバックドアプログラムをパラレル実行できる。

サテライト・ビューの解像度は高くないが、シリーズ100機を超える人工衛星で、ナゼカ日本国土のほぼ全域を網羅^{カバー}しているため、日本国内のパブリック、またはプライベートスペースをライブ中継するには、大変優良な機体なのである。

地上監視カメラをコントロールし、ターゲットポイントにズームをあわせる。

ズームするポイントは、俺のこの家だ。

大通りには覆面パトカーが10台と外交官ナンバーを付けた防弾ジープが5台、裏口方向に自衛隊の車両が3台。パーキングにはJ・テレの報道車、空中を舞うヘリの姿も見える。

警察は想定内として、そうか、マスコミも動くか。

地上をちよこちよここと私服警察官が歩き回る。家を取り囲む人数

はSTARSと自衛官を合わせて、40名程度。アメリカ国家安全保障局（NSA）直轄のサイバーテロ対策部隊『STARS』最高閣議は、武器を持たない民間人一人の拿捕には作戦チーム10名体制で十分だという結論を出したはずなのだが、なるほど日本政府が横やりを入れたわけか。世界の敵たる『エネミー23』、それも史上最悪、最高賞金首のサイバーテロリストが日本人では都合が悪かったであろう。

警視庁を前面で動かし、テロリスト逮捕の瞬間を全世界に見せしめるTVショーにしたてあげ、日本の警察が捕まえたのだという、大義名分が欲しかったというわけだ。

俺としても日本の評価を下げることは本意ではない。心から賛成できる作戦変更だ。

STARSとしては、その横やりによって逆に俺を取り逃がすのではないかと心穏やかでなかつたが、まずは安心して欲しい。

万が一にも俺を取り逃がすことはないし、パソコンには俺がワーズワードであるという最小限の証拠も残している。誤認逮捕の線はない。

そもそも、ワーズワードの拠点情報を流した匿名さんはこの俺なのだ。その信用度は100%だろう。

今日は世界の敵『ワーズワード』が逮捕される日だった。

Warp World 03

キンコン

家のチャイムが鳴らされる。

これは、来客を知らせるものではない、作戦開始のカウントダウンの合図だ。

STARS及び警官たちの強制突入まで、あと30秒。

ではこちらもそろそろ『計画』を開始しよう。

そしてそのためにはまず『ミーム』について、少し解説を加えねばなるまい。

ワーズワード始まりの事件、COINサーバーのハッキング。

目的は『ミーム認証』という未知なる技術に対する純粋な興味だったのだが、それをハックし、本質を理解するにあたり、俺は大いなる驚愕に包まれた。

『ミーム』は、個人認証を目的とした単なるヒト識別技術ではなかった。

ミーム情報は、個体を識別する情報でありながら、常に変化する。変化しながら、それでいて常にユニークな個人を指し示す。

最初俺は、それを毎秒変化するパスワードのようなものと認識していた。

だが違うのだ。

例を出そう。

生まれたばかりの赤ん坊のミームを記録したとする。
赤ん坊が成長するにつれ、ミームも増大、複雑化する。だが、それで居て同じその赤ん坊個人を示すことができるのだ。

赤ん坊が青年になる。するとミームは変化する。

青年が食事をする。するとミームは変化する。

青年が恋をする。するとミームは変化する。

不本意ながら、あえて、形而上の言葉を借りて説明するなら、遺伝子がヒトの『肉体』を形作る情報であるならば、ミームはヒトの『魂』そのものの情報なのである。

『魂』で納得できなければそれを『脳』と呼び替えてもよいが、ミームの本質はシナプス配線構造という物理的なものではない。形而下ではそれを説明できない、故に『魂』だ。

そして。

そして、世界銀行協力のもと、天才サー・エクシルト・ロンドベルはヒトから『魂』の電子的コピーを抽出することに成功した。それが『ミーム認証』技術というわけだ。

世界銀行の秘匿する『ミーム認証』が、魂を認証する技術だと理解したときの俺の興奮は、黒歴史として、永久に抹消せざるを得ない。

そして、『ミーム認証』がブラックボックステクノロジーとして秘匿されている理由は、技術的な話ではなく、神学的な理由に由来するのであろう。

とにかく、神の領域を犯す科学技術は、非人道の烙印を押されるものだからな。

ミームについてはこの俺でさえ、その利用法・識別方法を解析できただけで、原理的には全く納得できていない。

だがそれが対象個人を誤差なく識別できることに間違いはなく、俺というイレギュラーさえいなければ『COIN』システムのセキュリティは、最低20年は破られなかったはずである。

……まあ、自画自賛は置いておくとして、その技術をハックし、ミームの本質を知ることとなった俺は、その更に上を行く計画を立てた。

魂とミーム情報は完全なる相似形を保つ。ならば、魂とミームの存在位置を置換することができれば、魂の在処が肉体である必要はなくなるのではないか？

それが俺の発想の原点である。

これは単なる妄想ではない、今の俺　パソコン内のアバターとして思考・行動している状態　が、形だけであれば、まさに『肉体なくして俺自身が存在する』状態そのものだからだ。

この計画により、俺の真なる魂はネット上のアバターに宿り、俺の身体はそのコピー『ミーム』のみを宿することになるだろう。魂なき肉の塊というやつだ。

成功すれば今後必要なくなる肉体だが、それはそれ。長年使ってきた愛着ある俺の肉体だ。

身よりのない俺には、抜け殻となった肉体を維持してくれる親類縁者が居ない。

大手の病院施設に費用を支払えば、ある程度は可能かも知れないが、脳死状態の俺の扱いに対する信用度が低い。

その点、『STARS』は信用できる。

俺のパソコンには物的証拠として、法廷で立証できるだけのものは残していないため、必ず俺自身の自供が必要となる。

彼らは、俺の生命の維持に全力を傾けてくれるだろう。

追求のために。

裁判のために。

正義のために。

それも全て無料でだ。

ドンッドンッ ガシャンー！

ジャスト、30秒。

STARS及び、警官たちの強制突入が開始された。

同時に自衛隊の手によってこの家に対する外部電源供給停止、電波ジャミング（ネットワーク封鎖）が行われる。さすがにそれは対策済みだが。

サイバーテロという個人レベルの犯罪に対しては、結局人間という物理リソースを利用した直接的な武力行使こそが唯一にして、最大の効果を持つのは間違いない。

金属弾頭の制圧兵器により、リビングの強化ガラスが割られ、ハウスキープシステムが警報を発する。

玄関も同じような状況だろう。

全ては、計画通り。

何も知らせてはいないが、『ベータ・ネット』の連中の反応も楽しみだ。

それではそろそろお別れしよう。

さらば、俺の肉体。

俺はそれ以上の感慨もなく、淡々と実行キーを押した。

そして 世界が変わった。

W a r p W o r l d 03 (後書き)

『ミーム』についてはあくまでこの物語の中での取り扱いを説明しています。

一般的にwikiられている概念とは異なるものですので「りょーしょー」お願いします。

つまり「この作品に登場する全ての個人・団体・概念等は架空のものであり、ザッツオールフィクションです」OK？

Warp World 04

まるでブラックホールに吸い込まれたかのような、強烈な引力。それは一瞬の出来事。めまいに似たよろめきと共に、一步を歩き出したことで、そこに大地があることが認識できた。

いや、”歩く”という認識がまずおかしい。アバターにとって、歩くという行動は、歩くという思考であるからだ。

つまり、思考なき行動は、未だ俺には肉体があるということ在意味する。

まさか、失敗、したのか。

考えられない。

だが、まずは現状認識が先だ。
疑問を解消するには、情報が足りない。

それは決して、強靱な精神力の賜物というわけではない、情報不足こそが最大のリスクであると判断した結果の、理性的な行動である。

今度こそ、しっかりと大地を踏みしめ、あたりを見渡す。

.....は？

そして得られた膨大な情報の前に、今度こそ、俺の思考は完全に停止した。

俺が今いるのは、林の中の小径であった。道は平坦ではなく、登

る道と下る道、山間を通る林道か、あるいはそのまま山頂へ続く登山道であるのかもしれない。

高く林立する樹木の群れは、まるで先が見えないが、整地された小径は人の存在を感じさせ、孤立の不安を湧かせることはなかった。

日は高いようだが、高い樹木に覆われた小径に落ちる木漏れ日は少なく、林の中にしては鳥の声も少ない。

それに恐ろしく林気が濃い。濃密すぎる負のイオンは逆に五感を狂わせ、あるいは幻惑するかのようであった。

というか。

……実際にイオンが目に見える。

木々の間を漂う光の粒。大小様々で、小さなものはおそらくゴマ粒程度、大きなものではピンポン球サイズのものもあるため、全てを粒と呼ぶには多少難があるかもしれないが、まあ便宜上『粒』と呼ぼう。

光の粒は、色とりどりである。基本的に白と緑が多いが、中には黄色や青、赤いものが混じっている。視界を遮らない程度に空中に漂うそれは、自分で言った手前の否定になるが、おそらくイオンなどではないだろう。どちらかというと、ネオンの方が近い。

ずっと、手を伸ばして見るが、思った通り触ることができない。触れた瞬間消えてしまったり、あるいはすり抜けたりする。

そして、それはただ漂っているわけではなく、ごく弱い磁力で引き寄せられる砂鉄のように、俺の身体にまとわりついてくるのだ。触れない割に手で払うという行為は有効らしく、軽く手を振ると

散らすことができる。

これは一体なんなのだろう

そこで、俺はもう一つ、この光の粒が集まっている場所を見つけた。

小径に面する、一本の木の裏のあたりになにやらわだかまっているのだ。

「 なにかあるのか? 」

声に出した瞬間、

チャキ

金属が擦れ合う音が聞こえた。

右も左もわからない今の状況では、全てを警戒するべきだという判断の元、その危険性を認め、行動の優先度をその確認に割り振る。

音のした場所へ回り込んだ瞬間、その目前に突きつけられた鋭利な鈍色の反射を認め、俺は脚を止めた。

そこには『武器』を構えた、識別：第一接触者の姿があった。

「杓矢・・杓矢酌軸爵写釈漆灼鳴柴酌」

そして、理解のできない言葉。

「……そうきたか」

俺は、『武器』の危険性よりも、現状認識につながる大きな情報の取得ができたことに、思わず綻んでしまった。

識別：第一接触者の発した言葉が日本語でないことは確定であり、また英語、中国語といったメジャーな共用語ではない。

もちろん地球上には俺の知らない言語もあるうが、俺はそれを、識別外言語であると認定した。

それを肯定する材料の第一が相手の姿である。

そこに居た識別：第一接触者は女性だった、いや……十代の少女と言った方が適切であろう。日焼け一つない、雪の結晶で作られたような白い肌。基本白人の特徴を持ちつつ、髪は青。染めているのでなければ、地球上には存在しない髪の色。耳も不自然に長い。

背丈は俺より20cmほど低い。年齢に合致した身長というよりは、栄養の足りていない人間に見られる、成長不全だろうか。

それを証拠に、少女を構成する身体のパーツ一つ一つが、全て細いのだ。当然のように胸も薄い。

だがそれは、その少女を美しいと表現することをなんら拒否するエレメントではなかった。

事実、美しいのだ。

少なくとも俺は、これほど美しい造形を持つ生身の人間を見たことがない。

その色素の薄い露草色の瞳には、警戒とおびえの色があった。

そして、第二にその衣服。

視線を落とせば、少女が身に纏うのは、金属部分に錆が浮き全体として赤黒く変色した革鎧と、その下には質の悪い麻製と思われる

上下。足元はメーカー印もない、粗末な革製の靴。

手には、これまた博物館でしかお目にかかれないような、アイアンソード。

その重さに耐えられていないため、何ともアンバランスな姿勢になっている。

青い髪と透き通る肌を持つ、まるでおとぎ話から抜け出てきたような少女に、そぐわぬ使い込まれた革鎧。

以上二点を現実をして受け取るのであれば、そんな人間の存在するここは地球ではなく、それゆえ、その言語は識別できるはずもない。それが俺の判断だった。

そもそもアイアンソードの時点でありえないだろう。もしここが地球上であれば、それがどのような最貧国であろうと、武器は銃である。

再度己の心の中に、言葉を落とす。

ここは俺の知る地球ではありえない、と。

W a r p W o r l d 0 4 (後書き)

ここまでのまとめ：スイッチオン 異世界 で4話消費。

W a r p W o r l d 0 5

ここは地球ではない。

その己の判断を支持、即座に「常識」という物事の枠組みを捨て去り、まずはそこまでの認識を持つ。

何も判然らないという状況に代わりはないが、「何も判然らないことを前提に情報を取得すべき」だという行動方針が策定される。であれば、次なる行動は相手に対する前提条件の付与である。

「落ち着け。そちらの言葉は通じていない」

俺は『日本語』で、言葉を紡いだ。

驚きと共に、少女の露草色の瞳に困惑の色が混じる。

そこで少女も気付いたのだろう、言葉が通じていないことに。

その共通認識こそが俺の付与した前提条件。

少女を、言葉が通じないという自分と同じ盤上に立たせたのだ。今後のやり取りは、その共通認識を前提に進めることができる。

「写釈漆灼嶋柴酌？」

おそろおそろ、次なる言葉を続ける少女。

俺はそこから、次なるタスク。その言語の解析作業を開始する。

始め、こちらを警戒していた少女。

得体の知れぬ相手とコンタクトを取る場合の言語選択としては「何者であるかの誰何」「敵味方の判別」「警告」あたりが推測される。

さらに、こちらから「言葉が通じない」ことを直接的に伝えた際の反応が、更なる警戒ではなく、困った様子であったことを考えれば、敵対意志に重きを持つていない、つまり「何者であるかの誰何」に属する言葉であったと仮定される。

そこを起点に、前提条件の付与前後での共通部分「灼嶋柴酌」(の発音)がその「何者であるかの誰何」に属する意味であると、まずは推測する。

その「まず」という仮定を起点に、次は、検証を行う。

この場合の検証とは、それが「あなたは誰ですか?」と言う意図の言葉であると仮定し、同じ言葉を出力する行為を指す。

「灼嶋柴酌?」

補助として、異言語間でもっとも有効な言語「ボディランゲージ」
柔らかな表情と手の平を相手に向ける動作 を交えて検証を行う。
う。

もし先ほどの仮定が間違っているのであれば、間違っていることに属した検証結果が返ってくることだろう。

その時は先ほどの仮定が否定されたと判断し、次の仮定を元に検証を行えばよいのである。

検証結果は明快であった。

「杓、灼嶋柴葱邊紗屢鹿」

少女は少し安心した表情で、そして幾分緊張気味に、革鎧の上に手を沿わせ、そう答えた。

とりあえずは言葉が通じたことに安心したのだと理解して、間違いない所作であった。

先ほどの仮定を正として、そこからさらに解析を進める。一步前進だ。

先ほどの言葉が「あなたは誰ですか？」の意味であるのだから、次の言葉には自己の名前を明かす意味が含まれているのだと推定する。

そこに含まれるべき言語体系としての蓋然性、主語の存在を解析する。

おおよその言語では主語は、文頭にくる可能性が高い。そこに着目すれば先の少女の言葉の文頭にあった「灼」と「杓」、発音の類似性からみても、これが「灼」^{あなた}二人称」と「杓」一人称（私）」であると仮定することは難しくない。

主語につながっており、かつ単文の中で多く出てくる「鳴」の発音部分は単独で意味を持たない接続語であると類推し、解釈上無視する。

同様に名前に関するやり取りから「柴」氏名」の意味、かつそれ以降を氏名の固有名詞であると仮定する。

固有名詞はその意味を追う必要はない。発音そのままのでよい。

であれば

紗屢葱邊鹿〃シャルローフェルニ。それが彼女の名か。

まず少女と指さし、

「灼嶋柴『シャルローフェルニ』」

「簾！」

コクコクとうなずく少女。長い耳がピコピコと動くのは感情の表れだろうか？

問題なく、通じているようだ。

そして、次は自らの胸に手を沿わせ、

「灼嶋柴」

……そこで、一つの思考が挟まれる。

俺の名前。当然日本人として名乗るべき、呼ばれるべき名がある。だが、俺は先ほどその肉体に別れを告げたばかりだ。

であれば、俺の名乗るべき名は、

「灼嶋柴 『ワーズワード』」

であるべきだろう。

「簾！ 燦璽燦璽！」

こちらを指さす仕草。ちゃんとコンタクトが取れたことに、喜びのままの笑顔になる少女。

アイアンソードの切っ先は既に取り下げられ、その重みで柔らかい腐葉土にめり込んでいる。

意志疎通の第一段階がクリアされた瞬間であった。

始めにあつた警戒は、こちらがあまりに無防備であること、さらに片言であれ言葉が通じることと払拭されたい。

もちろん装うまでもなく、敵対意志はないのだから、これを機にさらなる解析と検証を進めさせてもらう。

わからないものをどの程度わからないのか判定する。次に手持ちの情報を元に順次解析する。

データを取得し、仮定し、検証する。仮定が間違っていれば、立ち戻り、訂正を行う。

その繰り返しを一つのプラクティス単位とし、反復を繰り返す。つまり会話を続けることでその精度を高めていく。

それは驚くべき言語感覚と映るかも知れない。

だが、『世界最高のハッカー』と呼ばれた、俺にとってはなんら苦のない作業。

そう、これはハッキングである。

その対象がコンピュータプログラムから、不明な言語に変わっただけである。

もちろん、ここにエアロビューの一台でもあれば、その効率は更上がることだろうが、俺にとってはデータの展開先が、パソコンのメモリ上であるか己の脳内であるかの差だけだった。

どうと言うこともない。さあ現状分析を続けよう。

「えっ、本当に、全く言葉がわからなかったんですか？」

「正確には今でもわかってはいない。俺の言葉が通じているのか、シャル　君の反応を常に確認している」

「ちゃんとお話できていますよ。最初だけわかりませんでしたけど、その後は全然」

林中の小径を、下る方向に歩きながらの会話である。

シャル・ロー・フェルニ。見た目上の年齢は十代前半。

線の細い少女であるが、だからといって性格までが細いわけではなかった。

一度警戒がとけた後は、積極的に話しかけてくるため、日常会話レベルなら支障なく会話できるまで言語解析がすすんでいた。

「それは君のその目のお陰だな」

「目？」

自分の目が見えるわけでもなからうが、むうと瞳を中央に寄せようとしている姿がコミカルである。

「俺の国にはこんな言葉がある。『目は口ほどにものを言う』と」

ただ発声だけのやり取りであれば、これほど短期間には解析が進まなかったであろう。

表情豊かな彼女の仕草一つ一つが解析情報の手がかりとなり、検証効率を高めたのである。

「目で喋るんですか！　わ、私はそんなことできませんよっ」

驚きに、彼女の大きな露草色の瞳が、更に見開かれる。

「いや……それは物の例えであつてだな。こちらの場合で言えば『耳は口ほどにものを言う』か？」

「こんどは耳？」

小首をかしげるかわりに、その長い耳がへによりと折れる。

この世界の人間の特徴なのだろうか？

彼女の感情に合わせるかのように、ピコピコと動くその耳は見ていて飽きない。

「ちよつといいか」

「はい？」

さわっ

気になったので、触ってみる。

瞬間、ビクンと、シャルの身体が硬直した。

「ッ！」

「ふむ？」

やわらかい。

さわさわっ

さわさわする回数に合わせて、シャルの新雪の肌が徐々に赤熱し、露草色の瞳がまんまるく見開かれていく。

「兒、」

「ぴ？」

「兒黠靈熙熙兒熙罕　！」

林間にこだまするほどの高い声が、響き渡った。

キーンと突き抜ける耳鳴りに耐えつつ、

「すまない、今のは聞き取れなかった。もう一度頼む」

俺は冷静にその言語の解析に入る。

ズザツツと跳ね飛ぶように身を離すシャル。耳が針金でも入ったかのようにピーンと、立っている。

それを両手で隠して、半涙目で、俺を睨み付けるシャル。

睨み付けるその表情もまた、魅力的である。

「にや、にやにをしめるのですかあ！？」

「耳を触らせてもらったただけだか」

「み、み、耳れすよっ」

「耳だな」

「だ、だめでしょ！？」

「だめなのか？」

「あ、あたりまえですっ！」

なぜか口調が乱れているシャルに対しあくまで冷静な受け答えを行う。

その淡々とした姿にシャルは、大きいため息を落とすと、

「そうでした、ワーズワードさんはこのあたりの人ではないんですよね。……今回は許します」

日本からきたということはすでに伝えてあったが、シャルの中では「どこか遠い場所」というインプットがされたようだった。

日本が別の世界にある、などということは想像の埒外だろう。俺も細かい状況を伝える気はない。

情報取得の作業を優先するためだ。

「そうか、ありがとう」

「今回だけですよ!」

「わかった。次からは許可を取ることにする」

「きよ、許可なんてしませんっ!」

真っ赤になりながら、断言するシャル。

たわいのない、じゃれ合いのような会話。

こんな会話をしたのはいつぶりだろう。

……いや、おそらく俺自身で言えば、そんな経験はないはずだ。

ドラマかアニメか、作られたコンテンツの中のキャラクターが行っていたものを、己の体験として錯覚したのだろう。

それを寂しいことだと考える人間もいるだろうが、まあ今時の若者の経験値など、そんなものだ。

「……うつゝ、ワーズワードさんはいじわるです（小声）」

その小さな呟きもしっかりと耳に届いているが、意図的に無視す

る。

折角コミュニケーションがとれるようになったのだから、質問したいことは沢山あるのだ。

「それより、さっきから空中に漂ってるこの光の粒がなんなのか、教えてくれないか」

「光の粒……ですか？」

シャルにまわりついているのは、主に白い光の粒である。

俺の方は、色とりどり、手で払わないと視界が遮られるほど集まってきたうつとおしいのだが、シャルの方はそれほど多数ではないため、気にならないのだろうか。

「なんですかそれ？」

シャルがきょとんとした表情で、問い返す。

丁度、その大きな瞳の前を、大きめの光の粒が通過するが、シャルは全く反応しない。

「……見えていないのか？」

「ええっと、光なら見えていますが」

「それは、地面にできた木漏れ日の円だろう」

「これだ、これ」

試しに、自分にまわりついているものの内、一番目立つ赤色の粒を指さしてみるが、

「ん、すみません、わかりません」

耳をへによりとさせるだけだった。

それはそれで、十分な検証結果である。
シャルに見えないものが俺に見えている、
という情報が得られた
わけだ。

W a r p W o r l d 0 7

「あの」

「なんだ」

「こんな山の中に突然現れるなんて、ワーズワードさんは殃濬櫛なんですよね？」

「殃濬櫛？」

「はいっ、傷を治したり、遠い距離を転移したり、雨雲を呼び寄せたり！」

……ふむ、科学的な話ではなさそうだな。「殃濬櫛」魔法使い」
くらいに置換しておくか。

しかし、中世さながらの鉄製武具に、魔法などというファンタジーまで存在するとは……いや、逆にそれくらい物理法則を無視する『超理』があつたほうがまだ今の状況は説明できると言うものか。

「いや、違うな。俺はただのワーズワードだ」

「普通の人にはみえませんか？」

「確かに耳は長くないがな」

「み、耳の話題からはもう離れてください！」

いい反応である。

このネタはしばらく引つ張れそうだ。

「その無邪気な微笑みが逆にこわいです……あの、じゃあ、これからどこへ行かれるんですか？」

「正直決めかねている。この場所にいる理由も実はわかっていないんでね」

「じゃあ、お国に帰られるんですか？」

……それには即答できない。

帰る　帰ることができるのか。

帰れたとして、俺の肉体は今頃、拘置所の中だろう。

いや、その思考にも破綻がある。

今ここにある肉体はネットで使っていたアバターの姿ではない、生まれ育った俺の姿だ。

肉体ごと転移したというのなら、あれだけの完全包囲を敷いておきながら、俺を取り逃がした日本警察とSTARSは、今頃ネット上で大いに笑い物にされていることだろう。

その祭に参加するためだけに、帰りたい気持ちはある。

だが、現時点でその方法はわからず、そもそも肉体ごと転移したという発想も違和感がある。

肉体ごとの転移であれば、それは神隠しとも言つべき、可能性コンマ以下フォーナインの世界だ。

自室で、あのタイミングでそれはありえないと考えて良いだろう。俺の計画のどこかにバグがあり、その結果が今の状況につながったと考えるべきである。

しかし、現時点では完全に情報不足だ。

「……帰りはしない。仮に、それを目的にしても情報がたりない」

「情報、ですか」

「ああ、もっと情報がほしい。会話はシャルのおかげで、多少できるようになったが、現状認識が正確ではなければ、必要な情報の取

捨選択ができない。この地の人間がどれほどの文明レベルを築き、どのような生活をしているのか。シャルの言う魔法使いとやらにも興味がある。もっと情報の集まる場所へ行きたい」

「な、なるほどっ。難しい話なのですねっ」

……理解を放棄してまで、無理に相づちを打たなくてもよいのだ
がな。

「……あー、村とか町、そういった人の集まる場所に行きたいということだ」

「あ、それなら行き先は一緒です！」

弾んだ声。初めてあつた相手になぜこれほど気が許せるのか俺には謎だ。

「ここ、ニアヴ治林を超えれば、『愈洒釈臺』はすぐですし」

愈洒釈臺「ユーリカ・ソイル」。

新しい単語である。文脈を考えれば、土地の名前か国の名前だろう。

「『ユーリカ・ソイル』はこの国では二番目に大きい街ですし、その情報っていうのも売ってると思いますよっ」

「いや、買うものでは……いや、買う場合もあるか。そこまで同行してもらえと言うことか？」

「はいっ、もちろんです！」

耳がピコピコと激しく上下する。

自分が、人の役に立てることが嬉しくてたまらないといった様子だ。

喜びを隠しもしないその姿は、俺に若干のとまどいを与える。

高度にネットの発達した現代において、人は知識に、感情に、無知ではられない。

ネットを利用するものが無知であるのは、リスクである。

単なる無知は蔑まれ、更なる無知は攻撃され、金を持つ無知は喰い物にされる。

結論として、アホはネットを使うなということだが、生活から切り離せない以上、人はどうやっても清濁併せ持つネットに適応しなくてはいけない。

自らの全てをさらけ出すのはアホのことだというのは、これはもう常識である。

まず疑う、必要以上の情報を出さない。明るく振る舞うのも、バカをやるのも、ネット上に自分で作り上げた人格であり、それは純粹さとはかけ離れた、計算されたものだ。

だが、シャルは違う。

俺は何一つ彼女に信用されるような言動を取っていない。

『相手を信用することが人間関係の始まりです』

そんなコミュニケーションは地球では絶滅している。

全く……ここでは地球の常識は通用しないではないか。

この地は確かに、異世界であつた。

「ユーリカ・ソイルまではまだかかりますし」

ネット上に復元されるべき俺の魂が、この異世界に飛ばされたことは、自分の能力にマイナス評価を与えるべき、計画の失敗ではあるが、

「もっと色々お話できますねっ」

シャルの笑顔を見ると、その全てが失敗ではなかったと、そう思えるのも事実だった。

Warp World 08

俺の今居る場所は、ニアヴ治林という場所であり、直近の街ユーリカ・ソイルには日が沈むまでにつけるらしい。

ちなみに固有名詞については、自分で理解しやすいようカタカナ表記できるレベルに脳内意識しているので、厳密な発音としては正確ではない。

シャルに話す際には、こちらの言葉にエンコードしなおして発声しているため、そこでの意思疎通に問題ないというわけだ。

相変わらず、まわりついてくる光の粒がうっとおしい。

シャルは、自分に見えないものが俺には見えていることに、不思議さを感じてはいないようだ。

シャルにとつても、俺は異なる文化圏から来たよそ者である。

異文化交流で相手を否定せずありのまま受け入れられるのは、知性が高い証だ。

剣やら鎧やら、ぱつと見の文明レベルは低そうだが、この世界の教育レベルは案外高いのかもしれない。

それとも、シャル個人の資質に由来するものだろうか。

「少し時間を取ってしまいました。急ぎましょうか」
「諒解した」

申し訳程度だが、縁石が敷かれた小径。

歩くことに難はなく、かつなだらかに下る道なので、体力に自信

のない俺でも大丈夫だろう。

歩き始めた瞬間、道の前方で、ただ漂っているだけだった光の粒の動きが乱れた。

思わず立ち止まる。

「どうかしましたか？」

「……いや」

10つの大きめの光の粒が一定間隔を置いて、空中の固定される。そして、光の粒が弾けた。

「くっ」

「きゃ」

眩しさに、思わず目を覆う。この光の爆発はシャルにも見えたようだ。

直後、声が響いた。

「そこで留まるがよい」

目の前に、唐突に、巨大な一匹の虎が出現していた。

物理法則をあざ笑うかのようなその出現は、全く持ってファンタジーである。

「あ、あ、あ」

シャルの顔からは既に血の気が引いている。
ぺたりと腰を抜かし、耳は降伏の証のように垂れ下がっている。

少なくともそのお腰に付けたアイアンソードの出番はなさそうである。無駄な抵抗的な意味で。

……しかたない。

俺は一步踏み出すと、シャルを後ろに庇うようにその生物と対峙した。

「ほう、お主は恐れんのか？」

虎が、くつくつと嗤う。

四肢をついた状態で、その口の位置は俺の頭を越えている。立ち上がれば、4メートルは軽く超えそうだ。

「……逃げない理由は三点ある。一点は、お前が言葉を喋れるという点だ」

「ほう」

「わざわざ姿を現し、声をかけてきたということは、俺達に即座に危害を加えるつもりが無いということだ」

俺の言葉に、真実は半分ほどしか含まれていない。

実際はこのような化け物と言葉が通じるからといって、それがそのまま安全であるとは考えていないからだ。

「くつくつく、私の姿を見て、恐れぬ理由がそれか。ではあとの理由は何んだ？」

なおも嗤う虎。

安全と判断した、二点目の理由、それはどうもこの虎は張りぼてであるようだからだ。

……声は確かに目の前の虎が発している、ように見える。

だが、俺の目には、虎がリアルな立体影像にしか見えないのだ。先ほど弾けた10つの光点は、虎の額、口、首、背、手足、そして尾の位置でいわば星座のように、今も輝いており、それが虎の皮を被っているだけにみえる。

実体のないものを恐れる理由がない。

そして、さらにもう一つ。

俺は、虎の更に後方、背の高い木へと視線を延ばす。

「ッ、貴様、どこを見ている!」
「ひっ!」

シャルの小さな悲鳴。

俺の視線に気付いた虎が威嚇する。が、その行為自体が、墓穴である。

俺の考えが正しいことを裏付けるだけの行為だ。

そう、俺の見る先、木の高い枝に俺やシャルのような光の粒が集まっているのである。

そして、そこから、糸を引くように光の筋が虎へとつながっている。

「二点目は飛ばして、三点目だ。……自分の姿を現さず、裏に隠れているような相手を恐れる理由がない」

「なんだと」

俺の視線は既に虎をみていない。

「冷静に行こう。そちらの意図は知らないが、少なくともこちらに敵対の意志はない。話がしたいなら姿を現せ。それでこそフェアというものだろう?」

……これもまた半分は真実ではない。

有利に交渉を進めるには己の位置を明らかにすべきではないからだ。

だが結果、相手が姿を現そうと、隠れたままだろうと、どちらでも良い。

挑発を込めた俺の言葉に対する反応で、まずは相手のレベルを判断できる。

ボールを投げ、その反応を検証する。検証結果からより己に有利な結論へ到達すべく、相手を誘導する。

これもまた、ハッキングの手法である。

俺は危険を感じるより先に、新しい情報が増えることに喜びを感じていた。

ふいに、虎の口調が変わった。

「くつくつくく! お主、なかなか面白いわな!」

それは女の声であった。

W a r p W o r l d 0 9

ガサリと音を発して、木の上からそれが、飛び降りてきた。

その身には、やはり光の粒がまとわりついている。

想定通り、この光の粒は人間、あるいは生き物にまとわりついでくる習性があるのだろう。

虎を左に従えるように降り立ったその姿は、

「……狐？」

「いと聡き汝に敬意を表し、我が身を顕そう。妾はこのあたり一帯を治める『ニアヴ』」

それは人の姿をした狐だった。

中世風のシャルと異なり、緩やかにそして大きく胸元の開いた布の衣装はまるで浴衣か巫女服か。

茶色く毛の生えた獣の耳、大きく太い尾。人語を話す狐の化生といえ、もうそれは決まっている。

「……九尾だと」

「九尾？　どこから見ても一本しか生えておらぬがのう。お主の目にはどのように見えておるのじゃ？」

おっと、俺としたことが、つい口に出てしまった。

「ま、まさか本当に、ニアヴ様っ!？」

「ふふん、無論じゃ」

「知っているのか、シャル」

「は、はい。街や村を治める群兜様マードがいるように、森や山にはその

地を治める濬獸様ルイヴァがいらつしゃいます」

判然らない単語はマーキングしておき、後で解析するリストに加えることにする。

「濬獸様の治める土地では、人は獸に襲われることはなく、交通の安全が保証されるといいます。お姿を見たのは、私も初めてなんですけど……」

「深き山林は人の地ではない、故に侵すべからず。だが、人もまた神の嘉よみしたもう子、故に見守りたもう。不侵の条約と引換に、交通を許可すると、ま、そういうことであるな」

得意げに、高らかにのたまわう狐の声。

なるほど、論理的な交換条件である。それでシャルのような少女でも一人で行動できるのか。

「汝らの名を告げよ」

「あ、すみませんっ、私はシャル・ロー・フェルニと申します！」

「……ワースワードだ」

「ふむ、素直でよろしい。妾の目は、この山林の中であればどこまでも届く。お主らを見守るとともに、無法を働く者がおれば、即座に駆けつけると言うわけじゃ。故に」

狐の化生 ニアヴが一端、口を閉ざし、凝じっと俺の全身を目踏みする。

「……お主は何者じゃ？ 強力な何かが迸ったと思うたら、妾の治地に覚えのない人族が一人増えておるではないか。その上【リープ・タイガー／飛虎】に対して動じず、おまけに妾の存在に気付くとは……くっく、お主、さぞ名のある魔法使いなのであるうな」

ニアヴは、まるで興味深いおもちゃを見つけたかのようににやにや笑う。

一方俺は、

「ふむ、数と大きさ、それに色にも共通点がないか。これでは判定基準にできないな。であれば、単純に光量をその観測単位とするかどうかにしても正確な計測ができない以上、俺自身を計測基準100カンデラとして、相対光量を数値化」

「……は？」

全く別のことを考えていた。

「100からの相対比。シャル5カンデラ、ニアヴ30カンデラと言ったところか」

やはり、俺の周辺だけ異常に眩しすぎる。

「だからっ、お主何を呟いておる！」

「お前が操っている、この光の粒の話だ」

「光の粒？ なんじゃそれは」

「……見えないならいい。少し待て」

「お主っ！」

ふよりと目の前を横切るそれを、手で払う。
ならばこれは一体なんなのか。

……一つの仮定は既に俺の中にある。

大氣中に漂い、触れることのできない色とりどりの光の素粒子。
それは目の前の虎の姿のように、コントロールできる代物であるらしい。

とすれば

「すまない、待たせた」

「お主、無礼なのか慇懃なのか、どちらなのじゃ？」

「その判断はそちらですればよい。先ほどの質問だが、俺は期待されている魔法使いという存在ではない。だが、その魔法とやらを使える可能性はある」

「わからぬ言い回しじゃな。結局の所どうなのじゃ」

「そうだな……その魔法というものをここで使ってみてくれないか？」

それで明瞭^{はっきり}するはずだ。

「あの、ワーズワードさん。濤獣様はこの山林の守り神様のような存在です。なのでそういうお願いは……」

「だめなのか？」

「よいよい。妾は面白いものが大好きじゃ。見せろというのなら、見せてやるうではないか」

じゃれるように頬ずりをしてくる【飛虎】を撫でながら、ニアヴが鷹揚に答える。

……あれは、実際に触れるものだったのか。実は危なかったのか
もしれない。

単なる立体映像と認識してしまった時点で、まだ既成概念から抜け出せてはいないようだ。

この地でのリスクマネジメントレベルをもう少し引き上げた方が
良さそうである。

ニアヴがその腕を前方に延ばす。精神を集中していると思われる、
数瞬の間。そして、

「 発火せよ【コール・フォックスファイア/狐火】」

それはまさに力持つ異界の言葉だった。

【フォックスファイア／狐火】

その発声の後、その掌の上で光が弾けると同時に、巨大な黄金の炎が燃え上がった。

炎は、キラキラと高く吹き上がるが、まるで熱を感じない。

「わ、きれい」

「ふふん、人族の使う炎とはひと味違うであろう。【狐火】は意志持つ炎。自然の木々を傷つけることなく、悪しきもののみを焼き尽くす我が族の秘術であるからな」

「は、はいっ。こんなのきれいな炎、見たことはありません」

「ふふふん、そうじゃろう、そうじゃろう！ ワーズワード、お主はどうじゃ？」

自慢気に、というよりも、褒めて欲しいオーラを発散させてこちらを覗き込んでくる狐。

だが、その期待はスルーする。検証が先だ。

「こうか？ 【狐火】」

見よう見まねで、握っていた掌を開く。

俺の掌中で光が弾けると共に、そこには狐の産み出したものと同様の黄金の炎が渦を巻いて燃え上がった。

「わ、やっぱりきれいですね」

「……………はああ！？？」

二つの炎を忙しく目で追うシャル。

あんどりと口をあけて、炎をみつめるニアヴ。

なるほど、やはり、そうか。

俺の仮定は正しかったわけだ。

「ばかなっ、なぜ我が族の秘術を使える！」

「見せてもらったからな」

「……技を盗んだというのかや」

「いや、それは少し違う。俺が見せてもらったのは、魔法とやらの発動方法そのものについてだ。初めてにしては上出来だろう」

「は、初めてじゃと！？　ありえん……魔法とは、強大なる力。我ら狐族であれば一族秘伝、お主ら人の子たちとても、国や組織に管理されておるはずであろう！　見たから使えるなどというものではないわっ！」

その勢いに押されるように、シャルが素早い動きでうなずく。

説明責任はないのだが、要望通り魔法を見せてくれたのだから、こちらもある程度の情報開示は必要だと判断する。

逆に言えば、ここで秘匿するメリットもないという判断だ。

「それを説明するのはやぶさかではないが　まず前提として、さつき二人に聞いた『光の粒』について話しておこう。二人には見えていないというが、この林の……大気の中には色とりどりの光の粒が漂っている」

「光の粒じゃと……？」

とまどう様にキョロキョロとあたりを見回す狐。まあ見えないの
だろう。

「そして、この光の粒は生き物にまわりついてくる性質があるらしい。それはシャル、そしてお前の二人とも同様だ。木の上に居る
お前に気付いたのもそれだ。なにせ光っているからな」

「はあ!？」

それで、気付かない方がおかしいというものだ。

「この光の粒がなんなのか、始めは俺にもわからなかったが、先ほど
見せてもらった『魔法』　それで確証を得られた。これは『魔法』の発動に
関係している」

それが俺の出した第一の仮定だ。

「……聞かせてもらおう」

身を乗り出すように、食い入ってくる狐。シャルの耳も、その一言
一句を聞き逃すまいとピンと立っている。

この目は俺にも覚えがある。新しい知識への期待、知らないことを
知る欲求、それは世界が変わろうと、普遍的なものであるらしい。

「その虎は、10つの光の粒が骨格となっている。最も大きい額の
それは黄色。顎にあたる部分が赤。残りの支点が白い粒だ」

俺はそれを一点ずつ指で指し示す。

二人は、頭に疑問符を浮かべながらも、それを目で追う。
もちろん見えてはいないのだろうが。

「次に、実際に見せてもらったこの黄金の炎。火種部分に『それ』が4つ使われている。基底に赤、赤、赤。頂点が黄色の三角錐の形につながっている形だ。お前の手のひらの上で三角錐の形をなした光の粒が、魔法発動の言葉により、発光し、炎に変化、つまり魔法と呼ばれる現象を引き起こした。それが俺の観察した内容だ。つまり魔法とは、この光の粒の組合せとその発動の二点がトリガーとなり発動するものであるのだろう」

ここまでは、単純な理論と観察の積み重ねである。
二人の反応を待つことなく、先を続ける。

「そしてこの光の粒、ただ手を伸ばすだけでは触ることはできないが、邪魔だと思えば、払うことはできた。そこから何かしらの意志を持てば、コントロールできる存在であることが判然。光の粒を見えないお前や他の魔法使いとやらは、見えないなりの修練や経験則でコントロールしているのだろうが、その動きが見える俺は明確な『光の粒の操作』でその三角錐の形を作り出すことができたというわけだ。結果は見ての通り」

更に言えばその発動におそらく『発声』は必要ない。『発声』の裏にある魔法発動を『念じる』部分のみが必要なのだと思われる。これもあとで検証を行うことにする。

愕然とするニアヴ。

「魔法が光の粒！？ あ、ありえん……」

「よくわかりませんが、すごいですっ！ やっぱりワーズワード

さんは魔法使いだったんですねっ」

「違うと言いたところだが……一回とはいえ、実際使えたわけだから、否定はしないでこつ」

『ウィザード』という異名もまた、ハッカーとして拒否すべきものではないしな。

「じゃが……いや、それでは説明が……」

ぶつぶつと、何事が呟いている狐はとりあえず放置でよいとして、この【狐火】である。

折角出たのだから、その威力は知っておきたい。

一本の木を照準し、炎の中でくるくる回る三角錐にターゲットを燃烧するよう『念じる』。

三角錐がそれに反応、炎が大きくふくれあがったかと思うと、ターゲットに向かい、一直線に飛行した。

ふむ、我が事ながら、すごいものだ。

劫ッ、とまるでナパーム弾の様に、炎が粘性をもって木に巻き付き、その芯から焼き尽くす。

そういえば、巨大な本物の炎、こういったものを見るのも初めてだ。ネットで火山雷や流れる溶岩の動画を見たことはあっても、やはり目の前に見る本物の炎の圧倒的な感動は別ものだ。

「おお、よく燃える」

「ハッ！ くおおお、お主、目を離れた隙に何をやっとなるんじゃ！ 他の木々に燃え広がったらどうする！」

「そうだな。すまん」

「すまんではすまんわー！

降下せよ」

狐が慌てて、別の魔法の準備を始める。

俺は、そこに集まる光の粒の動きを冷静に窺う。

見るべきは光の粒の動き　ニアヴにまとわりつく光の粒の中から、青×3、白×3の光の粒が集められ、六角形が形作られていく様が観測される。

「【コール・ウォーターフォウル・レイン／降鵜雨】！」

発声と同時に、光の粒は六角形を拡大させつつ、燃えさかる木の頂上に広がり、そこに極地豪雨を降らせた。

火勢は途端に弱まり、一面を水たまりに変えて、やがて木の燃焼は完全に消し止められた。

【降鵜雨】　単純明快に大量の水を産み出す魔法と認識する。質量保存の法則に当てはめられないこの現象はまさに魔法だった。

……これで火と水には困らなくなったな。

狐が不承不承という様子でこちらを向き直る。

「……信じざるを得ぬか」

「無理に信じる必要はないぞ？　どうせ見えないのだろう」

「そういう問題ではないわ、阿呆めっ！　お主が今言ったことは、神の不在証明と同じじゃ！」

「神？」

「え、えつとですね。私は魔法のことは詳しくありませんが、例えば火の魔法は戦女神・熙カグナ？　碎様に授けていたかどうかという話を聞いた

「ことがあります」

「我らの神は人のそれとは違うが、どちらも同じ神が名前と姿を変えたものだと言われている」

魔法のある世界にも神はいるらしい。

人間とはよくよく偶像崇拜が好きな生き物だ。

「だが、事実だ」

「それが危険じゃというておる！……お主、下手をすると『世界の敵』になるぞ！」

「……………」

「そっじゃ、よく考えることじゃ」

俺の沈黙を、都合良く受け取ったらしい狐がうむうむと大きく頷く。

「光の粒とやらの話。それは危険じゃ。異質な考えを持つ者は必ず排斥につながる。お主が何者かは知らぬが、その力、他の者には隠すべきであろう」

「あ、それでしたら、逆に服装を魔法使いらしくしたらどうですか。それなら魔法を使っても特におかしく思いませんし」

「おお、その方がイザという時にボロが出ぬかもしれぬな、こういうのはどうであろうか」

どこに意気投合する要素があつたのかわからないが、嬉々と対策を上げていくシャルとニアヴ。

輪の外で展開される会話。だがそれらは全くの無価値である。

「盛り上がっている所悪いが、俺は俺のできる全てのことを自重す

るつもりはない。神の不在証明？ そう思いたい者は思えばいい。俺は魔法と神とは、無関係に存在することを証明しただけだ。魔法以外のもので神の存在を証明すればよいだろう。もし俺が再び『世界の敵』となるとしても、それは俺が世界の敵になるのではない。世界が『俺の敵』になるということだろう」

「ふたたび？」

「いや、そうは言うがな。妾はただ、お主のことを心配してじゃない」

……同じだ。地球もこれも。

「違うな。お前が心配しているのは俺ではなく、自らの安寧だ。俺が自由に振る舞うことにより、自分の生活に生じるデメリットを計算しての結果だ」

「なっ、そんなわけなからう！」

俺は、怒りをも発するその獣の光彩を正面から見据える。

「……ならば、なぜ真実を隠そうとする？ なぜ己のできることを抑制する？ 自らの可能性を塗り潰し、群れに紛れ、誰でもない名無しのワースワードとして生きる提言は本当に俺のためか？」

「そ、そう言うわけではない。お主のいう魔法の原理とやらは、この世界に大いなる混乱を産み出すと言っておるのじゃ。それを望むというのかや」

「それもまた違う。お前の言う『混乱』、それは『改革』というべきだ。この世の成り立ちたる自然原理が一つ明らかになり、それに

より古い常識が一つ失われるだけだ。それを拒むお前の発想は変化を嫌った保守という名の『今』の引き延ばしに過ぎない」

ぐっ、と言葉を飲む込む狐。俺の指摘を理解するだけの知性はあるらしい。

シャルにも何かしら琴線に触れる部分があったらしい。今までにない真剣な瞳で話を飲み込んでいる。

音の消えたかのような濃密な沈黙。

十分に沈黙が浸透したことを確認した後、俺は言葉を続けた。

「……だから。もし俺の為だと言うのなら、俺の行動を制限する方向ではなく、俺の行動をサポートする方向で力を貸して欲しい。シャル、君に逢わなければ、言葉もわからず。ニアヴ、お前に逢わなければ、魔法とはなにかも知ることのできなかった身だ。何も知らない俺には君たちの助けが必要だ」

言葉の通り、俺は自分にできることを自重しない。

今の俺にできることは、二人に助力を請うことだった。

W a r p W o r l d 10 (後書き)

一話5分だと話数だけ無駄に増えそうなので、一話の分量を変更しました。

まだまだ、俺が一人で行動するには情報が足りていないのが現状だ。

俺はまごうことなき流浪者であり、今一人で行動するリスクは、死に直結するものだ。

「もちろんですっ！ ……私は魔法のこととか、神さまのことはよくわかりません。ですけど、さっきのワーズワードさんのお話は、あの……その通りだと思いました！ できることがあるのに……それを諦めて、自分を押さえつけるなんて、確におかしいと思います！」

「……ありがとう、シャル」

心強いうなずき。 ……彼女にもなにか抑圧された経験があるのだろうか。

未だ難しい顔をしたままのもう一人に向き直る。

「俺たちをこのまま通してくれるだけでも良い。行く先はユーリカ・ソイル。このまま別れば、迷惑をかけることもないだろう」

「……うむっ」

是と否とも取れない唸るような返事。

先ほど俺が語った『魔法の原理』、俺だけが見えるという『光の粒』。それは、どうやら非常識なものであるらしい。その上、魔法というものをまるで無自覚に発動させる俺という存在を、同じ魔法の使い手であるニアヴは、そうそう無視できないのだろう。

今のニアヴの感情を一言で言えば迷い。
責任と不安。危惧と興味。風さえ吹けば、どちらにも倒れる弥次
郎兵衛である。

つまりそれは 全ての決定権が俺にあることと同義なのだ。

一步。二歩。腕を組み、思考に深みに嵌り込んでいるニアヴは、
俺の接近に気付かない。

三步。その形の良い顎に右手をすつと伸ばし、グイと少し強引に
上を向かせる。

「ふあ！？ な、なんじゃっ、いきなりっ？」

その大きく見開いた目が左右に泳ぐ、顔を背けようとするが、俺
はそれを逃さない。

逆にぐつと引きつけ、瞳と瞳を固定する。

その近さに狐の頬がさつと朱を帯びる。

「迷うくらいならば ニアヴ、お前は俺についてこい」
「にゃあ！？」

それは純粹に驚きの声なのだろう。

尻尾がぶわつと太く逆立つ。

後ろで少女の「きゃー」という黄色い声が聞こえるが、完全に無
視する。

「な、なにを言って」

「人と人の出逢いには必ず意味がある。出逢うべくして出逢った。
それが今だ」

有無を言わせぬ断言。

正確には、ただの出逢いに意味などない。意味を付けることができるだけだ。

このセリフのように。

「お前には強い力があり、高い知性があり、誇る美しさがある。だがそれは、観測する者がいて初めて認識されるものだ」

「わ、妾が美しいっ？ ま、まことかっ？」

……反応するところが想定と違ったが、とりあえず肯定しておく。

「森の生活は退屈だったのだろうか？ それはお前を観測する者がいなかったからだ。お前にはお前を観測する誰かが必要であり、俺もまた同じだ」

「な、ななな」

「だから、俺についてこい。それがお前の運命だ」

ちなみに、『運命』という言葉を口にする人間は、アクターか詐欺師のどちらかである。

そのキーワードを出たら、その相手は軽々しく信用しない方がいい。

「……妾は濫獣^{ルーヴァ}じゃぞ？」

「関係ない」

「お主のことを危険だと断すれば、寝首を掻くかも知れぬ」

「本望だ」

全ての言葉を肯定する。

この場で即座に死ねと言われたとしても、俺はそれを肯定しただろう。つまり、これは俺にとってそういう意味しかない会話だ。

だがニアヴにとっての意味は別。
一言ごとに、朱色の支配面積が増えていく。

「妾を敬うことも畏れることもしない者など初めてじゃ……」

「それが俺だ」

「……ワーズワード。お主、本当に何者なのじゃ？」

「それこそ自分の目で確かめればいい。俺についてくれば、きっとおもしろいぞ」

「きゅ、きゅっ……」

手の力を抜き、その身体を解放する。

一瞬名残惜しそうな表情を見せたニアヴだが、次の瞬間には驚異的な跳躍力で身を離れた。

「…ふ、ふん！ やはりお主は危険な男じゃ！」

「否定はしない」

背を向け、腕を組み、フンと鼻を鳴らしす仕草は、昔何かのコンテツツで見たことがあるようなないような。

「ふふふ、じゃが！」

振り返ったニアヴが吹っ切れた笑顔を見せる。

「じゃが、妾は面白いものが大好きじゃ！ ワーズワード、お主は面白い。非情に面白いぞ！ よかろう、お主について行ってやろうではないか！」

「そうか。助かる」

扱いやすくて、本当に助かる。

質の良い情報を得るためには、質の良い情報源が必要だ。

シャルの知識が世間一般レベルであるのなら、魔法というものは、一般人が扱うことのできない特殊技術だということになる。

となれば、次に同じく魔法の知識を持つ者に出会える可能性は、かなり低めに設定せざるを得ない。

この身にまわりついてくる光の粒、これが魔法の源であることは理解したが、それを独自に調査研究していくには、どれだけの時間が必要となるか判然らない。

ニアヴの協力は、俺にとっては不可欠なものであった。

そのために最も有効であると思われる手を、手段を選ばず使わせてもらった。

手垢が付きまくった泥臭い芝居は、ロールプレイ我ながら鳥肌ものだったが、結果が出せたので良しとする。

運命の出逢いを演出する過程で、狐になにか別のことを勘違いさせたかもしれないが、誤解を解くのはのちのちでよからう。

話がまとまったのなら、これ以上のタイムロスは不要である。

「さて、聞きたいことはこの地の木の数ほどあるが」

「あ、あははは」

「勘弁してくりゃれ」

「まずは目的の街へと向かおう」

「はいっ」

「ふむ。ユーリカ・ソイルか……考えてみれば人族の街に下りるのも久しぶりじゃな」

「街は嫌いか？」

「くつくくつ、とんでもない、大好物じゃ！　どんな面白いことが待っておるのかのう」

「……それは重畳」

ニアヴは、巨大な青い虎に飛び乗ると、手招きをした。

「さあ、乗るがよい。【リープ・タイガー／飛虎】の足ならば、あつと言つ間じゃ」

「乗っていいんですかっ？」

それを肯定するように、飛虎はくると小さく唸ると、シャルが乗りやすいよう、腰を下ろした。

先ほどの虎の言葉はニアヴが遠隔で喋っていただけなのだろう。たとえば言葉が喋れないとしても、この虎に生物としての思考があるというのなら、それを一瞬で創り出す魔法とはすごいものだ。完全なAIは科学の極みにある地球ですら、未だ存在していないというのに。

「あ、ありがとうございます、飛虎ちゃん」

「くるる！」

「あぶみ 鎧も鞍もないだと……振り落とされないだろうな……」

「くふ、心配であれば、妾の腰にしがみついても良いのじゃぞ？」

「それは遠慮する」

「即答！？」

「さ、シャルは俺の前に。後ろから支えよう」

「はい、えへへ……」

「くつ、もうよいわ！ 行け、飛虎よ！」

「くるるる！」

まだベストの体勢が決まっていないのに、疾走を開始する飛虎。

「ちょま、お、おおおおお！」

三人と一匹は、情けない悲鳴を尾と引く、一迅の風に変わった。
次なる舞台には一体何が待ちかまえるのか。

そして、ワーズワードの冒険は続く。

W a r p W o r l d 1 1 (後書き)

区切りがいたのでここでHピロ1おわりっ

Wandering Wonder 01

深緑の中を、まるで風の通り道でも進んでいるかのような速度で駆け降りる。

なだらかに下る林道は、適度な明るさと翳りを持っており、緑の滑り台に乗っているかのような不思議な爽快感があったが、山を下りきった地点でそれもついに切れた。

ザア……と、葉の擦れ合う音とともに、一気に視界が開ける。

遙か地平線まで見渡せる開拓された平野は、見事な緑の田園風景であった。

もちろん、地平線といっても所詮は10km程度先にある丘陵まで、という理解になるが、それでもその10km x 視界いっぱいの緑のパノラマが全てが農地であるとすれば、それは広大といっても過言ではない。

道幅も一気に広がりを見せ、そこに残る轍のあとが、移動手段または農耕用としての牛馬の存在を知らしめる。

つまり、この世界は魔法という超理やニアヴという獣の化生の存在があるものの、基本的な人々の生活は農耕を基とした、地に足のついたものであるう。

「見てください！」

飛虎にしがみついていたシャルがまっすぐ前を指さす。

並びはニアヴ、シャル、俺の順。

俺が後ろから抱きしめる形であるため、シャルの腕は、俺の身体の下からニユツと出てきたような感覚である。

その指さす方向、地平の丘陵に人工物の姿があつた。

近づくほどにその高さが露わになってくる。形としては、尖塔。

日本風に言えば物見櫓であろうか。そのような建造物が道の左右に一本ずつ建っている。

「あれは？」

「ユーリカ・ソイルの塞疫臺カラソイルです！」

もちろん、その説明だけでは意味を得ないが、これまで蓄積された脳内データバンクを検索し、即座にその意味を類推する。

まず臺ソイル単体で『門』を意味することは、既にわかっている。

次に、『塞疫』（カラ）であるが、同義発声である『寒』が『翼・羽』、『役』が『赤の色名・熱』の意味らしいので、そこから更に類推し『塞疫』の意味は『飛行するもの』『赤熱した』であると仮定できる。

『飛行するもの・赤熱した・門』

最後にそれをより自分にわかりやすい日本語にデコードすれば

「『朱雀門』か、立派なものだな」

全ては一連の会話の流れの中で同時、もしくは並列解析を行っているので、思考から発声までのタイムラグは微々たるものだ。

「夜になると、塔の先に明かりが灯るんです。すごいきれいなんですよ」

「ユーリカ・ソイルの名物の一つであるな。それも楽しみじゃが、ユーリカ・ソイルと言えば、やはり『アंक・サンプルス』が一番じやろうな」

「あつ、私も大好きですっ」

『アंक・サンプルス』なるものを知らない俺はその会話には混ざれないが、まあ楽しみにしておこう。

新しい情報を得ることはなんであれ、重要である。

『朱雀門』を目前に、左右から更に太い道が合流した。

道行く人群れが目につき始める。

馬車や荷車に混じって歩く、軽革鎧姿の旅行者だか冒険者だかが激しく目立って見えるのは、俺がまだこの現実を受け入れ切れていないからだろうか。

彼らの顔を見ていると、男女ともにやはり、耳が長い。肌の色はシャルほどの白さを持つ者はおらず、みな健康に日に焼けている。髪の色は様々である。

同じく、シャルほどの美しさをもつ美男・美女は特に見受けられないようだ。

この世界の人種全てがシャルやニアヴ準拠の美男・美女オンリーで構成されている可能性もあったので、これも世界を知るにあたり十分有益な情報であろう。

もし全員が美男・美女であつたら、必然的に俺は世界最悪の醜男ということになるので、よかったかもしれない。

いや、客観の評価では、十分標準レベルだとは思っているが。…
…受け入れがたい現実から目を背けた、自己正当化ではないぞ？

シャルが、なにやら言いたそうな視線を向けてくる。まさか心が読まれたわけではないだろうが、その視線に一瞬どきりとする。

「……どうした？」

「私たち、目立つちゃってますね」

「……あー」

既に速度を落としている【リープ・タイガー／飛虎】が、一歩歩みを進めるたびに、ひつという声と共に目の前の空間が空いていく。なるほど、やけに顔の善し悪しがわかると思ったら、みな一様にこちらを振り向くものだから、観察ができていたのか。

「くふふつ、目立って当然じゃ！ なにせ【飛虎】は我がっ」

「一族秘伝の魔法なんだろう。それはいいとして、そろそろ降りて歩くとしよう」

みなまで言わせず、巨大な虎の背から飛び降りる。

なにやらわめいているニアヴを完全にスルーし、シャルに手を貸して降りしてやる。

「くつ、まあいいじやろう。どのみち街に入るには足税の支払いがあるじやろうからな。飛虎に乗ったままというわけにはいくまい」
「足税？」

俺の疑問に、シャルが答える。

「えとですね、街の入門には通過税シットがかかります。人は足が二本なので、一人100シット旗シットですね。馬や牛は足が四本ですから、200シットになります」

「人の方が安いのか」

「馬や牛は、沢山の荷物を運べますから」

なるほど、そういう計算になるのか。

「六足馬なら足が六本なので、さらに高くて300ジットになりま
す」

ふむ、西洋系にアジア系、おまけに北欧神話まで入ってきたか。
ファンタジー

四面四角論理思考の俺には、ここは耐え難き混沌の大地なのかも
しれない。

「ちなみに100ジットというのは、どれくらいの価値なんだ？」

「どれくらい、ですか？」

「そうだな、平均的な宿一泊の値段や、一食分の食事の値段だとい
くらになるのか、という話だ」

「あ、それなら。ユーリカ・ソイルですと、一泊食事付きで80ジ
ットくらいが相場です」

その宿をビジネスホテルレベルと考えて約8000円と計算する
と、1ジット＝1000円。足税というのは日本円換算で約一万円程
度という理解をしておく。

「足税というのは、思ったよりも高いものだな」

「なにをいうておる。街に入るということは、安全が保証されると
言う意味じゃろう。安全が100ジットで買えると考えてみよ。群
れることにより外敵より身を守る、人族が作りだした見事な安全保
障の仕組みじゃと、妾は感心するぞ」

狐の言には一理がある。

「前言を撤回しよう。安全はタダではない、その通りだな。教えてくれてありがとうニアヴ」

「お主が素直に応じると逆に恐いものを感じるのう……じゃがまあ、悪い気はせぬ。くふふふふっ」

なにがどう作用したのか、にやにやしながら、俺の肩をぽむぽむ叩くニアヴ。

当然スルーするが。

「さあ、行こう」

「これ、またんかつ！ む、そのまえに……飛虎、よう働いてくれだな」

「あ、ありがとうございます、飛虎ちゃん。またねっ」
「くるるる」

頭を撫でようと、背伸びをするシャルの頬を一なめすると、飛虎は空へ向かって大きくジャンプした。

飛虎の身体を構成する10つの『源素』がその接続を失う様が見て取れる。

そしてその姿はすっと、宙に溶けるように消えた。

Wandering Wonder 01 (後書き)

二章開始です。登場人物が少し増える。

Wandering Wonder 02

「『源素』？」

「いつまでも『光の粒』ではわかりにくいからな。魔法と呼ばれる現象の『源』となる『素粒子』、故に『源素』と名付けた」

「その源素とやらが、お主以外の誰にも見えず、世に満ちておるといのか……」

俺の源素理論に対し、完全には納得していないニアヴが、青い空を仰ぎ見る。

「更にいえば、人にまとわりついている源素濃度は、個人差が大きいようだ。前の歩いている商人風の男には、殆どまとわりついていない」

「それはそうであろう。源素うんぬんの話は横に置くとしても、魔法を使える才とは、生まれついていたものじゃろう」

「才というよりも、単なる性質だと言える。源素を身に集める性質だ。魔法の素たる『源素』は大気中に遍く存在している。才というほど本人性能に関わらないのではないだろうか。源素を操る技術さえ身につければ、例えば生まれ持った源素を集める性質が弱くとも、それら源素を利用して魔法を行使することは可能だろう」

「……魔法は誰でも使えるということか？」

「結論すればそうなる」

「お主に会ってから、妾の常識が野兎の如く逃げて行くわ……」

「言いぐさだな。あの場で全ての常識を捨て去ったのは、俺の方が先なのだが」

全く持つてお互い様である。

「ワーズワードさん、もう見えてきますよ!」

と、そこまで会話に入っていなかったシャルが前方を指さし、歓声を上げる。

「ああ、俺も見ていた。すごいものだ」

源素についての考察も深めたいところだが、まずは目前に迫った『それ』に、俺の興味は移らざるを得ない。

「はい、これが朱雀門ですっ」

まるで我が事のように胸を張るシャルの姿に、俺は思わず苦笑を漏らす。

とはいえ、そう、確かにすごいのだ。

朱雀門　それは実際の所、門ではなかった。幅が20mほどあり馬車数台が余裕ですれ違えるだけの大道、その両端に立つ円形の尖塔がそれである。中に人が入れる構造であるらしく、物見の窓がいくつか開いており、中に衛士らしき人影も見える。

二柱の朱雀門、陽を受けて赤光を反射する赤い塔と黒光を反射する黒い塔。仮に右を赤塔、左を黒塔と呼ぼうか。

見上げる高さは30mほど、10階建てマンションが丁度それくらいだ。

高層マンション群は見慣れている俺だが、他に同等の高さの建造物がないうちに孤立する朱雀門は、実際以上の高さを感じる。

そして、高さの話をさておいても美しい塔なのである。どちらの塔も、鏡面と言っても差し支えないほどに空や雲を反射している。それも金属光沢を持つ反射光だ。壁面には見事な彫刻が施されており、その繊細さもまた見事の一言に尽きた。

塔の左右には街を囲む石造りの街壁が並ぶが、こちらの高さは3メートルほど、頑張れば乗り越えられなくもない高さであることを考えれば、外敵を防ぐ役割はあまりなさそうである。せいぜい野生の獣の侵入を防止できるくらいだろうか。

ちなみに、朱雀門で徴税を待つ行列は歩行組と馬車組とに別れており、歩行組には二名、馬車組には四名体制で対応しているようだ。

俺たち三人は当然歩行組に並んでいる。馬車組を見るに、先ほど聞いた六足馬とやは居ないようである。ちょっと見てみたかったのだが、居ないものは仕方ない。

歩行組はそれなりの列を成しており、俺たちの番が回ってくるにはもうしばらくかかりそうだ。

「遙か昔に滅び、今やその名も残されておらぬ『古の王国』が建てたものらしいのう」

「ユーリカ・ソイルの街の名前はその頃からのものらしいですけど」「じゃが、朱雀門という呼び名は新しいものじゃがな。今より更に昔には『宝石の塔』と呼ばれておったはずじゃ。各地に残る『潜密鍵』の中でも、特に有名であることには違いないがの」

「『潜密鍵』？」

「えつとですね、すごい昔に作られたもので、何の目的で作られた

のかどうやって作られたのか、今では作り方も判然らないものごとを『潜密鍵』って言うんです。他にも有名なものはいくつかあって、いろんな街の『潜密鍵』を見て回るのは、旅人の楽しみの一つでもあるんですよ」

弾けるような笑顔で、私もそれが楽しみなんです、と付け加える。

ちなみに『潜密鍵』は、言葉の意味を直接変換した結果の単語である。

前後の文脈から、よりわかりやすいよう『アーティファクト』として、脳内辞書に変換登録しておくことにする。

「この朱雀門も元々どういう目的で建てられたものなのか、全くわからないそうです。ぴかぴか光ってる材質が、金属なのか石なのか、それすらもっていう話です」

「なるほどな」

それはそれとして。

「建立目的は判然らないが、とりあえず材質でいうと、赤塔の方は、おそらくチタノヘマタイトで作られているな」

とりあえず、全く判然らないわけではない。

「……んんん？」

「ちたのへまたいと？」

頭に大きな疑問符を浮かべるシャル。

「ああ、あの赤色の金属光沢は二酸化チタンを含む赤鉄鉱『チタノヘマタイト』の特徴だな。空の雲を映すほどの鏡面反射から類推すれば、希少鉱物である二酸化チタンの含有量は相当な量だろう。寶石の塔と呼ばれていたのも納得の話だ。ちなみに黒塔の方も、含有量は同じくらいだな。ただ、主の素材が黒鉄鉱なのだろうから、その主成分は『チタノマグネタイト』だと思うれる」

「にさんかちたん。ちたのまぐねたいと」

疑問符をつけることすら放棄したシャルが、いくつかの単語をただ音のみを拾って復唱する。

「ただのメッキ加工であるなら、長い時間の間にはげているだろう、そうするとやはり材質全てが、単一鉱物でできているのだろうな。なかなか珍しいものだ」

「待て待て待て！」

「……なんだ」

なぜか慌てた様子でぐいぐいと迫ってくるニアヴを、軽く押しのける。

「アーティファクトじゃぞ！？ その材質をなぜ語れる！」

そうは言われても、所詮はヘマタイトである。

『ヘマタイトネックレス』といえば、ネット販売の招福グッズでは定番なので、見た目で大体わかるだけなのだが、さすがにそこまです説明するのは面倒である。

「たまたま知っていたただけだ。単なる雑学だと思ってくれ」

「ざ、ざ、雑学……」

口をパクパクさせるニアヴ。

「私にはよくわかりませんでしたが、ワーズワードさんは物知りな
んですね」

「まあ、これくらいならな」

素直な賞賛はありがたく受け取っておく。

「そういう話では、ありえんのじゃー!」

その声に関わり合いを避ける方向に思考が向いたらしく、特にそれ以上の反
応はない。

俺は、キンと響く耳を押さえつつ、

「じゃあ、今のなし。俺は何も知らない」

とその場を納めることにした。
面倒なやりとりは避けるに限る。

「はあああああ??」

「さて、そろそろ俺たちの番も近づいてきたな。そういえば、その
足税というのを払えない人間はどうすればいいんだ? 金銭の類は
一切もってないんだが」

「あ、それでしたら私が」

「ま、待て待て、待たんか!」

「……まだなにかあるのか」

「当然である、なしってなんじゃ!」

「ないものはない。知らないものは知らない」

「通るか、そんな話！」

「そうそう、その門を通る話なんだが、さすがに金に関してまで世話になるわけにはいかない」

「そうですか？」

その驚いた表情から、シャルは当然のように、自分が足税を出すことを考えていたらしい。善良な子である。

「えっと、それでしたら税符を受けることになると思います」

「税符？」

「税金の滞納書と言ったほうがいいでしょうか。当然税符分の金額を支払うことで償還できますが、そのお金のない人は、特定の労働で代償することもできるんです」

「なるほど」

「100ジット分の労働となると、結構きついと思いますが……」

「問題ない。なんとかなるだろう」

ならなければ、その時はその時だ。

未来とは常に不定である。過去から現在までの継続があれば、未来はある程度の予測ができる。だが、過去と切り離されてここに存在する俺には、その予測がたてられない。であるならば俺の未来は完全なるプラスマイナスゼロの状態。

未来について、希望や楽観のプラス思考を持つ理由、不安や恐怖のマイナス思考を持つ理由のどちらもなかった。

「わかりました……がんばってくださいね」

シャルが俺を見つめ、激励をかけてくる。その瞳に多少含まれる尊敬の気配は、おそらく無償の好意を甘受しない俺の在り方に対する

るものだろう。

もっとも俺の判断は、日本古来のことわざに曰く『親しき仲にも金銭トラブルあり』という格言に従ったものであり、高潔な精神に基づくものではない。

その点について多少の誤解があるかもしれないが、シャルの認識はシャルだけのものである。俺がそこに訂正を与える必要はない。

漂う源素に乱れが生じた。

それを気配ではなく、目視でいち早く知る。

「無視
」

苛立ちを含んだその声の源から強い風が吹き付けてきた。

気流の発生源は黄源素×1、白源素×7……ニアヴを中心に二つの円が、それぞれ逆方向に回転している。

「するでないわッッ！」

ひょいとサイドステップでその場を飛び退くと同時に、

バチンッ

と不可視の衝撃がその場を襲った。

「きゃあッ
」

と、悲鳴を上げたのはシャルだけではない。

同様の悲鳴を上げた回りの数人が、ズザザッと一気に距離を取る。ニアヴと俺を円の中心に残し、列が崩れた。

「いきなりだな」

激しい気流は、回転する源素が産み出しているのだが、それを見ることができない者から見れば、ニアヴ自身が爆風を発しているように見えることだろう。

「……妾もお主に着いて行くと決めた身じゃ。今後のために、一つ教えておいてやろう」

その中心で、ニアヴが不敵に微笑む。

「妾は　ッ」

カッと見開かれた獣の虹彩が、並々ならぬ怒気を孕む。
それと同時に、これまで外に向け流れていた気流が、内側へとその向きを変えた。

「意外に　ッ」

バツと天空に向け掲げられた掌に、激しい気流が渦を巻く。
その様子から圧縮された空気の塊を創り出しているのだと分析する。それを任意の場所で解放すれば　なるほど、先ほどの不可視の衝撃波が生まれるわけだ。

その大きさに、先ほどのように、小手先の動作で躲す事は不可能だと判断する。

大いなる不安を孕んだ衆人環視の中、怒りに染まった狐の化生は、大きくその手を振りかぶり

「気が短いのじゃー！ー！！」

そう、大声でのたまわったのであった。

バチンッ！！

俺及び、俺の後方に退避していた哀れな商人風の男は、決して自身の身体能力だけでは実現の叶わない空中飛行を体験し、それは時間にして数秒、だがその意外性のなさを実感するだけの時間は十分にあり、その後、重力に引きずられるだけの不自由な落下を味わうことになった。

Wandering Wonder 03

門のすぐ傍だったこともある。

騒ぎを聞きつけた衛士たちが何事かと、駆けつけてきた。

衛士の数は、10人。徴税を行っている人数はそのままであるから、詰め所から出て来たのであろう。

「一体何の騒ぎだ」

隊長らしき男が落ち着いた声で問いかける。

衛士たちが身につけた揃いの青い甲冑と、その手に携えた長槍は、一同を威圧するに十分であり、ざわめきが納まると同時に、皆の目が俺たち三人、とりわけ目立っているニアヴへと向けられることになった。

「プイツ」

俺をブツ飛ばしたことで一応の満足を得たらしいニアヴは、既に先ほどの気流を操る魔法を解いている。そして、衛士たちの相手をするつもりではないらしい。

「あうあう」

そうになると、次に皆の目はシャルへと向かうわけだが、彼女にこいういった荒事の経験はないのであろう。

完全に衛士の迫力に飲まれ、声を発することもできなくなっている。

となれば次に皆の目は、もう一人の同行者に注がれ

「やれやれ」

その役目が回ってくるのも、当然であろう。

生まれたての仔馬のような体勢で転がっていた俺は、曲がってはいけない向きに曲がっていた首を元の位置に戻しつつ、

「ああ、すまない。もう嵐は去ったから、大丈夫だ」

その隊長らしき人物に対応した。

まさかここで、そんな軽口がでてくるとは思っていなかったのであろう、ぽかんとした表情を見せる衛士隊長。

「おい、お前ふざけ」

「あっはっはっはッ」

衛士の一人が、踏み出そうとするのを手を振って抑え、その隊長は笑って応えて見せた。

「それであるなら問題はない。だが、これも我らの務めなのでな。騒ぎの原因を聞かせてもらえるだろうか。なに、時間はとらせない」

公務をないがしろにするわけでもなく、人当たりも良い。話のわかる人物のようだ。

「私はルーケイオン群兜マータのオールドという」

加えてその身に纏う源素光量はおおよそ2200ミリカンデラ、一般人のそれより数倍明るいことを考えれば、実力ありきでの地位なのだろう。

2・2カンデラでもよいのだが、ここまで新たに視認できた人々84名の源素数はこのオールドなる人物を除いては、みな1カンデラ以下の光量であるため、ミリの単位を導入せざるをえないという結論を得ていた。

それが魔法なるものに縁のない一般レベルであると考えた方がよいだろう。

今後街に入り、大勢の人を見ることになっても、眩しさを俺の目がくらむいうことはなさそうだ。その点はまずは安心である。

しかし、そうするとイレギュラーである俺の特殊性は差し置いても、30,000ミリカンデラ相当のニアヴ、5,000ミリカンデラ相当の光量を放つシャルは、ともに一般レベルの眩しさを超えていることになる。

ニアヴはともかく、シャルは

いや、いいか。今その疑問はさしおこう。

群衆というのもさきほどシャルから聞いて、デコード翻訳を保留していた単語の一つだ。語感的に領主や支配者への認識置換を行う予定だったが、もっと軽い意味、リーダーや隊長といった意味で良いのかもしれない。ルーケイオンというのは、まあこの青い甲冑で統一された守備隊の名称だろう。

先ほどの軽口は冗談にしても、この場での最高権限を持つと思わ

れるオールドからどの程度の恩恵を引き出すべきか、そのための交渉案について、瞬時の検討を行う。

よし、これで行こう。

最も効果が高いと思われる状況を創り出すために、俺はまるで何気ないふうに、自己紹介を開始した。

「紹介させてもらおう、俺はワーズワード。連れの二人は、シャル・ロー・フェルニとニアヴという」

何気なく出した『ニアヴ』の名に、小さなざわめきが起こった。

「……三人連れというわけだな」

「そうなるな」

冷静を装うオールドの反応だが、俺にはその感情が手に取るように判然る。

その視線は見ようとせずとも、どうしても『ニアヴ』に向かざるをえない。

相手の目を見て喋れ、とはよく聞かれる言葉だが、それは相手に対する礼儀としての作法ではない、自分の言葉によって引き出された相手の反応を確認するためのもの。

人の咄嗟の感情は脳に直結した目にこそ浮かび上がり、それは隠しがたいものだからだ。

もっとも、こちらの人間はその耳が感情に反応するのだから、目を見る以上にその反応はわかりやすい。

「では、続いて状況の説明を行おう」

すでに俺の言葉は、半分も聞いていないだろう。

ニアヴが自己申告の通り、あの林一帯を治める濬獣^{ルーヴァ}とかいう地位を持つ狐なのであれば、もっとも近くに境界を接するユーリカ・ソイルの守備隊長が、その存在を知らぬわけがない。

だが、ニアヴ自身が街に下りるのは久しぶりだと言った通り、街の人間が、ニアヴの姿形まで知っているとは思えにくい。

俺の言葉の真偽を確認するまえに、まずそこにいるニアヴ自身から目が離せなくのは道理である。

「……後ろが気になるようだが？」

それは誘導の言葉である。

「あ、ああ、すまない。……確認までに問うのだが、ニアヴ殿というのは、その……」

直に聞いて良いものか、その迷いが透けて見える。
想定通りの反応で大変わかりやすい。

「もちろん ニアヴ治林を治める濬獣本人だ」

それは、この場にいる全ての者に聞かせるがための宣言。

「ほ、本当に!？」

皆の目が、ニアヴへと集まる。

聡い狐のことだ、俺の意図に気付いているのだろうが、この状況でかつ全て事実なのだから、ここでは俺の言葉を肯定するしかない。

「……その男の言つとおりじゃ」

不機嫌そうに、ニアヴが呟く。

『おおおおお』

確信を得たどよめきが、その輪を広げる。

列を成す人々、オールドに従う全ての守備兵、その全ての目が、興味と驚愕に見開かれる。

だが、それこそが、俺の準備した舞台。その瞬間を逃さず、俺は場の支配へと乗り出す。

「静まれ　ッ」

何者でもない俺が、ニアヴの名を負うことで、この場で最上段に位置する。

「深き森が人の地でないように、ここでは濇獣ルーヴァと言えども、ただの訪問者である。いたずらに騒ぎ立てることは『ニアヴ様』のご不興を買い行為であると知れ」

ニアヴの名の担い手としての振る舞い。

オールドを始めたとした、ルーケイオン一同が、その存在に恐れ入ったかのように膝について、頭を垂れる。

「はっ、考え至らず申し訳ございません！」

「……オールド隊長、どうか頭をあげてほしい。それもまた『ニアヴ様』の望むところではないと、わかってくれるかな？」

上位に立った上で、同じ位置に下りていく。

「ははッ！」

上の者が下りてくるならば、自分は更に下りなければならないという、被支配者思考が彼らを縛る。

封建思考とは、全くもってコントロールしやすいものである。

そら、全員アホの子状態だった中世で、あれだけ封建国家が流行ったというのもうなすける話だ。

「さて、そういうわけで、街に入りたいのだが、やはり『ニアヴ様』でも足税というのは必要なのかな？」

「いえっ、濬獣様にそのような！」

「それは助かる」

……自分でこの空気を作っておいてなんだが、本当に偉かったんだな、あの褒めて褒めて狐は。

そして、これもまた狙い通り。なし崩し的に俺の足税も免除である。

もちろんダメだと言われれば、それはその時。うまく行けばラッキー程度の、トライアンドエラーの手法だ。

「ですが、ニアヴ様自らユーリカ・ソイルへ出向かれた理由について、お聞かせください。ルアン公への面会のご用でしたら、私からご案内させていただきます」

新しい名前が出たな。そのルアン公というのが、街の支配者か。

「その時がくれば、声をかけさせて頂こう。だが今はまだその時ではない。……お忍びってやつだな」

「はっ、失礼致しました！」

俺の軽口にも、恐縮したとばかりの言葉が返ってくる。

狐の名前は、予想以上に効果があるな。

これはまだまだ利用でき……おっと。

それはそれとして狐のジト目が俺の背中に突き刺さる。
俺は背中の気配には敏感なのだ。

「さて、これ以上騒ぎが大きくなる前に通してもらってよいだろうか」

「もちろんです。さあこちらへ」

要人警護の如く、ニアヴと俺を囲むオールドとルーケイオンたち。
大きく手を振り、シャルを呼び寄せる。

「おーい、タダで良いそうだ。シャルも足税浮いたな」

「あわわわわわ！」

なんてことを大声でっ、と言わんばかりにダツシュで駆け寄ってくるシャル。

「い、いいんでしょうか……」

自分たちを取り囲む青甲冑が歓迎を示しているとわかっていても、

やはり気後れがあるらしい。

「向こうが不要だと言ったんだ。遠慮してどうする」

「お主……よくまあ次から次へと」

呆れたようにニアヴが言う。

「嘘はついていないぞ」

「あれだけ大見得を切っておいて、お忍びもなかつた！」

「そこに気付くとは、さすがニアヴ様」

「どういう意味で言っておるのじゃ！」

キツと牙を剥くニアヴを軽く宥めながら、俺はこの世界で初めての人の住む街へと足を踏み入れた。

そこには、石造りを基調とした、そして俺の感覚では産業革命以前の時代を感じさせる街並みが広がっていた。

門を通ってすぐの場所は、倉庫街であるらしい。街の中心に向かって伸びているのであろう大通りの脇には巨大な鉄扉をつけただけの建物が並んでいる。

来るまでに見た広大な農地で収穫された農作物が保存されているのであろう。倉庫の数だけで流通規模を計ることはできないが、大まかに見積もれば、ここは1万人程度が生活する、中小規模の街なのであろう。

「中小って……ユーリカ・ソイルは『ラ・ウルターヴ』では二番目

の大きい街で、大都会ですよ」

俺の感想を聞いたシャルが、嗜めるように呟く。

「そういえば、国の名前を聞くのは初めてだったな。『ラ・ウルターヴ北の聖国』
というのか」

まるでどこぞの『日出づる国』のような大層な国名である。

「『ラ・ウルターヴ』の名前まで知らないなんて……ワーズワード
さんは物知りなのに、一般的なことは知らないんですねえ」

当たり前だわ。

「……そういうことだ。どんどん教えてくれると助かる」
「はいっ」

元気な返事が返ってきた。

Wandering Wonder 04

「ここで、足帳の記入をして頂く決まりとなっております。お手数だと思いますが、ご記入頂いてよろしいでしょうか？」

そこまで話していたところで、行軍が止まり、俺たちを先導していたオールドが、向き直る。

朱雀門の外側で、荷台と人物チェック、そして内側で足帳とやらの記入を行うようだ。

「ん、そんなものがあるのかや？」

「ニアヴ様には失礼かと存じますが、これも街の治安維持の一環でございまして」

「ああ、よいよい。人の住まう地では人の法に、深山碧谷では濬獣^{ルーヴァ}の定めに従う。当然のことじゃ」

鷹揚に筆を取ったニアヴが長く連なった巻物にさらさらと文字を連ねる。

文字か

「さ、お連れの方も」

同様に筆を渡されるが当然の事ながら俺は文字を書くことができない。

むしろ街に入る大きな目的の一つが、この世界の文字を知ることである。

発声からの言語デコードとは違い、この国のアルファベットの文法・法則性について、サンプリングさえできていないのだ。

「すまない。俺は文字の読み書きができない」
「は……え？」

俺の相手をする青甲冑くんの目にとまどいの色が見える。
まあ自分より、偉い人間が文字の読み書きができないなんて、思わなかったのだろう。

あの『ニアヴ様』相手に軽口を叩くような人間が、となれば一層のことだ。

もつとも俺はそんな相手の心情変化など気にしないのだが。

「代筆を頼めるだろうか？」

「はッ、もちろんです。日付その他については私どもの方で記入いたしますので、お名前とユーリカ・ソイルへ来られた目的についてのご記入をお願い致します」

「名前はワーズワード」

「ワーズワード……ええと、ご家名はなんと仰るのでしょうか」

「家名はない。ただのワーズワードだ」

「は、失礼いたしました」

「目的はそうだな、観光ということにしておいてくれ」

「はあ………」

彼の書く文字を目で追いながら、その場でアルファベットのチェックを行う。

発声6文字の『ワーズワード』が、こちらの言葉では4文字。発声音数よりも文字数が減っており、かついくつかの基本記号の組合せで書かれる文字であるということは、漢字やヒエログリフに近い象形文字系の言語なのであろう。

であれば、大まかな象形（記号）の組合せさえ覚えれば、あとは

絵的な組合せから意味の仮定（解読）が可能になるだろう。
文字の修得についてもあまり苦労はしなさそうである。

「以上です。どうぞ無事の滞在を」
「ありがとう」

最後まで慇懃な態度を崩さなかったオルドと別れたところで、シャルがふへええ〜と大きな息を吐いた。

「す、すごく緊張しましたあ〜」
「なに、門を抜けてしまえば、もう他に接点はないだろう。ところで」
「はい？」
「この後のことだ」

俺としては商品、看板による文字学習。家屋造成、人間観察による文明度判定。食品、水道事情による生活レベル判定と、多数の目的がある。

一言で言ってしまうば、この街の全てが大きな知識の泉だ。なるべく時間を無駄にすることなく目的を果たして行きたい。

「あ、それなんですけど、すみませんっ！」

いきなりペコリと頭を下げるシャル。

「私、先に終わらせないといけない仕事がありますので、夕方に宿で合流ということで良いでしょうか……？」

背負った大きな荷袋はその仕事に関係するのだろう。

「よいのではないか？ 妾も久しぶりに街に降りてきたのじゃ、ま
ずは『アंक・サンプルス』に行ってみたいと思っておる」

街に入ってから、むしろ俺よりもテンションが高くなっている二
アヴが、嬉々と口を開く。

人間であれば気分屋と言うところだろうが、ニアヴに関して言え
ば、姿の半分は本能のまま生きる畜生そのものだから、まさに
見た目通りの性格ということに納得できる。

「ああ、問題ない。俺たちのことはついだと思って、シャルは自
分の予定を優先させてくれればいい。確かに初めての街だが、合流
場所と時間がわかっていれば、人に聞くなりしてたどり着けるだろ
う」

「あう、ここまで案内してきて本当にすいません。日が沈む前には
終わりますから」

単なる偶然の産物でできた同行者に、ここまで責任を持てるシャ
ル。

愛すべき資質である。

「ああ、わかった」

「それで、宿はですね」

『ロッシの梢亭』という名と、大体の位置を記憶に刻み、シャル
とは一時の別れである。

その際、足税が浮いた分という名目で多少の交遊費を受け取るこ
とになった。さすがにこれは拒否すべき話ではなかったので、あり
がたく頂戴することにする。

時折馬車が駆け抜ける大通り。その両脇には石造りの大店と、その間を埋めるように雑多な露店が軒を連ねる。おおたな

とぎれない人並みも相まって、一種のお祭り会場のようでもある。

「はぐれるなよ、ニアヴ」

「こっちの台詞じゃ！ おっ、良い匂いがするのう！」

くんくんと鼻を動かし、串を売る露天へと跳ねていくニアヴ。大変にテンションが高い。

そして小さな露店であってもその幟ノボリには絵ではなく、文字。

つまり

「……思いの外、識字率が高いということか」

武器屋に剣、防具屋に盾。商品イメージの具象化というのは、元々文字が読めない人たちに対するものだ。

それがなく、文字で店名を表しているのは、客がその文字を読める、という前提に立っているからだ。

振り返るに、先ほど文字が読み書きできないと言った際の青甲冑くんのとまどいも、それが基本教養として、当然だという認識に基づいてのことだろう。

次に食材である。

「これは何の肉だ？」

「いらっしやい！　ウチはサチアロ専門だよ！」

軒に豚と猪を掛け合わせたような動物の開腹死体が吊されている。

「では、その串をいっぽ」

「三本！」

「……三本もらおう」

「まいどあり！」

当然のように三本全てを受け取ったニアヴが、そこそこ大きい串だというのにぺろりと平らげていく。

「サチアロは生も良いが、この香ばしい味付けもまた、たまらんのう！」

「油の付いた指を舐めるのはやめなさい」

そつと嗜める俺だが、狐の耳は、次なる獲物の在処を探るためにしか働いていない。

「次は、あの果実酒じゃ！」

さすがの身のこなしで、人群れを超えていくニアヴ。

「ちょっとは落ち着け」

振り返って、手を伸ばそうとしたところで、後ろから勢いに乗ったドンという衝撃を受けた。

そこにはバランスを崩す赤い影

「わっ、わっ」
「さっ」と

こと人を避ける術においては日本人の右に出る者はない。つまり、この世界で俺以上の者は存在しない。流体、とも言うべき絶妙かつ神速の動作で倒れ込んでくる人影から身体を反らす。

赤い人物の、俺の肩を掴んで体勢を立て直そうとしていたその手が空を切り、結果、

「ちょ、うきやああ！」

その勢いを殺せず、どんがらがっしゃーんと派手に転がっていくのであった。

「いたたたあゝゝ」

なにやらうめき声が聞こえるが、俺は悪くないので放置。

それよりも俺の目を引いたのは、その身に纏う源素光量である。

推定3、000ミリカンデラ。ここまでに出逢ったパンピーの中では随一の明るさである。

それによく見てみれば、身に纏うのは、赤いローブとなにかの紋章の入ったミニマント。動きやすさ重視ではあるが、まさに日本人の思い浮かべる、一般的な『魔法使い』の姿である。

カラン……

とそこで、俺は足元に転がってきた布にくるまれた棒状のものに気付き、拾い上げた。

杖身は木製で赤い漆塗りがされている、杖頭は精緻に金属加工さ

れた銀環が備え付けられており、そこにこぶし大の宝玉がはめ込まれている、それはつまり、

「やはりあるのだな。『魔法使いの杖』というものは」

剣やら革鎧やらを目にして、もうその感覚には慣れたと思っていたのだが、『魔法』関連のアイテムは、それとはまた別腹の感慨を呼び起こすものらしい。

宝玉の中では、大きな4つの赤源素がぐるぐると回っていた。それは、宝玉の外にでることなく、球体内部で反射している。

「なるほど、源素はこうやってモノの中に込めることもできるのか」

源素の動きを追うと、それは三角錐の形につながっていることが判然る。三角錐と言えば【フォックスファイア／狐火】の発動図形である。一つ色が違うが、まあ似たようなもので、炎の杖といった属性なのかもしれない。

だが、これは……

Wandering Wonder 04 (後書き)

ここまでのまとめ：街に入る だけ4話消費。

シャルさんの次の出番はWandering Wonder 12
までお待ちください。

「あーっ！っ！」

甲高い声に、顔を上げてみれば、先ほどの赤魔導師が、俺の方を指差していた。

年若い女である。まあ若いと言ってもシャルほどではない、推定ハタチといったところか。

魔導師な衣装から本来であれば知的なイメージを喚起させるべきところだが、大声を上げて人を指差すその幼い振る舞いから、あまり頭の良さそうなイメージはしない。

「それ！」

「ん、この杖か？」

「か、返してくださいー！！」

杖を返して欲しいらしい。

が、その表情はやけに鬼気迫るものがある。

落としたものを拾ってやったただけだというのに、なにをそんなに焦っているのか。

「もちろん返す。だが、まあ待て」

「すぐに返してくだ、や、返しなさい！ それは大事なもののー！」

リーチ差で杖に手が届かない女が半分涙目になりながら、縋り付いてくる。

「ハイドウハイドウ」

だが、少し気になる点があるので、そんな女魔導師を片手でいなしつつ、杖の観察を続行する。

気になった点というのは、宝玉内部の源素に関する問題だ。

ニアヴがあゝの林道で見せた「フォックスファイア／狐火」は角度がきれいに60度を保たれた正三角錐だった。

同じく、「ウォーターフォウル・レイン／降鵜雨」の六角形は120度。先ほどの身で味わった風の衝撃魔法も非常に整った図形だったのだ。

それに比べ、この杖の宝玉内の三角錐は、一辺の長さも角度もバラバラで、まるでひっくり返ったショートケーキである。

その崩れたショートケーキが球状の宝玉内でゴツンゴツンと、乱雑な回転を繰り返しているのだ。

端的に言えば、こういう雑な仕事は、見ていてとても気持ちが悪いのだ。

単純にこの杖の質が悪いだけなのか、元からこういうものなのか知らないが、源素を見ることのできる俺にとっては、気になって仕方ないことだった。

……直せるものだろうか？

そこまで思考すれば、ただやってみれば判然ることを、躊躇する俺ではない。

全てはトライアンドエラー。実践あるのみ。
そもそも、直らなかったところで問題はない。

試しに、杖の宝玉内の赤源素に、停止の念を送ってみる。

ググ……と源素の動作が鈍り、その動きを停止した。ふむ、なんとかなるっばいな。

ならば後は調整して再始動が出来るはずだ。

「ちょ、え、なにをして」

図形調整のため、杖を色々な角度に持ち直す俺の行動に、女魔導師が不安の声をあげる。

「すぐに終わるから、少し待て」

三角錐の一辺を、宝玉の直径の三分の二に保ち、その角度はきっちり60度になるよう調整する。当然四面の面積は同一となり、回転角度も中心線が垂直に通るように調律する。

といつても、それは俺の脳内イメージを宝玉内の源素に投影するだけの作業なので、女魔導師には俺がなにをしているのかわからないことだろうが。……ん、完了つと。

キュイイーン

そこにはまるで今までとは違う、整然と宝玉内で回転する赤源素の姿があった。

「ふむ、こんなものか。ほら、もういいぞ」

「あ……ありがとう や、当たり前です！」

やっと返ってきた杖を手に、安堵しながらもこちらを威嚇してくるのを忘れない。色々忙しい娘である。

まるで宝物を持つかのように、再び布にくるみ直す女魔導師。よほど大事にしているようだ。

「まだなにかあるのか？」

「……あなたにこれを盗もうという意図はなかったようですね、その点は謝罪いたします」

キリツと姿勢を正し、深々と頭を下げる。

「……………」

「どうして黙るのですか」

「……今更そんなキャラを通そうとしても無理だと思うが」

「なっ、そんなんじゃないんだから、や、ないのでありますっ」

……日頃から使い慣れていない言葉を使うところなるとい見本市だな。

質の悪い杖、幼い言葉遣い。この世界の新米魔法使いという所だろうか。

「そもそも俺はお前の知り合いでもなんでもない。口調など気にしても仕方がないだろう」

「そういうわけにはいきません。私もラスケイオンの一員としての威厳を見せねばならない立場なのですから」

ラスケイオン？　もしかして、ルーケイオンとなにか関係のあるのだろうか。

「そう言われれば確かに青甲冑と同じような紋章を付けているな」
「ラスケイオンをご存知なかったですか！？　ははあ、それで私にあんな失礼なことを」

うむ。立場を知っていても俺の行動は変わらなかったと思うがな。

「あなたは街の住民ではないんですね。わかりました……では改めてご説明します。ルーケイオンは都市防衛の騎士隊、ラスケイオンはその魔法師隊です。どちらも最低でも準騎士の爵位を与えられるだけの実力と名誉をもつ役職なんです」

聞いてもいないことを、得意満面に語られてしまった。
もちろん、無償の情報提供には感謝であるが。

「そして、私はラスケイオン所属のセスリナ・アル・マーズリーと申しゆのです！」

かみおった。使い慣れない言葉遣いで通そうとするから無理が出るのだ。

「ご丁寧にも。私は無所属のワーズワードと申しゆのです」

とりあえず、まねてみる。

「ま、真似しないでくださいっ」

おこられた。

しかし魔法使いの部隊か……確か人間の魔法使いは国に管理され

ているという話だったな。

その魔法使いの利用方法が戦闘部隊であるということは、魔法は、概ね争いの道具、つまり『兵器』として利用されているということだろう。

やれやれ……先ほど確認した火や水を産み出すという物理法則無視の魔法だけでも、どれだけの平和利用ができているのか。

思いつくだけでも、治水、農業、製造、エネルギー生産、環境保護……この魔法という技術には無限の可能性が秘められている。それを

「セスリナ・アル・マーズリーだったか」

「はい？」

俺の失望を含んだ声に、少しとまどいながら応えるセスリナ。

「お前は悪くない。俺が言えるのはそれだけだ」

だが俺の失望は、この世界の価値観の中で生きる彼女にはなんの責任も話だ。

「そんな、いえいえ、確かに私も前方不注意でしたから。……えへへ、悪くないと言ってももらえるのはありがたいです」

「ん？ ああ、それはその通りだ。今後は気を付けろよ」
「えっ」

なにをそんな驚いているんだ、この女は。

あの状況で俺に一分でも責任があったと思っているのか。

納得いかないという瞳で俺をねめつけるセスリナだが、幼い容姿の彼女がやると拗ねた子供の上目遣いにしか見えないというのが、悲哀を誘う。

代わりに微笑みを返してみる。

「なっ！？　ぷんっ、もういいですっ！　私も急いでいるんですから！」

「そうか」

「でも、一つだけ教えてください……あなた、この杖に何かしようとしていませんか？」

「さっきのアレか」

魔法使いと言っても源素が見えなければ、俺がなにをしたのか判然らないか。

「杖を調律させてもらったただけだ。なに、悪くはなっていないだろう」

「はい？　……意味が判然らないんですけど」

調律では意味が通じないのか？　確かに、魔法の杖をメンテナンスする行為は別の呼び方があるのかもしれないが。

「はあ、なるほど、この杖がどういうものか、わかってないんですね」

「……………？」

これまでにない冷静な響き。何が言いたいのだろうか。

「いえ、それなら良いんです。では、私はそろそろ」

「そうだな。俺もそろそろ時間も惜しい。ではな」

「はい」

ペコリと一礼をして、歩き出すセスリナ。

彼女の、最後の態度の変化が気になるところだが、俺は俺でやる
ことが山盛りである。

もし次に会う機会があれば、聞いてみればよいだろう。

「待たせたな、ニアヴ」

と。

「……おい」

喧噪の露店群を見渡すが、そこには狐の姿も、狐の纏う源素の明
るさすら見つけることができなかった。

「初っぱなから迷子とか……」

いないものは仕方ない。

迷子の狐は置いて、俺は俺で情報の収集をさせてもらおう。

たしか、『アंक・サンプル』という観光名所に行きたいとい
う話だったので、そっちの方に歩いていけば、いずれ見つけられる
だろう。

よく考えれば、別にこれから行う情報収集に魔法的な要素は必要無いので、狐がいなくても問題ないしな。

むしろ、一人である方が効率が良い。

.....
.....
.....

「.....植物、精子.....『果実酒』の店。こっちは、土器の店だな。
ふむ、溜める、食器.....で『壺』と」

看板と商品、それに街の喧噪から適合する情報を拾い集めることで、文字を解析してゆく。

文字記号のユニーク数は少なく、その組合せも単純である。漢字よりもハングル語の構成に近い。

当然読みだけでは理解できない文字は存在する。主に固有名詞がそれだ。

例えば日本語訳で『森約束の店』と書いてる看板、それをそのままの意味に受け取れば単純に混乱を生むが、こちらの発音の表記にすれば『ヴァンスローの店』となる。つまりは店主の名前を冠した店なのだろう。

祭でもあるのかと思われるほどの露店が軒を連ね、活発な呼び込

みと商品のやり取りの会話が交わされる。解析のためのサンプリングには事欠かなかった。

ものの数十分で一般生活で利用されるレベルの基礎的な文字の作りと読みについては吸収できたので、残りの時間は風土・文化レベルについて観察しながら街を歩くことにしよう。

『ユーリカ・ソイル』

一言で言えば緑と石造りの街である。

石造りの街並みと言えばヨーロッパを連想するかもしれないが、実は東南アジア系イメージの方が近い。

軒を並べるのは重厚な石造りの店舗や屋敷、屋敷はとにかく年数による風化を感じさせ、その上に緑の木々が覆い被さっているのだ。比較的新しく作られたと思われる建物は、木造である。

『昔に滅びた王国遺跡にそのまま今の国の民が住み着いている』というシャルの事前情報の通り、過去に作られた石の街、そこに人々が住み着き、今の街の形になったのだろう。

区画整備された街並みに、上下水道（井戸ではなく、石造りの用水路『上水道』がちゃんと引かれている）の再利用ができるため、住み着くのは当然のことだったのだろう。

至る所に歴史の風格を感じさせ、かつ新旧が融和した街並みは、思ったよりも嫌いではなかった。

そこに異国情緒あふれる人々が行き交う。この場合は異世界情緒と言った方が正確か。

生活感バリバリの小汚い服装のものもいれば、いわゆる冒険者な革鎧姿の者もいる。

驚いたことに、明らかに人外　この場合は、獣の特徴を持つ人

型人種を指して言う　の姿も珍しくないのだ。

ニアヴという存在が特別なものではないとすると、つまり、異なる種族が一緒に暮らしている状況だというわけか。

しばらく大通りを進むと、街を分断する川があつた。

そこにかけられた大きな橋もまた石造り。構造的にはアーチ型石橋であるが、とにかく巨大である。

対岸まで100mはありそうな大きな川に幅15m程度の年季の入った石橋がかかっている。

朱雀門といい、石造りの街といい、その滅びた王国というのは、鉱物加工、石材建築技術において、かなり高い技術水準を誇っていたに違いない。

この世界にもある『太陽』。その動く向きが地球と同じと仮定するならば、川は街を南北に切断しており、俺は街の南側から北上している、ということになる。

朱雀門は本当に朱雀門だったわけだ。

見たところ、街の南側が商業地区、北側が行政地区といったところか。住民も南側は一般層、北側に富裕層が住んでいるのだろうと推測できる。川に面している屋敷の敷地規模が全く異なっているのがそれだ。

さて、問題はこの橋を渡ってしまつて良いのかという点だ。

「すまない」

「ん、なんだいお兄サン？」

「『アंक・サンプルス』に行きたいのだが、この橋は渡ってもいいものなのだろうか」

「そうさね、橋を越えてまっすぐ進めば、街の中心トルテ広場。」「
アंक・サンプルス」はそこにあるさね」

「なるほど、広場にあるものなのか。情報提供感謝する」

「あはっ、面白い言い方をするお兄サンだね、もしかしてお忍びの
貴族サマだったりするのかい？」

「その可能性はないな」

「あっはっは。それは残念さね」

人柄は氣候が創り出すものである。店売りの陽気な声や、住人の
人当たりのよさは、この地が温暖な氣候に恵まれた土地である証拠
だろう。

「ついでにもう一つ。狐の耳をつけた、変わった服装の娘が通らな
かっただろうか？」

「獸人の娘サン？ あーいたねえ。狐族サンだったかどうかは見て
ないけど、なんだか落ち着きのない様子で橋桁をポンポン跳ねてつ
た子がいたかなあ。もしかしてお知り合い？」

「可能性は皆無ではない」

というか、絶対そうだろう。

「あっはっは。お役に立ててなによりさ」

ぶんぶんと手を振って見送る獸人の物売りに一礼で応え、橋を進
む。

見下ろす先、悠然と流れる川の透明度は、地球では貴重なものだ
ろう。

川の濁りと引き換えに、人類は高度な科学技術を進歩させてきた
のだから。

その最たるものがアイシールドと、そこに投影されるネットワーク上の仮想空間である。

全ての娯楽がワンクリックで起動され、全ての情報がワンウィンドウに表示できる世界。

発声もコマンド入力も必要とせず、思考のみでその全てが実行可能なシステム。

そこでは、自由気ままなネットライフを送ることも、神の如く権能を用いて、現実世界に影響を及ぼすことも可能だった。

神学者が言った、肉体の軛から解放された真なる世界、それが神学の対極にあるＩＴ技術によってもたらされたというのだから、これは大いなる皮肉であろう。

そこでは人類が未だ到達していない想像上の未来都市も、時代と共に滅び去った太古の都市も、時間の概念を無視したあらゆる映像がリアルに投影できた。

俺はＯＳデフォルト設定のポリゴンの荒いマイハウスを利用して、窓の外に映る景色は、自然映像を選択していた。

特にお気に入りだったのは、清流流れる、日本の原風景である。

人類が失った水の透明さを、俺は仮想世界で取り戻すことになったわけだ。

そして、その仮想世界こそ本来なら俺が行くべきだった場所。だがそうはならず、今俺はこの右も左もわからない異世界にいる。事実である以上、状況を否定してもしかたないが、地球に帰れるのかも含めて、今後どう行動するべきか、その指針も考えなければいけない項目の一つだった。

「まだまだ課題は多いな」

とはいえ、まずは

「この街最大の観光名所だったか？ 『アंक・サンプルス』とやら、俺も楽しませてもらうか」

この何気ない異世界の街の散策は、十分に俺の興味を満たしてくれるものだった。

Wandering Wonder 06

橋を渡った先は、これまでの商業地区の喧噪と違って変わって上品な街並みを見せた。

いわゆる商店もこれまで以上の大規模店舗しかなく、門構えも立派である。

貴族の館と思わしき門前は掃き清められ、衛兵の姿もちらほら映る。

更に歩くと道幅はさらに広くなり、大きく円形に視界が開けた場所がそのまま広場となっているようであった。

ぐるりと見渡せば、同じような大道が左右から伸びてきており広場で丁字に交差している。

と言うことが、ここが街の中心『トルテ広場』なのだろう。

ちなみに正面にはなだらかな階段が伸びており、その先は宮殿へとつながっていた。

……王様でも住んでいるのだろうか？ それともルアン公という奴か？

『オオオオオ……』

広場中心の人だかりからは絶えず歓声が上がっていた。

狐は……ぱつと見では居るか居ないかわからないな。

夜ならともかく、この日中時間帯に、光量感知だけで特定するのは難しそうだ。

ま、とりあえず、行ってみるか。

「……失礼、こつちも失礼」

わかっていたことだが、この街の住人に『順番待ち』という概念はない。先に進みたいなら、邪魔なものは押しのけて進むのがこの場での常識的行為である。文明レベル的な意味で。

「はい失礼、よっ……ととっ」

その際、勢い余って、人の輪の最前線の一步内側まで踏み込んでしまったのはご愛敬だろう。

「ん？」

その俺の身体を、七色の光がすり抜けた。

『オオオオオ………！』

一際大きな歓声が上がった。

「なんだこの光は？」

目の前には、角度80度ほどだろうか、やや傾いた金属製の支柱が立っていた。

その先に視線を向ける。

「ほっ」

俺をして感嘆せしめるもの。

支柱の先、高さ2 mほどの位置に、巨大な宝玉が固定されていた。巨大な宝玉は、野外に設置されているにもかかわらず、疵一つ無い美しさである。

それが、七色の光を反射している。七色の光は宝玉を中心にして発生していると思われる虹の円環の光だ。

その虹が、くる、くると回っているのである。

虹の円環は、それが何を意味するのかは判然らないが、当然ただの偏光現象ではなく、魔法によって産み出されたものだろう。

それを発生させているものこそ『アंक・サンプル』 その虹の円環に触れないギリギリの位置に人は集まり、その美しさを堪能していた。

人の輪を一步踏み出してしまった俺は、その虹に思いっきり身体が触れてしまったと言っわけだ。

虹に触れたことで身体になにか異常があっても困るので、その場で自分自身の身体をチェックするが、特におかしな点は見つけられない。

「よオ、兄ちゃん！ 虹に触っちまってなんともねえのか！」

観衆の一人が無遠慮に声をかけてくる。

「特になんともないと思われるが……何か問題があるものなのか？」
「がははっ、それがわからねえから、『アーティファクト』なんじやねえか！ 兄ちゃんはちと冷静すぎて面白くねえがなっ」

「……なるほど」

確かにどんな効果があるのかわからないと言われて、むやみに触りたいものではない。

とはいえ、みな経験則として、無害なものであるとわかっているのだろう。

でなければ、こんなに虹の回転範囲ギリギリまで近づいたりはいらないはずだ。

そして、たまに虹にうつかり触れてしまった俺のような相手に対し、こうやってからかいの言葉をかけているのだろう。

魔法というものに免疫のない一般観光客であれば、恐れおののく反応を示してもおかしくはない。

俺は改めて『アंक・サンプルス』に目を向ける。

「なるほど、これは見たことがない美しさだ」

「がはははっ、ったりめえだぜ！ 『アंक・サンプルス』は世界一の『アーティファクト』だぜ！」

そんな自慢に満ちた誇らしげな声に、皆納得のうなずきを示している。

やれやれ、俺はそう言う意味で言ったのではないのだがな。

美しいといったのは、『アंक・サンプルス』の中心たる巨大宝玉。その内部にある源素についてである。

まず巨大である。この身にまわりついてくる源素は、最大でもピンポン球サイズなのだが、『アंक・サンプル』内の源素は、その一つ一つが野球の硬球サイズの大きさなのだ。

更にもう一点。これまで見てきたのは白・赤・青・緑・黄の五色だったのだが、この宝玉内には更に紫・黒の二色が存在していた。合計七色七つの源素が宝玉内で三次元の幾何学模様を刻むように絶えず形を変えているのだ。

セスリナとかいう女の持っていた杖とはランクの違う精密な動きである。欲を言えば、最後の黒源素の動きが他よりワンテンポ遅れているところが画竜点睛を欠いているが、コンピュータでシミュレートしたかのようなその動きは、俺をして唸らせるものだった。

ドンッ

と、宝玉に集中していた所に背後から襲撃を受けた。
なんだ、体当たりか？

「お主……どこをほつつき歩いておったんじゃ」

「……なんだお前か」

「気がつけばお主はおらんし……街では妾の鼻も利かぬし！」

いや、勝手にテンション上げて跳ねていったのはお前の方なんだが。

反論しようと振り向いたところでそれに気付いた。
赤みを帯びた目元。伏せられた耳。ぎゅっと握られた、服の裾。

……やれやれ。

俺は、ポムポムとその頭に手を乗せる。

「悪かった。もう目を離さない」

あやすように優しくその頭を撫でる自分の姿は、全く持って柄じやないと苦笑せざるをえない。

「……………うむ」

迷子の迷子の狐さんは、案外あっけなく見つかったのであった。

「確かにこの数理的かつ魔法的な美しさに比べれば、『朱雀門』は造形の美で完結してしまっている感があるな」

「うむ、言ってしまうえば朱雀門は『アート・アーティファクト』にすぎぬ。『マジック・アーティファクト』に比べれば、さすがに見劣ることもあるう」

「マジック・アーティファクト？」

「くふっ、知らぬようじゃのう！」

俺の無知に気をよくした狐が、得意満面の笑みで応える。

泣いたカラスがもう笑うというやつか。あいにくこちらは狐だが。

「そもそも『アーティファクト』と呼ばれる遺産は大きく二種類にわけられる。一つは『アート・アーティファクト』とよばれる、例えば朱雀門のように材質不明なもの、『ワス・オーズリー』のように精緻精巧で再現不能なものじゃな。

それらは古王国の威光を偲ぶアーティファクトであって、美術的価値は高いが、お主のいうとおり、言ってみればそれだけであるとと言える。

じゃが、アーティファクトにはもう一つ、全く別の価値、魔法の効果が付与されたアイテムがある。『雲を裂く剣』、『大地を揺るがす鎚』、『炎を纏う杖』、『傷を癒す宝玉』、『酒の溢れる壺』、『知識を与える書』

指を折ってそれらの名をあげるニアヴ。

「なるほど理解した。つまりそれが」

「『マジック・アーティファクト』ということじゃ。それらはまさ

に至宝であり、その価値は計り知れぬ。アーティファクトの発掘を目的とした冒険者という職が成り立っており、未だ発見されておらぬアーティファクトが確実に存在するからじゃ。

『アート・アーティファクト』であれば10年、『マジック・アーティファクト』であれば、一生働かずに暮らせるだけの価値で取引されるというのう。妾もいつか所有したいものじゃ」

つまり、『冒険者』とはそういった一攫千金を狙ったアーティファクト探索者のことなのか。

「故にアーティファクトの所有者は、その存在を明かさぬものじゃ。まあ当然であるな、それほど価値のあるものならば、悪しき者にとつては殺してでも奪い取るリスクに値するものじゃろう」

物騒な話だ。

「国内に古王国遺跡の多く残る『ラ・ウルターヴ』であれば、アート・アーティファクトの建造物が各都市一つずつくらいは残っており、それぞれが観光名所になっておると聞く。

その中であつて、『アंक・サンプルス』は一般公開されておる唯一のマジック・アーティファクト、まさに天下の逸品ということじゃ。見よ、この美しい虹を！ 数多の魔法を修める妾とて、これがいかなる効果を持つ魔法の道具であるのか、予測もつかぬ。これほど面白いものはそうはあるまい！」

「理解した故に聞くが、『マジック・アーティファクト』は貴重なものなのだろう。なぜそんなものが野外に設置してある。この街はそんなに治安がよいのか？」

「それこそ愚問じゃな。『アंक・サンプルス』は魔法効果の塊じゃ。妾にわかるだけでも『破壊不能』『存在固定』『反魔法』の最低三つの効果を持つておる。『反魔法』の効果でいかなる魔法も『

アंक・サンプルス』には届かんし、『存在固定』の効果で盗み出すこともゆめ叶わぬであろうな」

なるほど。聞くだにファンタジーだな。

逆に言えば、宝物庫に入れたくとも、入れられないということか。それでは、放置しておくしかない。

「それ以外にどのような効果があるものか、それは未だにわかっておらぬようじゃが、少なくともこの美しい虹は人の目を楽しませよう。国が滅んでも『アंक・サンプルス』は不滅じゃ」

「異論はないな。お前があればテンションを上げたのもわかる話だ」

俺とニアヴは、人の輪に交ざり、虹の円環とその中心に位置する透明な宝玉を鑑賞していた。

「ちなみに、宝玉の中では巨大な7色の『源素』が様々図形を描いている」

「むっ、そう言えばお主は魔法を光の粒として見えるんじゃないの。……まさかその目で『アंक・サンプルス』がどのような魔法の力を持っているのか、知ることができるのかや？」

「いや、俺に見えるのは源素の動きだけだからな。さすがにどのような効果を発するものかまで、知ることはいかない」

「ふう、驚かせよつて。そんなことができれば、それこそ大いなる衝撃を受けるわ」

逆に言えば、通常魔法として、同じ源素の動き、つまり魔法効果

を発生させることはできそうだな。

とはいえ、俺にまわりついていてる源素の中に紫と黒はないので、全く同じものは再現できないか。

「まあ魔法の効果はしらんが、宝玉の中に源素を封じ込める、という基本的な作りは先ほど見た魔法使いの杖と同じだな。その上位版と言ったところだろう」

「魔法使いの杖、じゃと？」

怪訝そうに繰り返すニアヴ。

なにか引つかかることを言っただろうか。

「ああ。さすがにこの『アंक・サンプルス』というマジック・アーティファクトを見た後では、粗末なものだったと言わざるをえないが」

そう言う意味では……さっきから気になってしょうがないワントンポ遅れた黒源素の動きである。

この黒源素も先ほどの杖と同じように調律できるかもしれない。やってみるか。

「待て、お主、何を言っておるのじゃ。もしそれが魔法効果を宿した杖だというなら」

「すまん、ちょっと試したいことがある。あとにしてくれ」

とりあえず距離が遠すぎるので、一歩足を進める。

虹の円環に身体が触れるが、それが無害であることはわかっているので、気にしない。

更に一歩。

輪から抜け出し、『アंक・サンプルス』の宝玉を見上げる俺に、

観光客の視線が集まる。

源素の動きは、決して早いものではない。

7つの源素が円となり、クロスし、立方体と変化し、波を作り、また円に返る。

宝玉に手のひらを向け、指を即興の物差しとして利用、幾何学的に線形非線形を繰り返す源素の動作パターンを脳内にインプットする。

「待て待て！ 何をしようとしておる！？」

俺の行為に不安を感じたらしいニアヴが後ろから俺の名を呼ぶ。もうちょつとなので待つて欲しい。

よし、覚えた。

では一度動きを止めてつと。

停止の念を送ると、杖の場合と同じように、宝玉内の源素はその意を受けて、ピタリと停止した。やはり、この辺は同じか。

源素運動を停止したせいで、虹が消滅した。おそらく一時的なものだろう。

まずここまではよし、と。

細かい調整を行う前に、狐の用事を終わらせておくことにする。

「よし、こっちはOKだ。で、なんだ？ 話があるなら聞くぞ」

そう言つて振り返った俺の目に、あんどりと口を開けて放心する狐の姿が飛び込んできた。

……少し訂正しよう。

あんぐりと口を開けて放心する、全ての観衆の姿が飛び込んだ。
た。

「な、な、な」

ああ、消えてしまった虹のことか。

「虹なら大丈夫だぞ？ 消えたのは一時的なものだ。『調律』がすめば、また出てくるだろう」

『は、はあああ！？』

不安を払拭すべき行った現状説明のはずなのだが、なぜそんなに目を見開く必要があるのだろう。

広がるまぶたの可能性は無限大だとも言いたいのか。

それとも……うーむ、やはり触ってはいけないものだったのだろうか。まあ貴重なものだというのは先ほど聞いたが。

「ま、待て。待つのじゃ」

よろよると、ニアヴが声を出す。

いち早い立ち直りは人生経験の差か、はたまた慣れか。

「なんだ」

「お主なんと言った！？ アーティファクトを『調律』すると言ったかや！？」

後ろの観衆が恐ろしい勢いでコクコクとうなずく。

「そう言った」

「ありえんじやろ！？　それができぬからこそ『アーティファクト』なのじゃぞ！」

「なるほどな。確かにできると断言するのは早計だった。では、ものは試した。やってみよう」

「いや、そう言う意味ではなくじゃな！？」

言いあつても仕方ない。

源素自体が俺にしか見えないのだから、皆を納得させるには実際に調律して見せるしかないわけだ。宝玉に向き直り、動きがずれていた黒源素の位置を慎重に動かして行く。

……なんだ。先ほどの杖同様、何の問題もなく俺の意志を受け入れて、動くではないか。

アーティファクトだからと言って、調律できないわけではなさそうだ。

「よし、オーケーだ」

「ほ、本当にかや……」

これだけのことでなぜ静寂が生まれるのかわからない。

「ああ。あとは動かすだけだ」

ゴクリと誰かのつばを飲む声が聞こえる。

再起動を念じる。

俺の目にだけ、宝玉内の7つの源素が円となり、クロスし、立方体と変化し、波を作る動きが見える。

問題ない、これまで通りの動きだ。黒源素が正常な動きに戻ったため、その動きはより美しい。

だが、

「おや？」

「どうなったのじゃ!？」

……源素は既に動いているのだが、虹の円環が発生しないな。
つまり

「うーむ……失敗したようだ。悪い」

『ちよつとおおおおお!？』

それは観衆全員からの総ツッコミであった。

街一番の観光名所の『アंक・サンプルス』は魔法効果により恒久的に発生する虹　これを幻虹という　その美しさが名物だった。

それが無くなってしまえば、ただの透明な宝玉である。

「おかしいな。源素は間違いなく動いているのだが」

首を捻ってはみるが、出ていないものは出ていない。
首を捻る俺と、依然絶句のニアヴ、それにムンク状態の観衆たち。
なかなか気まずい沈黙が流れていた。

「おい、何を騒いでいる!」

先ほどの声はさすがに高すぎたらしい。

『アंक・サンプルス』は、その持っている魔法効果から、いかなる方法による盗難もできないという話だが、だからといって警備が無いわけではない。

べつたりではないが、トルテ広場には巡回する青甲冑　ルーケイオンの姿があるのだ。

となれば俺の取る手は一つである。

「ニアヴ、準備はいいか？」

「ハッ！　な、なんの準備じゃ」

当然、逃げるための準備、である。

足元に集めるのは、黄源素×1と白源素×7である。
それらを組み合わせた逆回転の二重円

ニアヴの腰に手を回し、ぐっとその身体を引き寄せる。

「な……に、にゃ！」

「さあ、逃げるぞ」

朱雀門で見たニアヴの空気操作魔法（魔法名知らず）を発動させる。

フォンン　　ッ

OK。もしやと思ったが、無声での魔法発動はやはり可能だったな。検証完了だ。

迫ってくるルーケイオンと突如足元から噴き起こった強烈な爆風

に、観衆からは悲鳴と怒号が沸き起こる。

足元から爆風を産み出す。

バシユウウツッ！！

背中を柔らかく押し上げるように威力調整した爆風は、想定通り俺とニアヴを空中に持ち上げ、一足飛びに観衆たちの頭上を超えた。

バシユン！

着地地点でさらにもう一つを発動。ニアヴを抱え、重量を増した俺の落下速度を相殺する。

「なっ、【バニシングバード・エア／澁空鳳】を【コール／詠唱】もなしに使うじゃと!？」

「ん？ お前はできないのか」

これは【澁空鳳】という魔法なのか。一応覚えておこう。

輪から抜けてしまえば、こちらのものである。

ルーケイオンから逃げまどう人の群れに紛れ、あとはひた走らるのみ。

ニアヴの手を引き、来た道を引き返す。

「うゝむ。うまくいくと思ったのだがな」

「バカもの！ 『ユーリカ・ソイル』の歴史以前からある至宝になんたることを……い、いやそれ以前の問題としてじゃな!？」

「おっと、小言は後で聞く。今は逃げるぞ」

「全く、お主は次から次へと……信じられぬことばかり起こしおる

！
」

言ったその声は、存外俺を責める響きを含んでいなかった。

ゴウン

「おい、何があった！ アンク・サンブルスの幻虹が消えているではないか！ こんなことは前代未聞だぞ！ 誰の仕業だ！？」

石畳に押しつけられ、尋常ならざる迫力で問責されているのは、先ほどワーズワードにからかいの声をかけた街の大工ゴードンである。

たまたま逃げ遅れた彼の運が悪いだけだが、そんなことを考慮してくれるルーケイオンではない。

「さあ、言え！」

「うぐぐ……許してくれよえ！ おれにも何が起こった、わからねえんだ！」

その言葉に嘘はないだろう。

彼は仕事が終われば、こうしてアーティファクトを見に来る。ただそれだけが楽しみの街の大工なのである。

今日も観光客に混じってその美しい七色の虹を眺めていただけなのだ。

勢いあまって虹の輪に触れてしまう観光客をからかうのが、楽しみの一つだということはあるだろうが、それは罪に問うほどの悪行

ではなかった。

今日は若い男だった。

見ない顔であったが、アंक・サンプルスは国内だけでなく、世界的にも有名であるため、それも当然のことだ。

その男が知り合いであろう獣人の娘と二三言葉を交わしたかと思うと、さっと宝玉に手を伸ばした。

それが何を意味するのか、彼にはわからない。

だが、もし悪しき企みがそこにあったとしても、どうともできるはずがない。アंक・サンプルスは何ものをも寄せ付けない無敵の防御能力を持っているというのは有名な話だからだ。

だが、そこで恐るべきことが起こった。アंक・サンプルスの虹が消えてしまったのだ。

最前列で見ていたゴードンの驚愕は、計り知れぬものであった。細かいやり取りは聞き取れなかったが、最終的に、アंक・サンプルスを元に戻そうとして失敗したということが聞こえてきて彼も皆と一緒に腹から声をあげたのだった。

ゴウン

組み伏せられ、呼吸も碌に出来ない状態でゴードンはなんとかそこまでの状況を説明する。

「バカをいうな！ アंक・サンプルスは帝宮最高魔法師ウォルレイン・ストラウフト様でさえ、いまだその魔法効果を解明できておらんのだぞ！」

「ウグ……そんなこと、おれに言われても……っ」

ゴウン ゴウン

そこで、ゴードンの目が見開かれた。

「あ、あ、あ」

空を指差す。

「なんだ、しっかり話せ！」

広場に残る他の人々も同様に、信じられないものを見ていた。
みな一様に目を見開き、顎を落とし

男を組み伏せているルーレイオンの衛士のみが気づけない。

ゴウン ゴウン ゴウン

そこには街の外縁を根とし、ゆっくりと円を描いて変遷する大輪の幻虹……古の王国にて『アंक・サンプルス／孵らぬ卵』と名付けられたアーティファクトの、本来の機能が動作し初めていた。

Wandering Wonder 07 (後書き)

主人公の一人称だけで書き進められる。
そう思っていた時期がなこにもありました。

「ハアハアハア……」

「お主、あれほど手際よく逃げ出しておいで、なんじゃその体たらくは」

「ぜ……ハ……体力には、自信がない、のだ」

現代ツ子をなめないで頂きたい。

「それよりも！」

街を分断する川にかかった石橋の上で、ニアヴがビシリと天上を指差す。

「あれはどういうことじゃ!？」

見上げる街の上空に、虹が架かっていた。

「うむ、俺も疑問だったわけだ。我が事ながら、調律に失敗したとは思えなかったからな。動作を正常化させた結果、虹の発生する半径が広がったのだらう」

おそらく今、この街の殆どの住人が同じように、上空を見上げている。

「大事じゃぞ!？」

「俺の国には『大は小を兼ねる』と言う言葉がある。なに、問題があるならその時に戻せばいいんじゃないか？」

「く……お主のことだ、それも嘘ではないのであろうな……本当に

アーティファクトを調律することができるのかや……」

そうだと云ったはずだが、どれだけ信用がなかったのだろう。

「それほど驚くことではないと思うのだがな。魔法使いであれば、道具に魔法をかけることができるのだろう？　アーティファクトだと言っても、内部の複雑さが違うだけで、原理は同じなのだから、どうにもできないということもあるまい」

「ますその認識がおかしいと言っておるのじゃ！」

狐が大きく頭を振る。

「なんだと言っんだ」

全くわけがわからない。

「そもそも、妾たち^{リーヴァ}濠獣にも、もちろん人族の魔法使いにも、道具に魔法の効果を留める『魔法付与』の技術はないのじゃ！　故にその効果を引き出すことは出来ても、修理や作成は出来ぬ！」

「……………」

今度はこちらが絶句する番であった。

「『魔法付与』……それは失われた神代の御業。それゆえの『アーティファクト』じゃ。先ほどの話に立ち戻れば、お主が魔法の力の込められた杖を見たというのであれば……それも間違いなくアーティファクト　古の遺産であることに間違いはない」

「だがそれは貴重なものなのだろう？　街中でそうそうお目にかかれるものなのか」

「ないであろうな。故に、妾はありえんと言ったのじゃ。もし本当にそんな者がおったというのなら、その者はよほど高貴な身分のものか、或いは高名な冒険者ではなかるうか」

「……そうは見えなかったがな」

セスリナの姿を詳細に思い出して、その上でやはり否定せざるを得ない。

ただのずっこけ魔法使いの類だろう。

「やはりお主は非常識極まる！」

「その点、異論はない」

俺も自分のことを常識的な人間だと言ったことはない。そこに認識のズレはないはずである。

真っ直ぐにこちらの瞳を射抜いてくるニアヴ。

俺もまた、揺るぎなくそれを受け止める。

「自分がどれほどのことを行っただのか、わかった上でその落ち着きかや……全く底のしれん男よ。じゃが……それも含めて、お主を見極めることが、妾の役目でもあるということかや」

ああ、そういえば、そうだったな。

「であるならば 聞かせるが良い」

「なんだ」

「……『反魔法』の効果があるアंक・サンプルスをどうやって停止させた？」

その瞳の奥にキラと燃える知識欲という名の欲求。

人のことを散々非常識だと言っておきながら、魔法的な技術については知りたいらしい。

本当に気分屋な狐である。

まあいいが。

「答えは簡単だ。そもそも魔法を使っていない。故にその効果が発動しなかったのだろう」

俺も自分の理論を整理する目的として、言葉を繋いで行く。

「必要なものは単純に停止を念じることだけだ。もっともそれだけでは、今までだれも同じことができなかった理由としては弱い。源素を認識した上で、必要な念、この場合は七つの源素を同時に停止させるような並列思考を行わなければならなかったのだろう」

「並列思考とはなんじゃ」

「例えるならば、小石を空に放り投げて、空中でつかみとる行為。

それがひとつならばたやすいだろうが、二個三個同時となると難しくなる。思考においてそれを行うことが並列思考だ」

「同時に2つ以上のことを念じるということかや……いや、ありえぬ話でもないの。確かに、それならば、偶然にも起こりえるはずもない。うむむ、とすればじゃ、お主の『源素』を視認できる特殊体質は、魔法発動原理の解明だけにとどまらぬ、ということかや」

頭のよい狐である。俺もまだ自分の体質の可能性を推量しかねていたというのに。

「まず、実証済みの効果としてアーティファクトに対する干渉が可能だということが言えるだろう」

「調律と言ったかや。実際には何を行ったのじゃ」

「かみ砕けば、魔法効果を発動させる要因たる複数の源素の不整合を正し調和させた、ということになるだろうな」

「ぐぬぬ……それでかみ砕いておるのかや……」

俺に、というより、その言葉が理解できなかった己に対して、悔しさを感じているようだ。

理論の理解は、俺の翻訳の不完全性による伝達力不足も原因の一つであろう。頭の回転は俺をして感嘆させるだけの早さを持っているのだから、それほど卑下する必要はないと思うのだが。

その考えを持ってなお、狐の悔しそうな表情を微笑ましく感じてしまうのは、俺の性格が最悪だからである。

先ほど説明に用いた小石を、今度は橋の欄干の上で円形に置いていく。

「例を出そう。アंक・サンプルスは7つの源素が内部で様々な図形を描いていた。その一つの形が円だ。その一点が、こう、ずれているとする」

小石の一つを、動かす。

「ふむ。形が崩れてしまうのう」

「そうだ。もちろん、この形が正式な魔法発動の図形であるのかもしれないが、少なくともお前の魔法には、その要素はなかった。見せてもらった全ての魔法が、美しい幾何学図形を描いていたわけだ」

「妾の魔法が美しい？」

「ああ」

少なくとも、あの質の悪い魔法の杖より先にニアヴの魔法を見ていなければ、それをどうにかしようなどということは思いつかなか

つたはずだ。

「そうか、妾の魔法は美しいか。……くふふっ！」

ぶわっさぶわっさ、とその太い尾が左右に振られる。

たったの一言で、ご機嫌パロメーターが一気に上昇する。本当に褒められることが好きであるらしい。

「続けよう。源素をある一定の図形につなげることが、魔法発動の条件である以上、その形には意味があると推定される。であればそれは、より法則的、規則的であることが求められるのではないか」

正弦定理、シンメトリー、黄金比 数学的な美しさは、俺にとっても好ましいものだ。

先ほどずらした石を元の位置に戻す。

「そのずれている源素を正常な位置に戻した結果がこの大虹だ。これを調律と呼ぶ。実証結果から見れば、不完全な源素図形が不完全な魔法の発動につながるという仮定は、それほど外れたものではないと言える」

元々は、俺が見ていて気持ち悪いので、直しただけなのだが。顎に手をやり、難しい顔で俺の置いた小石をみつめるニアヴ。

「……なるほど。お主の理論はわかった。じゃが、やはりこの調律という技術は、源素とやらの見えるお主にしか扱えぬのではないか？」

「源素が見えないというのであれば、かなり困難だろうが、魔法自体は源素が見えない者でも使えるのだ。100%無理ということは

ないだろう」

「もし可能ということになればじゃ」

その言い回しは、例のアレか。

「いらぬ混乱を招く、か？ …… 言っておくが、同じ議論を繰り返す気はないぞ」

だが、狐の反応は、俺の想像とは全く別のものだった。

「…………… いや、革新的じゃ」

思わず、あっけに取られる。

ニヤリと、キバを見せるニアヴ。

やれやれ、一本取られたのはこちらの方が。
ならばその一本、取り返さねばなるまい。

「更に可能性を発展させよう。調律は可能であるということとは」

続けた俺の言葉に、ニアヴが更なる驚愕を見せる。

やはり、知識を深化させる議論は面白い。

かつて地球上の全ての知識という知識、技術という技術を貪り食
い飽きた俺に、魔法という全く新しいものへの興味を与えてくれる
異世界。

この世界は十分に面白かった。

さて、議論は議論で楽しい一時だが、可能性を論ずるのであれば、次は『検証』が必要だな。

Wandering Wonder 08 (後書き)

ご試読ありがとうございます。

「この主人公何言ってんか全然わからん」という方はご安心ください。

私にもわかりません。

その店は大通りに面してはいるものの、全く客の気配がない店だった。

「『竜と水晶の店』か。名の通りであれば、ここにあるはずだが……まずは覗いてみるとしよう」

「冒険者向けの店のようじゃが……えらく寂れておるのう」

埃を吸わぬよう裾で口を覆った、ニアヴが顔をしかめる。

『竜と水晶の店』は金属製の刀剣類を取り扱う、いわゆる武器屋のようだ。

露天商ひしめくユーリカソイルの南・商業地区にあつて、石造りの店を構えているのだから、高級店であると言えるのだろう。

だが、薄汚れた看板は半ば朽ちかけ、窓のない店内はどうにも薄暗い。

ニアヴとの議論の中で俺が提示した可能性、それを実証するために、俺たちはあるものを探していた。

「邪魔をする」

それほど広くもない店内、その正面にその店主がいるとなれば、一応声は掛けねばなるまい。

「……………おう」

声の主は、青い髪をピンピンに立てた、若者だった。

一度こちらに、その薄墨色の瞳を向けただけで、すぐに興味を無くしたかのように、ぐてつとその身体を台座に沈ませる。

「無愛想な小僧よう」

その様子にはニアヴも呆れたようだ。
たしかに、客商売を行う者の姿ではない。

「店の品物、少し見せてもらってもいいか？」
「……………好きにしろ」

これでは、客が寄りつかないのも当然だろう。
だが、店員との心温まる交流が目的ではないので、全く持つてどうでもよい。

「さて、目的のものがあればよいが」

武器屋に入っただのは初めてではないが、アメリカのガンショップと異世界の武器屋を同列に評してもしかたないだろう。

飾りの豪華なツルギは壁に掛けられ、奥には鎧兜を着せられた案山子がディスプレイされている。

ナイフや手斧のような小型の刃物は同じ型の大量生産品が筐に詰められており、逆に大型の武器は一点ものであるらしく、同じ形のものはない。

尤も、そのどれもこれもが埃を被っており、まるで骨董品であるが。

そして、店の軒先の駕籠には、錆びたナイフ、折れた銅剣、ひしやげた兜などが廃材のように詰め込まれていた。

「こんなものが売り物になるのか？」

「ふむ、ゴミではないのかや」

「……穴の空いた鍋と一緒に鍛冶屋に持っていくんだよ」

おっと、まさかツツゴミがあるとは思わなかった。

「なるほどな。教えてくれて感謝する」

「そんなことも知らねえで……アンタら何しに来たんだよ」

バカにするような口調。冷やかしだと思ったのかもしれない。

「君はこの店の店員でいいのかな？」

「ああ？ まあ店員ちゃ店員だけだな。ここは俺の店なんだから、どっちかってえと店主だろうな」

「店主じゃと？ 石造りの店を持つにはちと、若すぎるように見えるがのう」

少なくともこの商業地区では、大通りに幟を立て、ゴザを敷いただけの露店の方が数が多い。

加えて言えば、青年には店を持てるほどの商才があるようには見えない。

「そりゃ、俺の店つつても、親から引き継いだモンだしな。知らねえか？ 勇者コツズ・ランドルフの『竜と水晶の店』。俺はそのコツズの孫で、アレク・ランドルフだ」

知るわけがない。

だが、ニアヴの反応はそうでなかった。

「なんと、汝はコツズの孫かや。これは懐かしい名を聞いたの。言われれば確かに面影はある」

「は？ 知ってンのか、俺のじいちゃんだぞ」

「ふふん、小僧が何をいうておる。生きてきた歳月が違うわ」

マジか。

「汝の祖父コツズは確かに大した人物であつたぞ。いつぞやには、冒険で手に入れたという珍しい『アーティファクト』を見せてもらったものじゃ。なんと言ったか、六足天馬・バルミス卷躊寧の力を宿した

」

「『バルミス卷躊寧の翼』！」

「そう、それじゃな」

「おおおつ！ じいちゃんのことを知ってるなんて、嬉しいぜ！
そうだ、じいちゃんはずつげえ冒険者だったんだ。国宝級のアーティファクトをいくつも持ち帰って、皇帝にも認められて、勇者の称号までもらったんだからな！」

祖父の偉業を語るアレクの瞳は、先ほどの怠惰な店員のそれではない。

「ふむ、それでそのコツズはどうしておる？」

「ああ、死んだよ」

「そうか。それは悪いことを聞いたの」

「かまわねえさ、ずっと昔の話だ。それより、久しぶりにじいちゃんの話ができて嬉しかったぜ！」

彼はよほど、その祖父を誇りに思っているのだろつ。

「俺も武器の扱いには自信があるんだ。冒険にでれりゃ、きっとじ

「いちゃんにだって負けねえんだけどなあ！」

「出ればよいだろう」

夢を語る青年に、俺は至ってシンプルな解を示す。

「……それは無理つてもんだ。親父ももういねえから、俺がじいちゃんで作ったこの店を守っていかねえといけねえんだ。勇者コッズの生きた証、この店を俺が潰しちまうわけにはいかねえよ」

諦めを宿した言葉。

このアレク青年は祖父の語る冒険譚に憧れ、自分もまた冒険者として旅立つことを夢想する、至って標準的な若者のようだ。

また同時に、その祖父の残した店を守るといふ、誰に替わることもできない責任を負っている。

そして、残念ながら店を運営する能力には恵まれなかった。その結果が、この埃を被った商品と、客の訪れない寂れた店内の姿なのだろう。

「そんなことより、じいちゃんを知ってるってんなら、アンタらは大事な客人だ。何を探してんだ？ 安くしとくぜ！」

「ありがたい。では率直に聞こう。この店に『水晶』はあるだろうか」

「水晶？ ……おいおい、うちは武器屋だぜ」

呆れたような、アレクの声。

まあそれは一步入った時点でなんとなく理解したのだが。

『竜と水晶の店』って書いてあったら、あると思っても仕方ないだろう……

「そうか、ないなら仕方ない。邪魔し」

「ガラス玉ならあるんだがなあ」

ん、ガラスはあるのか？

「へへっ、これはじいちゃんに聞いた話だけだよ、『アーティファクト』が隠されてる場所には、なんでも知らねえが宝石の珠やガラス玉がゴロゴロ転がってるらしいぜ。そんで、アーティファクトにはそれを護る『竜』^{ガイディアン}がいるってのが　まア、この『竜と水晶の店』の屋号の由来の話だからな。持ち帰った宝石の大半は売り払っちゃまったらしいけど、それほど金にならねえガラス玉の方は、冒険の記念に取っておいたんだとさ」

それは思いもかけない重要な情報だった。

「ワーズワードよ、今の話、聞いたかや!？」

「もちろんだ。……その話が本当だとすれば、まず間違いだろう。巡り合わせとは恐ろしいものだな」

「ん、どうしたんだ？」

「いや、こちらの事情だ。それよりも、そのガラス玉、見せて貰えないか？」

「小僧よ、急ぐのじゃ!」

「あ、ああ、ちよっと待ってな」

急に落ち着きを無くしたニアヴの様子に多少とまどいながら、アレクは店の奥へと消えて行く。

「のう、アーティファクトと共に残されておったということは、つまり、そういうことなのじゃろう!？」

「おそろく」

「おおっ！」

「待たせたな……よつと」

ガシャガシャと音を立てて、古ぼけた木箱が置かれる。中には、大量のガラス玉が詰まっていた。薄く色のついたもの、ひび割れたもの、大きさも様々である。小さいものはビー玉サイズであり、大きいものはこぶし大である。

ふむ、統一された規格はないようだな。

「どれがよいのじゃ？」

そわそわと俺とガラス玉との間で視線を往復させるニアヴ。ニアヴにとつても、これから行おうとしている検証実験は、大いに興味をそえられるものなのである。

「そうだな」

当然大きい方が良さだろうが、手持ちのシット旛との相談もある。また、実験が成功したのなら、それをそのまま実用化の検証まで持っていきたい所だ。

となれば

壁に掛かっている一本の剣。それは柄に飾り玉をつけられる造りになっている。

ふむ、これでいいか。

丁度剣の柄に嵌るであろうサイズだ。

「これが良さそうだ。ちなみに持ち合わせは少ないのだが」

「つつても値段も決めてねえしな。じいちゃんの昔の知り合いに会った記念にタダでやるよ」

「そうか。ありがたい」

ありがたいのだが、本当に商売に向いてない青年である。

この店が潰れるのも時間の問題だな。

ふむ。それならば 俺の脳内に一つのシナリオが描かれる。

おっと、不安を覚える必要はないぞ？

今回のそれは、全ての者が幸せになる、win-win、オールハッピーなシナリオなのだから。

Wandering Wonder 09 (後書き)

新キャラ、増えた。

『更に可能性を発展させよう。調律は可能であるということ』
』

橋の上で俺がニアヴに語った言葉。それは、

「調律は可能であるということは、ゼロからの魔法付与もまた可能であるかもしれないということだ」

先にニアヴによって否定された『魔法付与』の可能性。それを再検討しようというのだ。

「できるのかやっ!？」

ニアヴの反応は実にわかりやすいものだった。
今のニアヴは知的探求心の塊である。

「試してみるしかあるまい。となれば、まず探すのは魔法の杖、ア
ンク・サンプルスに共通する、魔法付与の媒体だな。おそらくは『
水晶』だろう」

「そ、それがあれば」

まずは仮説ではあるが試せるわけだ、『マジックアイテム』の作
成を。

「可能性はある。うまく行けばシャルへのいい土産になるだろう」

と言ったことだった。

今、手にしているのは望んだ水晶ではなく、ガラス玉である。

だが、先ほどのアレクの話によれば、これは『アーティファクト』とともに保管されていたものだという。

であれば、むしろこちらの方が『魔法付与』の検証用として適していると言えよう。

なにより、タダだし。

「では始めよう」

「ここですかや？」

厳かに宣言する俺に、ニアヴが疑問を投げかける。

それはまあ、有り体に言って、成功すればこの世界の常識を一つ革新することになる実験に、このアレクなる青年を立ち会わせるのか、といった意味での疑問だろう。

だが、それでよい。俺の描いたシナリオが最大の効果を得るためには、むしろ立ち会ってもらわねば困る。

「今から一つの実験を行う。もう少しこの場を借りて良いだろうか？」

「いいぜ。なんだか知らねえが、今日は外も騒がしいしな。ゆっく

りして行ってくれ」

……外が騒がしいのも、俺の仕業なんだがな。

「ありがとう。では改めて 実験を開始する」

ごくりと、ニアヴが喉を鳴らす。アレクはただガラス玉を手のひらに載せているだけの俺に、いつその実験とやらを始めるのかと、聞いたそうである。

だが、既にそれは始まっているのだ。

俺の身にまわりつく無数の源素。その中から、四つを選択し、ガラス玉の回りに寄せる。

赤源素が3つと、黄源素が1つ。

このガラス玉に【フォックスファイア／狐火】の魔法を付与するである。

まず第一に源素は物質を透過し、留めおけない。それは既に確認されていることだ。

第二に宙に漂う源素それだけでは何の魔法効果も発生せず、一定の図形を組み、『念』じること魔法は発動する。

そして、魔法効果の終了と共に、源素の図形結合はとかれ、源素はそのまま分散または消失する。

それが魔法の源素理論である。

試しに赤源素の1つを、ガラス玉にくぐらせて見るが、それはガラス玉を透過して、向こう側に抜けてしまう。

ではどのようにすれば、ガラス玉内に源素を留めることができるのか。

街で見た二件のサンプルから推論し、導き出した第一の解がこれだ。

4つの源素を『ガラス玉内部に集め』、そこで図形を組み上げるのである。

個別の源素はすり抜けるが、物質内部で接続された源素は、そこに留まる性質を宿すのではないか、という仮定である。

俺の念じた通り、4つの源素はガラス玉つまり物質内部で三角錐の形に接続される。

ここまでは問題ない。

接続された三角錐が、これでもまだガラス玉を透過してしまうのであれば検証は失敗である。結果は

キンッ……

そんな音が聞こえたわけではないが、【狐火】の三角錐は、ガラス玉内部で確かに反射したのである。

つまり

「第一段階、成功」

「ん……なにかしたのか？」

アレクの反応は至極真つ当である。

ハタから見れば、俺はただ、その手のひらにガラス玉を乗せて、眺めていただけなのだから。

次の段階へ進もう。

「壁に掛けてある剣を借りてもいいだろうか」

「剣を？ 何に使うんだ？」

「実験の続きだ。成功すれば面白いものが見せられるだろう」

「ふーん。まあ好きにしてくれ。どうせずっと昔からの売れ残りだしな」

手に取ってみれば、拵えの良い逸品であるとわかる。

売れなかったのは、別の原因に違いない。例えば、埃を被らせたままで長い間触られた形跡もなさそうな、そのディスプレイ方法であるとかだな。ハタキくらいかけなさい。

剣の柄に、ガラス玉を嵌める。

ガラス玉の中では、三角錐がゆらゆらと揺れている。

「……………」
「……………」

その様子をニアヴとアレクが無言で眺める。

ニアヴは、期待故の無言であり、アレクは疑問故の無言である。

さて、では第二段階へ進もう。

魔法付与及び発動の検証である。

当然【狐火】の発動を念じること、その効果を発動させることができるだろう。

だが、道具への『魔法付与』を考えた場合、それでは二点の仕様

がクリアできない。

一点は魔法効果の恒常発生である。

同じ魔法効果を繰り返し発動できないのであれば、それは道具への魔法付与とは言い難いものである。故に、魔法を発動させても、源素の結合が解けないことが必要である。

そしてもう一点が、利用者の観点である。『魔法の道具』である以上、それは誰にでも扱えるものでなければいけないはずだ。

魔法発動を『念じること』、それを俺はさも当然の様に行っているが、実際には発動する魔法のイメージが先に存在し、かつ構築された源素図形に向かって念じるという定められた手法が存在している。

源素が見え、かつ、脳内で明確にそれをイメージできる俺だからこそ、容易くそれを行っている。

地球では ネット上では 人が想像しうる、ありとあらゆる仮想事象は可視化済みであり、例えば、赤熱を吹き上げる炎の剣のイメージを俺は確かに持っている。

それは既に『想像』ではなく、TV、映画、ゲーム、アニメ、静画 どこかで目にしたことのある既知の『現実』なのだから。

だが、この世界の人々にとっては、魔法とは神秘の術であり、想像を超える『未知なるもの』だろう。

故に一般的な利用者の観点から考えれば、魔法のイメージを必要とせず、規定の魔法効果が発動できなければいけない。それが『マジックアイテム』なるものの条件であるはずだ。

この二つの仕様を満たすにはどうすればよいか？

試行するしかないのは当然だが、全くの手探り状態というわけでもない。

仮定に基づくトライアンドエラーはハッキングの基本である。

検証魔法に【狐火】を選んだのは、その性能、利便性を考慮したからである。【狐火】はただの炎ではなく、発動者の思考によりその効果を制御できる魔法だからだ。

ならば俺が『炎の剣』をイメージすれば、【狐火】の三角錐は、その通りの効果を発生させるだろう。

吹き上げる黄金の炎は利用者には熱を伝えず、選択したターゲットのみを焼殺するイメージ。

その構築されたイメージを、ガラス玉に注ぎ込む。だが、発動はさせない。

『イメージ』のみが注ぎ込まれ、魔法発動が押さえ込まれているための圧力だろうか。三角錐は、ガラス玉の中で激しく回転運動を始めた。

……この状態には見覚えがある。セスリナの持っていた『魔法使いの杖』、あれも宝玉の中で同じように源素が回転していたはずだ。であれば、これは正しい手順であるに違いない。

次である。

『利用者の観点』、そのもう一つの課題についての考察を進める。魔法を知らない者が魔法の道具を扱うには、どうすればよいのか？

この問いに対する答えを、俺は案外すんなりと思いついていた。魔法の道具Ⅱ『原理のわからないなにか』。

実はそんなものは、地球上では溢れているのである。

車、電子レンジ、アイシールド、COINシステム 高度な科学技術で作られたそれらのものを、だが俺たちは誰でも使うことができる。

一般人がそれをどうして使えるのか？

それは当然、電源のON/OFF スイッチの存在である。

つまり、魔法発動を制御するスイッチを設定してやればよいのだ。
『魔法発動を念じる』のではなく『設定したスイッチが入ったときに魔法が発動するように念じる』。

おそらく、『魔法付与』の技術は、このスイッチングの概念こそが、最大のポイントである。

ガラス玉なり宝玉なりの中に源素を込めるまでは、きっとニアヴにもできることだろう。だが、このスイッチングの概念が無ければ、それは『マジックアイテム』たり得ない。

チャキリ

剣を構える俺に、二人の視線が集まる。

そもそも『魔法』とは なんだ。

源素は人間の念や意志、思考と言ったものに反応する。

その源素の動きを制御して図形を構築し、明確なイメージを持つて発動させるものが、魔法だ。

そして、源素図形を物質内に封じ込め、魔法効果のイメージにスイッチングの概念を追加してやれば、それはマジックアイテムたり得るのではないかという仮定。

その理論に穴はないか？ 反証がないか？

脳内で、これまでの手順をウォークスルーで振り返り、何度も自己レビューを繰り返す。

魔法が常識的に存在するこの世界ですら、誰もなしえていないという『魔法付与』。それをこの世界の住人ではない俺に成功させることが本当にできるのだろうか。

そんな不安こそを覚えるべき状況であるべきなのに、むしろ必ずや成功するだろうという自信すらを持ち得てしまうのはなぜだ？

魔法自体を今日初めて知ったばかりではないか。根拠のない自信は、必ず失敗の要因となる。何を根拠として、俺は自信を持っている？

なぜ、これほど魔法というものに拒絶反応が働かない？

唐突に閃くものがあつた。

「ああ、そうか」

「なにか問題があつたのかや？」

「いや、逆だ。問題が解決されたのだ。そうか、これは『感応入力』第三世代インターフェイス、VUI（Virtual User Interface）により実現される思考によるシステム操作だ。

魔法とはつまり、入力に対する出力であり、アーティファクトは

さながら規定された機能をもつ実行プログラム。

魔法付与？ 違うな、これは俺が慣れ親しんだ感応入力によるコーディングだ。なるほど、ならばどこに失敗する理由がある。根拠がない。バカな、根拠ならあるではないか」

「ど、どうしたのじゃ、一体何を喋っておる！？」

判然らないだろう。判然るはずもない。

だが、それは俺にはこれ以上ない明確な答えだった。

根拠を持って自信とするのなら、この俺に失敗などあろうはずもない。

であれば さあ、仕上げを御覧しあれ。

「アレク」

「……っ、おお」

唐突に名を呼ばれ、思わずうわずっちまった。

『竜と水晶の店』。俺の偉大なるじいちゃん、勇者コッズ・ランドルフの残した店だ。

小さい頃に聞かされた数々の冒険の話。じいちゃんは俺の憧れだった。

俺もでっかくなったら冒険者になって、世界中の『アーティファクト』をこの手に掴むのだと、そう将来を夢見ていた。

だが、そのじいちゃんが死んで、親父も後を追うように死んじまって、俺にはこの店だけが残された。

冒険者になるのは俺の夢だ。だが、同時に、じいちゃんが残した店を潰すこともできなかった。じいちゃんの名を汚すわけにはいかなかった。

結果俺は店を継いだが、俺にはじいちゃんや親父と違って、商才ってモンが全然なかった。

店は日毎に寂れ、客足は遠のいた。俺だって頑張ってるつもりだったけど、そもそも何が悪いのかすらわからなかったんだ。

そんなある日、不思議な男との獣人の女の客がきた。

女の方はなんと、昔のじいちゃんを知っているというじゃねえか！俺は嬉しかった。

獣人の女は、あんまり見ねえ工口い服で……おっと、そうじゃねえ、久しぶりに、他人とじいちゃんの話ができたのが嬉しかったんだ。

「実験の手伝いを願いたいのだが、剣は扱えるか？」

「ああ、扱えるかだって？ 俺の剣は勇者コッズ直伝だぜ、『竜』が出たって倒してやらア！」

「そうか、それは頼もしい」

くつくと男が苦笑いするように答える。ガキの自慢話に苦笑する大人の反応ってやつだ。バカにされてるワケじゃねえのは見てわかるから別にかみつきやしねえが、ガキ扱いされんのも癪に障る。

くそつ、見て驚けよ、俺の剣裁き！

男がガラス玉をつけた剣を手渡してくる。

「その剣に炎の魔法を付与してみた」

「……はア？」

なにをいつてんだ。アホなのか、コイツ。

だが、男はそんな俺の反応を無視して、話を続ける。

「発動スイッチは、コマンドワードを採用した。剣の柄を握った状態で次の言葉を唱えるだけだ 『ウェイクアップ・ファイア』」

「うえいく……？ なんだそれ、どこの言葉だ」

「イギリスという国だな」

やべエ、全然しらねエ国だ。

俺も冒険者になってれば、そんな遠い国のこともわかるようになるってたんだろうか。

「こちらの言葉でなければ、誤って起動してしまうこともないだろう。いいから、ほら『ウェイクアップ・ファイア』」

「う、うえいくあつぶふあいあ」

流されるまま、俺はその異国の言葉を繰り返す。

そして、視界が弾けた。

アレクの声に反応して、剣に仕掛けた魔法の効果が発動する。
埃を被った剣の、その刀身のハバキから切っ先に向けて、劫ッと
黄金の炎が吹き上げる。

常識的には火のついた剣など手に持つことはできないはずだが、
そこは魔法の魔法たる所以だろう。所持者に熱を伝えることはない。
薄暗い店内が一気に光に包まれ、驚愕に目を見開いたアレクの表
情をも浮かび上がらせる。

これで魔法というものを使えない人間でも起動させることができ
ると、検証できたわけだ。

つまり、

「ふおおおお、ワーズワードよ！ こ、これは……やったのじゃない！」

「ふむ、第二段階も成功だ」

「す、す、すごいじゃ！ お主は天才じゃ！」

歓喜と興奮に包まれたニアヴが、飛び付いてくる。

これが男女の包容であったなら、それはそれで絵にもなるのだが、

およそ人とは思えない跳躍力で飛び付いてきたニアヴは、俺の首に足を回し、そのまま頭をホールドした。

……肩車である。

頭の上ではしゃぐニアヴが、ぶあっさぶあっさとその尾を振る。

「重い……」

「我慢せい！」

重みに耐えかね、徐々に前傾する俺の頭をペシペシとニアヴが叩いてくる。

ぐぬぬ。

「な、なんだよこれ、どうなってんだ！ ア、アーティファクト！？」

同じく驚愕を口にするアレク。

「言ったとおりだ。今この場で、炎の魔法を付与した。対象物以外は燃焼しない魔法の炎だから、持っていても熱くないだろう？」

「あ、熱くはねえが、……ってこんなのありえねえー！！」

やれやれ、これは驚愕ではなく、混乱の類かもな。

だが、まだ検証実験は終わっていないのだ。

彼には存分にその剣の腕とやらを見せてもらわなければならない。

「少し落ち着け。まだ、やってもらうことがある。次はそうだな……そこにある鎧を斬ってみろ」

「お、おう……わかった！」

疑問も反論も心の棚に上げてしまったらしいアレクが、俺の言葉

に素直に従う。

やりやすくなって大変助かる。

さて、目の前にディスプレイされた鉄の鎧。これを斬ることは、筋力や剣の硬度だけではかなわないだろう。

『魔法付与』が成功しても、そこに実用性 付与した魔法相応の威力 が伴わねば、それはタダの学生の卒業研究と同じである。

行動に目的を与えてやった途端、アレクの動きに変化が現れる。腰を落とし、力学的に考えても、全ての筋力がその剣に乗るであろうと思われる美しい構え…… 剣術を知らない俺が見ても、合理的な構えだと判断できるのだから、これは本当に大したものなのだろう。

「ハアツ!!」

短い発気と共に、その剣が振られる。

ガァン!

炎の魔剣が、大きな音を立てて鎧に打ち込まれるが、さすがに斬るにはあたわない。だが、その接点が白煙を上げ始めたかと思うと、鎧は一気に赤熱し、もの5秒もしないうちに、ドロリ…… とその板金を融解させ始めた。傷口を開いて行くように、炎の魔剣は徐々に鉄の鎧を切り裂いて行く。

「ルああああアア!!」

半ばまで剣筋が通った時点で、更なる剛力を込めて、アレクが吼える。

ズズ……ゴトンッ！

シューウウウ

切り口を真つ赤に融解させて、遂に鉄の鎧は上下に分断された。実質的には、30秒程度がかかってしまっている。ふむ、実戦を想定した場合、30秒というのは、少しかかりすぎな気もする。

鉄の融点はおよそ1500度だが、それを一瞬のうちに溶かすには、およそ3000度が必要となる。

一瞬とはいかなかったが俺が見積もった温度は生み出せているよ。うなので、設計上の問題ではないのだが、やはり3000度の炉で鉄を溶かすのと、斬りつけた一点が3000度に加熱されるというのでは、融解にかかる時間に差が出るのは仕方ないだろう。

実用に耐えないのであれば、同じ炎の魔法でも別の効果を持つように変えた方がよいかも知れない。さてどうしたものか。

「一振りで鉄の鎧を絶つじゃと！？ 信じられぬ威力じゃ！」

「ス、スゲエ！ これは間違いねえ…… 『アーティファクト』の力！」

……この程度でも喜んでるみたいだし、いいか。

「よくやってくれた。最後に魔法を解除するコマンドだ。『ス

タンバイ・ファイア』」

「すたんばい！ ふぁいあ！」

ぱつと火の粉が拡散するかのよう、刀身を包んでいた黄金の炎が消失する。

あとには、余熱で埃が焼き払われ、打ち立ての剣の輝きを宿す魔

剣の刀身が残された。

柄のガラス玉の中では、4つの源素がくると回り続けている。魔法効果の発動終了により、その図形接続が解除されないのは、物質内で図形を組み上げた効果なのかもしれない。ああして、回転運動をする内に魔力？を再び蓄え、魔法効果が再利用可能になるのかもしれないな。

「ふむ、問題なく停止したな」

狐を肩に乗せたまま、俺はアレクの肩をポムと叩く。

「協力に感謝する。……実験は成功だ」

「「おおおおお！！」」

薄暗い店内に、再びの歓喜が、こだました。

頭の上で暴れる狐をさすがに振り落とし、アレクに向き直る。

「アンタ、スゲエ！　すごすぎるよ！」

興奮さめやらぬアレクが、握手を求めてくる。

まず現時点で俺に過大な尊敬の念を抱いているのは間違いないだろう。

魔法付与の実験をわざわざこの店内で行っただけの効果はあった

ようだ。

これで準備した舞台は整った。では、先ほど描いたシナリオの次のページを捲ることにしよう。

「アレク、今回の実験はお前のヒントと協力がなければ、成功しなかっただろう。感謝を言うのは俺の方だ」

「そんな、俺なんて」

「お前は確かに、勇者コッツの勇敢な魂を引き継いでいる」

俺はそのコッツとやらは知らないのだがな。

まあ、言葉はなんでもよい。もっとも効果が高いと思われる表現を選択しただけだ。

「！　そ、そうかつ？　俺がじつちゃんの　そんなこと言ってもらえたのは初めてだよ！　へへっ、すっげえ嬉しいぜ！」

少なくとも、店番としての彼に、褒められるべき成果はなかったのだろう。

「感謝の気持ちというわけではないが　その炎の魔剣はお前に与える。それはお前のものだ」

元々俺のものではないのだが、『魔法付与』を行った事実を考えれば、何割かの所有権が俺に移ったと、誤認しても仕方ない状況だろう。

その状況を利用し、ありもしない所有権の放棄と引換に、信頼の獲得を行う。

「い、いいのかよっ！　『アーティファクト』の剣だぞ……ウチじやアレだが、出すトコに出せは、一生遊んで暮らせるだけの金が手

に入るんだぜ!？」

「問題ない」

金に換算できる価値の提供は、万人に共通する影響力を発揮する。

「あ、ありがとうッ! ……こ、この剣が俺のものに……ッ!」

プルプルとあふれ出る感動に身を震わせ、炎の魔剣を掲げるアレク。こうかはばつぐんだ。

そして、ここからがシナリオの最終章である。

「そして その剣を持って、お前は冒険の旅に出ろ」

「なっ!？」

突然冷水を浴びせかけられたような表情になるアレク。

「……へっ、何をいつてんだ。俺にはこの店を護るっていう責任が

」

「それはこの店がお前の祖父の残したものだからか」

「当たり前だろ!」

「だとしたら、お前はすでに失敗している。見ろこの店内を。客もなく、商品は埃を被り、コッズの為した名声を偲ばせるものは何も残っていない」

「ッ! なんだってんだよ、いきなり!」

アレクの瞳に怒りが満ちる。そうだそれでいい。

「考えろアレク。今お前は祖父のために、この店を護るといった。だが、勇者コッズ 偉大なるお前の祖父は、お前にそんなことを

望んでいると思うのか？」

「ッ！ じいちゃんの望み……？」

そのようなことはまるで考えたことがなかったのだらう、愕然とするアレク。

「そうだ。その狐が言っていただろう。勇者コッツは素晴らしい人物だったと。そんな人物が、孫が自分の面影ばかりを追いかけて、この店で一生を腐らせることを望むと思うかと、それを聞いている」

俺が言っても説得力がないので、一応狐の名を借りておく。

「それは ！ それは………」

言葉を失うアレク。

「わからぬなら教えてやろう。祖父の誇りを護る方法はこの店を守ることではない。お前が冒険者として名をあげ、この世界にお前自身の名を残すことだ」

「お、俺自身の名を……？」

「そうだ。そして、それはお前の望みでもあるはずだ」

「たしかに俺はずっと冒険者になって、じいちゃんみたいに世界中を駆けめぐりたいって思ってたけどよ……」

「諦める必要はなかった。だが、心優しきお前は、自分の望みよりも、祖父の店を選択した」

相手を理解するには、その心の動きの全てが予知できるまで相手を知らなければならぬという脅迫観念を持つものがある。

だが、それは間違いだ。理解とは、相手の行動を知ること、それ

だけ足るのだ。

俺が知っているアレクの行動は、冒険者にあこがれを持っていることと、冒険者の祖父の残した店を護っているというその二点のみ。その二点だけ、俺はアレクを理解できている。

「わからねエ！　俺はどうすればいいんだよ！」

アレクは今、俺の言葉に感情を熱され、冷却され、正解のない答えを求めて、その思考は無限迷宮へと落ちている。

ならば。

ならば、俺はただその迷宮の出口を指し示してやるだけでいい。

「……今『お前のために』俺が問題を解決しよう。行ってこい店のことは心配するな。俺が面倒をみてやる」

無間の闇に差し込む一条の光、そこに飛び付かないという選択肢は今のアレクには『見えない』。

「お、俺のために　！？」

そして、俺のために。

「勇者コッツの剣術とその炎の魔剣があれば、お前は最強だと、俺はそう信じる」

「お、おおお！　し、師匠　　！！」

師匠？

感激に泣き崩れるアレクの肩に手を掛ける。

「遠慮はなしだ。俺とお前の仲だろう」

「うつつ、ぐすつ……はいっ、ありがとうございます、師匠ッ」

ポンポンとその肩を叩いていると、背中に視線を感じた。

俺は背中への気配には敏感なのだ。

「……………」

「（くるり）やあ。アレクくんがたびにでるので、そのあいだ、このみせをみてあげることになったよ」

「……………。お主」

狐の身で、冷凍された魚介のような目で睨め付けてくるとはこれイカに。

実験は成功し、アレクは人生の目的を得て、俺たちは当面の生活スペースを確保できた。

全てがうまく行ったというのに、ふむ、何が気に入らないのだ？

「師匠！ 行ってきます！」

「ああ、行ってこい」

「はいッ！」

威勢良く飛び出して行くアレク。空にかかった『アンク・サンプルス』の虹にも気付かないくらいなのだから、次の街に着くまでに冷静さを取り戻すことはなさそうである。

コッツが彼に話した冒険譚の中には、未だ未探索の遺跡、謎を残したままの洞窟の情報があるらしい。まずはそれらコッツの足跡を辿るという。

そしていつか、俺の話した『イギリス』へも行ってみたいらしい。グレートブリテン島にあることは教えてあげたので、是非、頑張っ
て頂きたい。

「……………（ジト目）」

「もうそろそろ、その目はやめろ」

「お主はやはり、危険な男じゃ」

「否定はしない。同時に俺は自分の行為を弁解するつもりはない。アレクにとって、冒険者として生きる道こそが最良だと考えたのもまた事実だからな」

安定した居住スペースが欲しかったことも事実だが、聞かれていないことを口にする必要はない。

「むむっ…………その点に関しては妾も同意見じゃが…………じゃが、お主は危険な男じゃということに変わりはない！」

「否定はしないというに」

「はあ……全く、今日一日で50年分の驚きと動揺を味わったわ」

……一体何年生きているんだ、この狐は？

「それより、待ち合わせの時間だ。店を閉めて、シャルを迎えに行くぞ」

「飯の時間かや。それは楽しみじやのう。人の街のもっとも良いところは、飯がうまいことじゃからな」

「腹ぺこキヤラは呼びじゃない」

「阿呆！ 食のうまさは豊かさの証じや。人の世の安寧をかみ締める幸せこそが、妾の楽しみじやと言っておるのじや」

「ご高説は承っておくが、その涎の垂れた口元こそ隠さねば、説得力はないに等しいんだがな」

「くふふ、サチアロの串はあるかのう」

狐はすでに俺の話聞いていない。

トンと、つま先立ちとなると、

「喜びは我とあり 我は今そちとある そちが並べる馳走こそが
我に喜びを与えてくれる

サチアロ アピアにメルバーユ 鳥ならティンクが好物じや」

高い歌声。くるりとくるりと身を回転させながら、食材の名を論
う狐の舞い。あべつら

「愉しみは我とあり 我は今そちとある そちが据える膳こそが
我に愉しみを与えてくれる

マシアロ スーリはセレムに絡め 魚は焼いたラキじやろう」

舞いを捧げる対象は、これもまた神なる存在なのだろうか。

食に対して感謝を示すことは、この異世界においても変わることはないらしい。

一神教徒が祈るように、多神教徒が手を合わせるように、この世界では舞いにより、その意を示すのだろうか。

ニアヴの身に纏う布服は、日本人的には巫女の姿を連想させるものであり、そのニアヴの舞いは、まさに具現化された日本の原風景である。

シャラン

舞い終わり、ニアヴがトン、と振り返る。

神楽鈴の幻聴すらも聞こえる、そんな神聖な静寂を

不覚にも俺は、それを美しいと思ってしまった。

「……バカをやっていないでさっさと行くぞ」

「バカとはなんじゃ！ 妾の舞いは、それはありがたいものなのじゃぞ！？ それを目にした旅人は、それはそれはありがたい、一切の食材を供えてゆく程にのう」

「崇られないように、の間違いだらう」

「くっ、もうよいわ！ お主に雅^がを求めたのが妾の間違いじゃ！」
「理解は早くて助かる」

心からの感動を伝えたりすれば、この褒めて褒めて狐がどれだけのぼせ上がるかわからない。

いずれ言葉にする日がくるかもしれないが、今ばかりはこの感情
俺の不覚と相殺させてもらおう。

アレクから預かった店を閉め、俺たちは待ち合わせの場所へと向

かう。

『ロッシの梢亭』へは、来た道を更に戻ることになる。

そこそこの時間が経過したはずだが、未だに街行く人々は空を見上げては声をあげており、見上げる虹の向こうに、赤みを帯びてきた日が透ける。

「美しいものだ。これは観光資源として、更なる集客効果が期待できるんじゃないか」

「人に害をなす効果がなければよいがの」

「なに、虹に『内側の人間をすべて殺す』などという効果があるなら、今頃はこの街は滅んでいる。そうでないなら、問題ないということだろう」

「な恐ろしいことを言うではないわ！ 『アंक・サンプル』の魔法効果は今もってわかっておらんのかな！？」

「ならばこそなるようにしなければならないのだから、今ここでどうこういってもしかたないだろう」

「むむっ」

心配性の狐との不毛な会話も、全てが更なる言語解析の助けとなる。

ここまで、無駄な会話は何一つない。

そうこうするうちに、そこはすでに待ち合わせの場所である。

『ロッシの梢亭』の前で、見慣れた少女がブンブンと大きく手を振っていた。

「こっちですー、ワースワードさーん！ ニアヴさまーっ！」

店先で待っていてくれたようだ。

俺達を見つけ、なにやらあわてた様子で駆け寄ってくる。

何かあったのだろうか？

「た、大変です！」

「どうした？」

ピンとたった耳の緊張感から、本当に大変なことが起こったのだと、予測できる。

一体何が

「大変なんです！ 空に『アंक・サンブルス』の虹がですねっ！」

……ああ。

そういえばシャルはまだ知らないんだっとな。
やれやれ、少し落ち着かせたら誤解を解くことにしよう。

「 というわけじゃ、心配せんでよい。いや、警戒はすべきじゃがな。全てこの男の仕業じゃ」

どれとどれを合わせての全てなのか、詳しく聞きたいところだな。それ以前に全ての責任が俺にあるような言い方はやめてもらいたいものだ。

「えーっ！ それじゃあ、この虹は、ワーズワードさんが犯人だったんですかつ」

「シャル、別に禁止されている違法行為を行ったわけではない。被害者がいないのだから、犯人という呼び方はこの場合該当しない」

もつとも、被害者はなくとも、青甲冑　ルーケイオンは確実にその『犯人』探しをしているだろうが。

『ロツシの梢亭』。一階はオープンテラスの飲食店となっており、おそらく奥には個別の寝室を備えた標準的な宿泊施設なのだろう。

『ロツシ』が人名だとすると、調理場からたまに顔を覗かせる、あのヒゲモジャ氏がロツシ氏なのだろうか。『ロツシの梢』までで意味をとれば、樹木の名前なのかもしれない。

まだ日も完全に沈みきっていない時間帯なのだが、ここそこに酒を酌み交わす冒険者の姿があった。

耳をそばだてれば、そのどれもこれもが『アंक・サンブルス』についての話題のように聞こえる。

こちらも、シャルと別れてからの話題を肴に、早めのディナーである。

提供された酒類に、狐は早々に酔いしれていた。味は完全にビールだ。冷えていないのであまり飲む気はしなかったが。

「ふえええええ、アーティファクトって作れるものなんですかあ」

「ああ。正確にはアーティファクトではないので、『マジックアイテム』というべきだな」

期待通りの反応、ありがとう。

「それで、その武器屋のアレクさんのお家を預かることしたって…あれ、ワーズワードさん、武器屋さんになるんですか？」

「折角物売れる店舗があるのだから、生活費を稼ぐ程度には利用できそう。基本的には寝泊まりできる場所がタダで借りれたということだな」

「街にきてすぐお友達ができて、お家まで貸してくれるなんて、すごいです！」

「全くもって……ありえんのじゃあ！」

「だが事実だ。……っと、いい加減に飲むのを止めたらどうだ」

もつとも、お友達云々のくだりはアレクの主観に沿えば、だが。

「と言うわけでシャル、君もどうだ？ 宿泊も安くはないのだろう」

「そうですねー。あ、でも今日はもう宿に荷物もいれてしまいましたが、大丈夫です」

「そうか」

「いえ、お誘いありがとうございますっ、明日はお世話になっちゃうかも知れません、えへへ……」

照れたように耳をくねらせるシャル。

この世界で初めて出会ったのがこの天真爛漫な少女だったというのは、地獄に仏、最大級の幸運の一つだろう。

陽が暮れてきていた。

当然ながら、この街に街灯などというものはない。日暮れ「今日一日の終了である。」

「さて、『フォックスファイア／狐火』の魔法があれば夜道も問題ないが、そろそろ店に戻った方がよさそうだな」

「そうですね……でも、もう少しだけ待ってください。『あれ』がそろそろ始まりますからっ！」

「あれ？」

「はいっ！」

何が始まるというのだろうか。

「くふふ、見て驚くがよいぞ！」

「あ、ほら！ はじまりました、見てください」

俺は、突き出されたその指を見る。

「きれいな指だな」

「はうっ……あの、私の指じゃなくて、あっちですね」

「わかってる、冗談だ」

「あうあう」

「……………」

「だから、その目は止めると言った」

さて、何が始まるというのだろうか。

時間は少し遡る。

『朱雀門』門下、ルーケイオン詰め所。

「遅いッ！」

「ご、ごめんなさああい！」

そこには青い甲冑に身を包んだ偉丈夫オールドと、赤いローブに身を包んだ魔法師セスリナの姿があった。

本来騎士隊たるルーケイオンと魔法師隊たるラスケイオンは、同じ守備隊であっても、その指揮系統は独立しており、二人の間に上下関係はない。

だが、セスリナにはオールドから叱責を受けるある特別な事情が存在した。

「だって、お兄ちゃん……」

「馬鹿者！ 一度制服に袖を通したなら、そうと呼ぶなと言ったはずだ！ そもそも、格式あるマーズリー家の娘が、ちゃん付けで兄を呼ぶなどッ」

「オ、オールドお兄様！ ご、ごめんなさいい！」

「オールド『隊長』だ！」

そう、オールド・ラル・マーズリーそしてセスリナ・アル・マーズリーは、歴とした兄妹なのであった。

温厚で知られるオルドを怒らせることが出来る唯一の存在、それがセスリナである。

「見る、この空を！」

もちろんそこには、大きな虹が街を覆っている。

「うん、きれいだよ、や、きれいでございますね」

「そうではないだろう！ これは『アंक・サンプル』の幻虹、一体なぜこのようなことが起こりうる！？」

「そ、そんなこと私にもわからないよお……」

「もちろん答えを聞いているのではない。ラスケイオンの皆は原因究明のためトルテ広場に急行しており、ルーケイオンもまた総出でこれを行った者を探している。ルアン公からは急ぎの報告も求められており、今この街は大きな混乱の中にある！ それなのにお前という奴は！」

「だ、だって、私も今日初めての『お役目』だったから、昨日からずっと緊張してて」

「言い訳になるか！」

「あうう、ごめんなさいい」

頭を庇うように、小さくなるセスリナ。

もちろんオルドも妹憎しで叱りつけているわけではない。むしろ、責任ある一人前の大人になって欲しいからこそ、愛の鞭である。

だが、未曾有の事態が立て続けに発生した今日ばかりは、さすがに感情がささくれ棘の鞭となってしまうのは、許される範囲の装備変更だろう。

「全く、ルアン公にはニアヴ様がお忍びで来られていることの報告も合わせて行わなければならんというのに……待て『世界の秤』た

る濬獣^{ルーヴァ}の一人が街を訪れた日に『アーティファクト』が……こんな偶然^{ルーヴァ}は、考えられない。まさか、一連の事件は全てつながって」

思考に埋没するオルド。その隙について、セスリナがこそつと逃げ出そうとする。

「わ、私『お役目』の準備があるから、行くね、お兄ちゃん」
「待て」

ブン！

その足元に、長槍が突きつけられる。

「ひゃい！」

「話はまだ終わっていない。……その包みはなんだ？」

「えっ？ これ？ ううん、なんでもないよ？」

妹とは彼女が生まれて以来の長いつき合いである。妹は嘘をつくとき、その視線が斜め上に流れるという癖があることを彼は知っている。その癖を知らなくても、十分に不審な挙動であるが。とかく嘘の下手な妹なのだ。

「……………」

グイ。

「あつ、だめ！」

引っ張られた布が、地に落ち、その姿を見せる。

「こ、これは　！」

赤い杖身の先にこぶし大の宝玉が埋め込まれた杖、それは、

「マーズリー家家宝『スタッフ・オブ・マーズリー』！　こ、こんなものまで持ち出して……」

なわなわと震えるオルド。それほどまでに、ありえないことであった。

『アーティファクト』は、遺跡より発掘されるものばかりではない。古の王国は滅びたが、そこに暮らす全ての生命が滅びたわけではないからだ。

系譜が辿れぬほどの時間の流れがあつたとしても、その血は確実に今の時代までつながっている。

そして、血と共に残るものもまたある。

この世界で王族・貴族と呼ばれる階級の家々は、己の血の正当性の証として『アーティファクト』を秘蔵している場合が多い。

更に言えば、発掘された『アーティファクト』は、利用方法・魔法効果もわからぬまま、帝宮の宝物庫に収められることもままあるが、そんな使い方の変わらないアーティファクトに比べ、由緒ある『アーティファクト』であれば、その発動方法、魔法効果の情報も残されているため、ものの価値としては通常のアーティファクトを数倍する場合さえある。

もし、この杖の価値を知るものが、無防備無警戒のこの妹に目をつけてたとしたら

「えへへ、大丈夫だよ、途中で変な人にぶつかってこの杖を見られただけ、『アーティファクト』だってことは、気付かれなかったか

ら！」

目の前が真つ暗になるオールドであった。

「……もういい。早く持ち場へいけ……」

「いいの、や、いいのですか？」

今からセスリナが向かうのは『朱雀門』の最上階。ある意味で、他のどんな場所よりも安全だからだ。

「階下に部下を控えさせておく。役目が終わったら、必ず、か・な・ら・ずっ！ 部下の警護をうけて屋敷に戻るのだ……良いな！」
「う、うん！ わかった！」

本当であれば、今すぐ屋敷に帰したいところだが、『スタッフ・オブ・マーズリー』の持ち出しを許可したのは、マーズリー家当主たる父だろう。

ならばそれは、今日のお役目を万が一にも失敗させたくないと言う親心に相違ない。

親バカの類ではあるが、その気持ちが全く判然らない兄でもなかった。

今日セスリナが任された『お役目』はユーリカ・ソイルに暮らす全ての魔法師にとって、最大の名誉なのだから。

『朱雀門』の二塔にそれぞれ一人つつ、軍女神・熙カゲナ？ 碎によりもたらされた火災によって、街を照らすその大役。

それは、塔自体の反射光も相まって、夜の街に幻想的な炎のイリユージョンを産み出すのである。

それは日が暮れ、道を失った旅人への導きの標として。街を訪れた観光客の楽しみの一つとして。そしてまた、街に暮らすものへ安心を伝える平和の象徴として。

魔法の力を持って街を護る『ラスケイオン』に与えられた重要な、そして名誉ある任務。

それが、ユーリカ・ソイル名物 『天空のかがり火』なのだ。

オールドとしても、今日の妹の晴れ舞台を楽しみにしていたのだ。少なくとも、あの朱雀門での一騒動が、そして続けざまのアंक・サンプルス的一件事が起こるまでは。

駆けて行く妹の背を一瞬目で追った後、オールドは彼本来の役目に戻る。

事態を把握するためにはまず お忍びだと言われたニアヴ様の消息を追わなければなるまいか。

「この街で、一体何を起こっているというのだ……」

『朱雀門』 赤塔、最上階。

「お兄ちゃんも許してくれたし、私も頑張らないと！」

許してくれたというのはいささか己に都合の良い解釈かもしれない。

だが、どちらにしても、彼女には果たすべき役目があるのだ。
赤く染まった空が、徐々に暗色を帯びてくる。

『スタッフ・オブ・マーズリー』。正式な名称は『軍女神の涙杖』

軍女神・熙^{カグナ}？ 碎の燃える涙を封じ込めた杖だと伝えられる。

隣の塔では、既に先輩魔法師が美しい円形の火炎球を産み出して
いた。

『あ、ほら！ はじまりました、見てください 』

地上の『ロッシの梢亭』で、シャルが指差したものがこれだった。

セスリナも一つ深呼吸をして、杖を上空に掲げる。

大丈夫、家宝の杖が自分に力を分け与えてくれる。

同じ魔法師である父が、この杖を使ったときは、直径五メートル
はある巨大な炎の玉を産み出した。

今でもその場面は、巨大すぎる炎への恐怖と共に覚えている。

杖に向かい、信仰の祈りを捧げる。祈りは熙^{カグナ}？ 碎に届き、故を持
ってその力を貸し与える、と伝えられているからだ。

「燃ゆる熙^{カグナ}？ 碎^{こづねが}に希^{こづねが}う 我が祈りに応え その慈しみを炎に変え
るべし 』

魔法師として、そしてまた炎に由来する『スタッフ・オブ・マー

ズリー』を世に伝える血筋の末娘として、セスリナの信仰心はそこそこ強い。

そんな彼女の祈り（コマンドワード）に、戦火の女神は最大級の慈しみをもって応えた。

シャルの指差す方向。そこには『朱雀門』があつた。

その頭の先に、おそらく魔法で産み出したのであろう、火の玉が浮かんでいた。

まるで、大きな一本の蠟燭のようにみえる。

「これが、ユーリカ・ソイル名物の『天空のかがり火』ですっ！」

ああ、そう言えば街に入る前に聞いたか。なるほどな。

「魔法を使った灯台のようなものか。きれいなものだな」

「もうすぐもう一つの火も灯ると思います。そしたらもっと　ふえ！？」

シャルの言葉が中断されたのは、いきなり生じた、巨大な火の玉の眩しさによるものだろう。

塔の上に小さな太陽が生まれていた。

『黒塔』が蠟燭であれば、『赤塔』はジョイスティックだ。そしてジョイスティックは、かなり離れた場所にいる俺たちに影

を作らせるほどの強烈な火の光を放っていた。

もしあれがそのまま街に落ちてきたら、三桁単位の死傷者が出てもおかしくない、そんな危険を感じる代物だ。

だがまあ、街の名物としてやっているのであれば、管理されているものだろうし、さすがにそんなことはないか。

「確かにこれはすごい迫力だ」

「えっ、はあ。あの、こんなの私も見たことないような……」

「……はあああ？ あのような大火球、妾でも産み出すことはできませんぞ！？ ワーズワード、お主また何かしでかしおったのかや！」

一気に酔いから醒めたニアヴが、まるで見当違いなことを口走る。

「ひどい言いがかりだ。俺はあの見せ物を今初めて知ったのだぞ。なんでもかんでも俺のせいにしてもらっては困る。そういうのは難癖というのだ」

「む、うむむ、確かにそうかや……今のは妾の不明じゃ、すまぬ」
「いいってことだ」

短気な狐も、さすがに自明の理であることについて、素直に謝罪を示すだけの器量はあるようだ。

しかし、魔法のエキスパートであるニアヴを驚かせるほどの炎の魔法とは、この街にもなかなかすごい魔法使いがいるようである。その内あえる機会もあるだろうか。

兒隸靈熙熙熙熙熙兒熙罕

悲痛な響きを伴った、長く尾を引く叫び声。

遠い風にとけて、そんななにかが、聞こえた気がした。気がした
だけなので、もちろん気のせいだろう。

俺たちはその巨大な火の玉に照らされながら、またしばらくの間、
とりとめもない会話を続けることとなった。

驚きに満ちた異世界の一日が終わりを告げる。
次なる舞台には一体何が待ちかまえるのか。

そして、ワーズワードの冒険は続く。

Wandering Wonder 13 (後書き)

日が暮れたので、ここでエピソード2終わりっと。

連続UPはとりあえずここまでです。

エピソード3は、12月中には開始予定ってことで。

ゴウンゴウンゴウン……

今日も朝からいい虹だった。

朝とは言っても、まだ太陽はその顔をやっと覗かせたばかりである。

狐は、今もベットの上で丸まって眠っている。

俺はと言うと先ほどひとつ風呂あびたら、眠気が飛んでしまった。

今後の行動方針について、いくつか決定したのだが、その最優先二事項のうちのひとつが、当面の生活費の確保、つまり金策である。見たところ、この世界の通貨制度はそこそこに成熟している。であれば、金銭を得ることで今後選ぶことの出来る選択肢は増えていくだろう。

そのために、夜中に一人で色々準備したのだ。

さあ、新生『竜と水晶の店』、開店セール準備を始めよう。

石造りの商店建屋は、大まかに言って、店舗スペース・居住スペース・地下倉庫の三つの空間に別れている。そして、小さな裏庭までついた理想的な一軒家である。

裏庭は上水道の引き込み口を兼ており、店の裏筋に大通りと平行

するように引かれた石造りの用水路、小水門とも言うべき仕切り板を外すと、個別建家の庭に上水を引き込むことができるようになった。必要な分を汲み上げたら、また仕切り板を戻す。それにより、上水を水源から離れた家々にも行き渡らせることができるというわけだ。

原始的ではあるが、よく考えられた水道設計である。

まあ、ウチには必要ないんだが。

居住スペースには独立した三部屋があり、その内一つはLDKで
リビングダイニングキッチン
ある。土間とも言つ。

地下倉庫は、まあそのままだ。在庫の武器類や、ガラクタで埋められていた。

昨晚のうちに、売り物の剣やらナイフやらを全てぶち込んでおいた。それらをまた出そうと思えば腰が死ぬので、アレクが帰還するその日まで、日の目を見ることはないだろう。

今日からは別のものを売ることになる。なにせ、新生、だからな。

がらんとした店内に、新しい『商品』を並べて行く。

「うにゃあー……………」

そこでニアヴが起きてきたようだ。

「猫のような声を出すな。狐だろつ」
ルーヴァ

「……………どちらでもないわ。妾は濬獣じゃぞ」

そういえばいまいち適当な置換訳が見つからなかったので発音そのままのルーヴァで聞き流しているが、どういう意味なのだろうか。寝ているうちに着崩れたのであろう布服がだらり垂れ、胸元を大きく開口させている。

「帯はちゃんと締めなさい」

寝惚け眼をかいぐりかいぐりしている狐の化生の、ほどけた帯を締め直してやる。

「くあああ……人の街で眠ったのも久しぶりじゃ。おはよう、ワーズワード」

「ああ、おはよう」

「で、早速またなにかしておるようじゃが、それはなんじゃ？」

「これか。この店で売ろうと思ってる新しい『商品』だな」

「お主、小僧の店を勝手に……まあいいわ。それで、ん……それは、ビン、かや？」

俺が店内に並べているのは、その通り、透明なガラス瓶だった。おそらくは、薬品を封入する小瓶だったのだろう。空ではあったが、コルク栓つきで20セットほどあったので、中を洗浄し、布の切れ端を敷けば完成である。

「売れそうなものか、あとでシャルに意見を聞くつもりだったんだが、お前の意見も聞いておくか。需要はあると思うのだがな」

「これに需要がのう。確かに妾では、商品の善し悪しは答えられぬであろうが、見るだけはみせてもらおうかや」

その目はすでに、こんなものが売れるのかという疑念に満ちている。だが、これはまだ外枠だけなので、評価を下すのはもう少し待って頂きたい。

単純に窓がないという理由により、店舗スペースは薄暗い。だが、それが都合良い場合もある。

「さて、売り物というのはこれだ」

俺はカウンターに置いていた木箱の中から、それを一つ取り出す。

「ガラス玉、かや？」

「これを、この中に入れてだな」

入れただけでは、何も変わらない。

ポフと軽い音を立てて、敷布の上に、ガラス玉が乗っただけだ。

「でフタを閉める、と」

キラキラキラ……

キュポつと蓋と閉めたことがスイッチとなり、瓶の中のガラス玉から黄金の炎が吹き上げ、まばゆい光を放ち始めた。

薄暗い店内が、一気に色づく。

「……はああ！？？」

ニアヴが目を丸くして、驚きを露わにする。

「昨日実験した【フォックスファイア／狐火】の別バージョンだ。フタの開閉をスイッチにして、魔法効果が発動するように設計した【狐火】の特性の一つ『対象物以外を燃焼させない』ところに着目し、熱を発せず、その光源効果のみを発生させる照明器具だ。【フォックスライト／狐光灯】の名称で売り出そうと思っている」

夜間照明はそれほど発達していないようなので、手軽に扱える照

明器具は、需要があるのではないだろうか。

「……はああああ！??」

「そしてもう一つがこれだ」

とはいえ、それに需要がなくて全く売れないとなると行き詰まってしまうので、初めから二つの商品を準備して、売れた方を量産する方針である。

用意するものは、革製の水筒とガラス玉である。

「昨日『アーティファクト』の中には『酒の溢れる壺』というものがあると言っていただろう？　なので、それを真似て作ってみた。『ウォーターフォウル・ボトル／降鵜水筒』、効果はまあ、そのままだ」

革袋の口を弛めれば、コポコポと革袋の奥から水が湧き出してくる。口を閉じれば湧出効果も停止する。残った水を排出すれば、ペシャンコの革袋だけになるので、持ち運びにも便利である。

これを作ったがゆえに、ウチに上水は必要なくなったというわけだ。そもそも、上水とはいえ所詮は生水である。日本育ちの俺が、こんな異世界の生水を飲んだりすれば、一発で腹を下すことは想像に難くない。日本人は繊細なのだ。そこでピコンと来たのが魔法的に生み出された純水の存在である。

「元々は別の理由で作ったものだが、冒険者という職業が存在するのなら、売り物としての需要もあるのではないかと思ってな」

【ウォーターフォウル・レイン／降鵜雨】の魔法は【狐火】ほど融通が利かず、この『水筒（革袋）内できゅっくりと微量の水を産み

出す』制御には、かなり手こずったのだから、一つぐらいいは売れてくれないと、俺の苦勞が無駄になってしまう。

「はあああああああああ！??」

「正式に商品化するなら、ガラス玉が水と一緒に流れ出てこないよう一工夫が必要だろうが、今はまず日銭が欲しい。多少の品質の悪さは、値段に反映させれば良いだろう」

以上二点の商品を持って、『竜と水晶の店』は魔法道具店に生まれ変わり、新装開店とする予定だ。

「どうだ、売れると思うか？」

「……あ、あ、あ、」

「ん？」

「阿呆か———！」

なんだ、朝っぱらから失礼な。

「『アーティファクト』、それも『マジック・アーティファクト』は、そもそも個人所有すら難しい至宝なのじゃ！それを店先に並べて売れるか、じゃと!？」

「レアリティについては昨日聞いた。だが同時に、量産できることも検証できたのだ。そもそもこれらは、お前の言う『アーティファクト』とはまた別物だと考えている。故に『マジックアイテム』だ。値段の問題なのであれば、そこまで高値を付けるつもりはないが」「ちがうわっ、そんな商売ありえんじやろつと、言っておるのじゃ

「！」

「……売れないのか？」

「う、う……」

プルプルと震えながら、キツと顔を上げるニアヴ。

「売れるわ、阿呆——！ なんなら、妾も欲しいくらいじゃあああ！」

なんで、涙目になってるんだこの狐は。

否定なのか肯定なのかもわからない。やはりあとでシャルに聞いてみよう。

「欲しいなら、ほら」

ガラス玉の入った小瓶を、その手に握らせる。

一瞬あつけにとられたニアヴだが、次の瞬間にはパアアアという効果音つきの喜びを発散させ、その目に星を輝かせる。

「良いのかやつ」

「当たり前だ」

もともと、ニアヴに魔法を見せてもらっていないければ、生まれていない商品である。

ガラス玉のある限り量産できるものなので、一つや二つは安いものだ。

「おおっ……これは面白いのじゃー！」

パカパカとフタを開け閉めして、喜ぶニアヴ。

【狐火】なら自分で出せるだろうに、なにがそんなに面白いのだろうか。

まあ、カラスにも光り物を集める習性があるしな……

アंक・サンプルスの件もそうだが、いわゆる『アーティファクト』、魔法効果の付与されたアイテムというものは、ニアヴの『面白いものが好き』趣向の中でもかなり上位に位置するようだ。

「さて、それでは開店前にまずは食事だな。用意しておくから、お前は先に風呂に入ってこい」

「ん、水浴びができるのかや」

「ああ、俺も入りたかったからな。タルが余っていたので、裏庭の軒下に設置しておいた。下水口の関係で場所は変えられないが、カーテンをつけておいたので、問題ないだろう」

「わかったのじゃ」

テクテクと歩いて行くニアヴを見送り、残りの商品を手早く店内に並べて行く。

準備した【狐光灯】の個数は20。先ほどニアヴに渡した1個を引いて19。あとは展示用に2個は非売品とするとして、売れる数は17か。

【降鵜水筒】は、さらに数が少なく3個だけだ。基本的に店の在庫品やら、その辺に転がっていたものを再利用しているだけなので、今日ちゃんと数が売れれば、次回は素材調達から始めなくてはいけない。

「なんじゃこれはー！ー！！」

とそこで、そろそろ聞き慣れた叫び声が出た。
いちいち騒がしいヤツだ。

ダンツと床石を踏み鳴らし、ニアヴが飛び込んでくる。

「ワーズワード！」

「ッ！……今度はなんだ」

「ゆ、ゆ、」

「ゆ？」

「湯が張つてあるではないかッ！？」

「風呂だからな」

「湯浴みなぞ、人族でも権力あるものしか準備できぬものじやろうが！」

「とは言つてもな。さつき見せただろ。これを」

「【降鵜水筒】……といったかや」

「タルで同じことをやれば【ウォーターフォウル・バレル／降鵜樽】になる。そして、その中にもう一つのガラス玉を沈める。名前はそうだな……【フォックス・ヒートコア／狐熱核】とでもしておこうか。【狐光灯】が炎の『光源効果』の魔法特性を付与したものであるならば、その逆もまた然り。炎の『熱源効果』のみを付与することもできるのは当然だ」

「なん……じゃと……」

「またもや絶句するニアヴ。それは未だ魔法付与をありえないものと捉える固定観念から抜け出せていないからだろ。」

「合わせれば、【ホット・ウォーターフォウル・バレル／沸鵜樽】

……言いにくいな、つまり風呂の完成だ」

基本的に、火と水というだけでも、いくらでも使い道があるのだ。利用するシーンさえ浮かべば、それに合わせて魔法効果を付与してやるだけである。必要に応じてその発展形を考えるのは当然のことだ。

ちなみに【沸鵜樽】は底に簀の子を敷いたゴエモンバス・スタイルである。適当に作ったので、湯は湧き続け、タルからこぼれ続けている。

「もうわけがわからぬわ！ お主はどれだけ妾を驚かせれば気が済むのじゃ！」

「そんなつもりはないのだがな……それより」

「なんじゃ！」

「……そろそろ風呂に戻ったらどうだ」

いくら半分獣だと言っても、もう半分は女性の身体特徴を備えているのだ。

すっぱで仁王立ちなどと、異性の前ですることではなからう。

「……………ひゃう」

やっと自分の状況に気付いた狐が、バツと壁の裏に身を隠し、顔だけを覗かせる。

「うっう、み、見たなあ」

「見せた、の間違いだろう」

「わ、妾が気付くまで、ずっと、い、いやらしい目で見ておったのであるっ」

なんでちょっと誇らしげなんだ、この狐は。

「そう言われてもな……ああ、思ったより身体つきは人間寄りなんだな。もっと毛だらけなのを想像していたのだが」

「な、ななななな……！」

羞恥と怒りが狐の頬を真っ赤に染め上げる。

「絶対に許さぬのじゃああああ!!!!」

絶対宣言を行って、狐が逃げて行く。

まあ風邪を引くまえに、とつと風呂に戻るのは正解だ。

通りにできれば、もぎたての果実や鮮魚を売る露店がすでに客を集めている。

欲を言えば塩や醤油が欲しい所だが、食材が新鮮であればそれでよい。

天気は快晴。そうだ、椅子と机を外に出そう。
やはり食事は、明るい場所で取るのがよい。

Wayfarer's Witchcraft-shop 01 (後書き)

エピソード開始。

ワーズワードさんの辞書に自重という文字はありません。

『竜と水晶の店』 その朽ちた看板を、地面に降ろす。

新生『竜と水晶の店』開店と言ったが、あれは嘘だ。

「お主……店の商品だけでなく看板まで変えてしまうとは……」
「商品が変わるのだから、当然店名も変えなければならない。当然のことだ」

俺が腕を振るった朝食と『なんでも一つマジックアイテム作る券』で機嫌を直したニアヴのツッコミに冷静に答える。絶対宣言とはなんだったのか。

「新しい店の名は『ワースワード魔法道具店』だ」

「魔法道具店などと、他にはありようはずもない店じゃな」

それはいいとしてじゃ、と苦虫を噛みつぶし飲み込んだような顔で、ニアヴが看板を指差す。

「気になっておったのじゃが、看板にあるあの絵はなんじゃ？」

看板には、ウィンクをして目から星を飛ばすかわいらしい狐娘の姿が描かれている。

「お前の絵だが？」

「まてえええい！」

「ツッコミが早いな」

「当たり前じゃ！ なぜ妾の絵が描かれておる！」

「説明しよう。『ニアヴ』の名にはそれなりの重みがあることが確

認されている。魔法道具と銘打つ以上、その商品には信頼性がなければいけない。そこでお前の絵をつけておけば、十分にハクがつくと判断した」

「そのような理由で妾の姿を商売に利用するでないッ！　^{ルーヴァ}濬獣は人の地に干渉せぬ、いや、してはならぬのじゃ」

「だめなのか」

「ダメじゃ！」

むう、今までにない強固な否定だ。

ニアヴにとって、人の地に干渉してはならないという定めはかなりの重みを持っているということか。

「では、ただの狐耳の娘ということだ」

「どうしてもそのままいく気かや！？」

「別人である旨の注意文言も載せておく。それでもまだ勘違いする者がいれば、それはそいつの問題だ。それならいいだろう」

でもって、文字は限りなく小さく書く。勘違い推奨だ。

「ぐぬ……はあ、もうそれでいいわ。しかしまあ、お主は芸術の才まで持っておるのじゃな……とはいえ、アレが妾^{わらわ}じゃと言われても、妾が童であつた時分の姿にしか見えぬがのう」

「説明しよう。あれは『デフォルメ』と言う技法で描かれている。

目、耳、尻尾といった身体特徴をより誇張して描いたものだ。子供のようにみえるのは、等身を縮めているからであり、二頭身まで縮める場合は『スーパーデフォルメ』とも呼ぶ」

「何を言っておるのか、全くわからぬわ！」

「結論すると、店のマスコットになるのだから、ちびキャラの方がかわいいだろうということだ」

「ちび……？　またわからぬことを」

わざと理解出来ないように話しているのだから当然だな。肖像権うんぬんの話題をけむにまくことだけが目的の説明だ。

そんな俺の思惑を露とも知らぬまま、むくくとニアヴが看板の狐娘を見つめる。そして、ふいににやけた表情を見せる。

「妾が『かわいい』のう……くふふつ、悪い気はせぬのじゃ。じゃが、お主のイメージには全くあわぬ！」

悪かったな。

確かに成人男性が、狐のちびキャラを描く姿は、一般的なイメージには合わないものだろう。

だが、この程度の萌え絵ならばネットを趣味に持つ日本人男性であれば誰でも描けるものだ（断言）

マスコットキャラで客を引くのは、サービスビジネスのオールドトリックつまり、常套手段である以上、

「俺にどんなイメージを持っているのかしらんが、俺は自分の出来ることを自重しない」

「ブレぬ奴じゃのう……また一つお主のことがわかったわ。全く面白い男じゃ」

「褒め言葉として受け取っておこつ。それはそうと、お前にも客引きの手伝いをしてもらうぞ？」

「な、何をさせる気じゃ!？」

……そんなに警戒しなくてもよいだろうに。

「難しいことをさせる気はない。その大通りで金を持ってそんな奴が通りかかったら、【フォックスライト／狐光灯】を見せびらか

してくれればいい。その中に興味を持つ者がいればこの店を教えるだけの簡単なお仕事だ」

「なんじゃ、それくらいなら良かるう。では行ってくるのじゃ」

「ああ、頼んだぞ」

歩き出したニアヴがふと足を止め、振り返る。

「しかしお主、妾が濫獣であることを本当に気にせぬのじゃな」

「気にした方がよかったか？」

「いや。くふふっ、なんでもないのじゃ！」

何を言おうとしたものの、にこりと一つ微笑んだ後、ニアヴがひら、と飛び出して行く。

「お主ら、足を止めて、これをみるのじゃ！」

間髪おかず、ニアヴのよく通る声が響いてきた。

………なんという躊躇のなさ。人の注目を集めることをなんら気にしない性格というのは、こういうときに強いな。

さて、こちらにも負けてられない。

『ワーズワード魔法道具店』を始めよう。

ユーリカ・ソイル『北・右鍵地区』ルーケイオン本部。

ルーケイオン本部には、昨日のアंक・サンプルスの異変に加え、

セスリナの起こした『天空のかがり火』事件を調査する合同対策本部が立てられていた。

そして、全ての対応を一手に引き受けた群兜^{マータ}オールドは、疲労困憊の極みにあった。

そこに、一人の老人が訪れる。

「お疲れのようすな、オールド様」

「おお、これはミゴット様。お忙しいところ、ありがとうございます」

「この老いばれがあと50若ければ、此度の騒動、オールド様に全てを押しつけるようなことはありませんだ、申し訳ございません」
「どうかお顔を上げください。街の治安維持は、我らルーケイオンの役目。そのようなお心遣いは無用に願います」

群兜としての儀礼に則り、またそれ以上の目の前にいる老人に対する敬意を持って、オールドはミゴットを迎えた。

ラスケイオン群兜にして、『ユーリカ・ソイル』最強の魔法使い。

ミゴット・ワナン・バルハス。

白鬚白髪。その上に、柔和な表情が乗っている。背は曲がっておらず、長身偉躯のオールドと並んでも決して見劣りするものではない。そして、ラスケイオンの制服は、そのマントの長さにより、地位を見分けることができる。

例えば新人のセスリナはミニマントであり、ミゴットは床に引きずるほどの長マントだ。

地位としては同格のオールドとミゴットであるが、その実務経験には天地ほどの差がある。

だが、ミゴットは年齢のこともあり半引退状態のため、今回の騎

士隊と魔法師隊合同捜査の現場指揮においてはオルドが陣頭に立ち、ミゴットが相談役という立場になっていた。

「早速でございますが、『アंक・サンプルス』についての調査結果をお伝え致しますよう」

「はっ、お願い致します」

『アंक・サンプルス』に関しては、ラスケイオンが調査を行っている。その情報を聞くために、朝の一番からミゴットに出向いてもらったのである。

「まずは、この『ユーリカ・ソイル』は、古き王国時代に『アंक・サンプルス』を中心に置いて設計された街であることは、改めてご説明するまでもありません」

「はい」

ミゴットの緩やかな語り口調は、どこまでも丁寧だ。

「そして現在の、幻虹が街の全てを包んでおります状態……これは『アंक・サンプルス』があるべき姿を取り戻したということだと思われめますな。報告では、何者かが衆人環視のもと、それを行ったということでございますが」

「そこです。それが何者であれ、そのようなことが、可能なのでしょうか？」

「わかりませぬ」

「は……？」

「ですから、わかりませぬ。少なくとも私にはできません」
「……………」

あくまで穏和に、語調を崩さずミゴットが答える。

ミゴットがそう言うのであれば、オールドはそこに挟める口を持っている。

「もちろん、調査は継続させております。結果、街を覆うほどに広がった幻虹ですが、これに触れても、やはりこれまで通り、人体への異常はありませんだ、つまり」

「……悪さをするものではない、と？」

「左様。むしろ古き文献に頼ればアंक・サンプルスは街を護るものである、との記述さえみえますな。ひとまずの危険はないものと判断されますので、街のものにはアंक・サンプルスに近づくことを禁じ、その間に異変を起こした何者かの搜索を優先するのがよろしいかと」

ラスケイオン隊長のミゴットがアंक・サンプルスの状態に危機感を持っていないのであれば、オールドとしてもひとまず安堵してよいと判断する。

彼が安全宣言を出せば、みなのも揺も収まることは間違いない。

「ご報告ありがとうございます。……付け加えてご報告させて頂きます。私の方で、その、異変を引き起こした方について、心当たりがあります」

「お聞きいたしましょう」

「……実は昨日から、この街にニアヴ治林の濫獣ニアヴ様が滞在されているのです。そして、その当日のこの騒ぎ、無関係ではないと私は考えています。今その滞在先を探させておりますので、報告が入り次第、お話を伺おうと考えております」

「ニアヴ様、ですと？ その話、詳しくお聞きかせ願いますよ
う」

「ど、どうなされました、ミゴット様」

ニアヴの名にミゴットが激しく反応する。ズイと額をつきあわせんばかりに、詰め寄ってくるミゴットの迫力はオルドをしてこれまで見たことのないものだ。

瀟獣訪問は、まだ伝えていない一件だが、それほどまでに大事なことだったのか。

だが、そこでミゴットがすぐさま身を引く。熱はすつと消え、後にはいつもどおりの柔和なミゴットの姿。

「失礼いたしました」

「い、いえ……」

先ほどの迫力が、まるで白昼夢であつたかのような、違和感だけが残る。わけのわからぬまま、流れてきた冷や汗をそつと拭うとオルド。

そして、知る限りの情報をミゴットに共有する。

瀟獣。

獣人という種であれば、世界の各地で部族集落を作り、人間世界にも多く進出している。オルドの部下にも猫族、犬族出身の若者がいるわけだが、瀟獣は彼らとはまた少し違う存在だ。

この『北の聖国』^{ラ・ウルターヴ}には、3つの瀟獣自治区　ニアヴ治林、カナバル治峰、アラナクア治崖　がある。

瀟獣は独自かつ強大な魔法力を持ち、人がその治地へ立ち入ることとは則ち、死を意味するという。

例えばアラナクア治崖の瀟獣は、残忍な性格であり、その谷に入つて生きて出た者はいないと聞かし、カナバル治峰も似たようなものだ。

他方で、濬獣にも個性というものがあるらしく、このユーリカ・ソイルに境を接するニアヴ治林の濬獣は、人と友好的な性格である。ありがたいことに治林を抜ける山越えの街道まで整備されており、そこでは、人と濬獣との間で大きなめ事が起きたという話は寡聞にして聞かない。

その姿も度々目撃されており、人なつっこい狐族の女性の姿だと聞いたことがあるからこそ、オルドも昨日、一目でその狐族の女性が濬獣ニアヴであると、信じたのだ。

濬獣自治区は人がこの地に国を興す以前から存在するものであり、オルドから見れば濬獣の存在は、この国の皇帝と対等であるとも言える。

故に、その濬獣がこの街を訪れたことは大きな驚きであり、懸念であつた。

ニアヴ治林こそが例外であり、通常人と濬獣とは互い不可侵、一切関わらないこそ、今の安定があると言えるからだ。

そのニアヴが、人間の従者を連れて、この街を訪れた。それは一体どのような意味を持つのか？

従者については、足帳にワーズワードとシャル・ロー・フェル二の名が記載されている。

男の方は、その立ち居振る舞いから濬獣の従者というには少し違和感があつたが、従者でないと考える違和感の方が大きいため、無難な想像の方を優先する。

少女の方はというと商売目的だと記載されているが、これが真実のものなのか、濬獣の訪問目的を隠す偽装の意図をもつものなのか判断できない。

だが、どちらにしても濫獣の行動原理は、未だ謎の部分が多く、今回の訪問も決して無視できるものではない。

「ニアヴ様が人を従えて？ そのようなことが」

オルドに問いかけるといってもない、思考が漏れだしているような呟き。

「どうなさいました、ミゴット様。やはり、なにか問題が」

「ああいえ……申し訳ございません。私はニアヴ様のことをよく知っております。故にニアヴ様自身が人を従者に、という話が気にかかりましてな」

「そうなのですか」

「はい。そちらの件は置きましても、此度の件、確かに全く無関係であるとは考えにくいですな」

「やはりそう思われますか」

己の考えに確信を得るオルド。

「となれば、『天空のかがり火』の件も、同様にニアヴ様が関係しているのでしょうか？」

「う……いえ、お恥ずかしながら、そちらは別件でして」

「ほう」

思わずうめき声すら漏れてしまう。そちらは愚妹が原因であり、昨日はあれからずっと錯乱状態であったため、詳しい話はまだ聞けていないが、ニアヴ様との接触がなかったということだけは確認できているため、別の問題として対応していく必要がある。

かつ、できれば内々に解決したい問題でもある。ことはマーズリ―家の所有するマジック・アーティファクトに起因するのだ。その

存在、あるいは杖の持つ魔法の力を表に晒すことは、できれば避けたいというのがオルドの考えだった。

その点、ミゴットは信用できる人物であるが、さてどこまでの情報を開示してよいものか、守備隊長としての責任とマーズリー家の嫡男としての責任、オルドの思考は二つの立場の間で揺れ動くのであった。

そこに、一人の衛士が走り込んでくる。

「オルド様、搜索中の名を見つけました！」

「！ わかった、すぐに私も向かう。 すみませんが、ミゴット様、その話はまた後ほど」

「お待ちください。ニアヴ様が関係しているというのであれば、この古いぼれもご同行いたしましょう」

それは願ってもないことである。濫獣そして、アーティファクトという魔法に関わる問題は、オルドだけでは対処しきれない可能性がある。

ユーリカ・ソイルを守護する青と赤の二つの影が、行動を開始した。

ユーリカ・ソイル『北・左鍵地区』マーズリー伯爵邸。

ユーリカ・ソイルの街は古に完成された都市設計の元、わかりやすい区分けがされている。

まず街を南北に二分する『リンクス川』だが、二分と言ってもその面積的には南が1/3、北が2/3になるバランスの位置を流れている。

川の北側にある『トルテ広場』が、同心円状に広がるユーリカ・ソイルの街の中央に位置することからもそれはわかるだろう。

そして、トルテ広場に鎮座する『アंक・サンプルス』。この潜^{アイ}ディファクト密鍵より左を『左鍵地区』といい、貴族や豪商の屋敷が並ぶ、高級宅地地区になっている。同じく右は『右鍵地区』といい、こちらはルーケイオン本部などがある行政地区である。

トルテ広場の北には、神官たちの行き交う四大神それぞれ神殿があり、これまた他の地区は別世界の様相を呈する。更にその先には過去王宮として使われていたのであろう広大な敷地をもつ宮殿があるが、これは帝都に住まうラ・ウルターヴ皇帝の離宮扱いとなっているので、式典以外には使われない建物だ。

それ以外は全て『南・商業地区』に集中しており、商店・露店・酒場・居住区・貧民窟・倉庫街など、人口の約8割は川南の狭い地域で生活している。

それはさておき、マーズリー伯爵邸である。

天蓋つきの巨大ベット。ガラス窓を通して差し込む朝日の明るさで、セスリナは一睡も出来なかった夜がやっと明けたことを知った。

「あさ……かあ」

目を閉じれば浮かんでくるのは、世界を焼き尽くすかの如く巨大な炎塊。

それは自分の制御下にあり、指向性を与えてやれば、目下の全てを炎の海に変えることができるであろう圧倒的な破壊の力だ。

だが、そこにセスリナが感じたのは、恐怖だけだった。

魔法使いとしての『素質』は、マーズリー家歴代最高だと言われたセスリナだが、魔法使いの『資質』については、大きな欠落があった。

大きな力を操る者が持たねばならない　覚悟、それが欠けている。

故にセスリナの操る魔法は、型にはまった量産品にすぎない。

いかに素晴らしい器であっても、本人にそれを扱うだけの『度量』が備わっていないければ、満たされぬ杯である。

ラスケイオンに入隊してから、それは変わらず……初的重要任務も、あの大失敗である。

大火球をどうすることもできないまま、恐慌状態に陥ったセスリナ。

誰も近づけぬ状態で、オルドの呼びかけにも答えられず、それは彼女の緊張の糸が切れて気を失うまでの間、塔の上に在り続けた。

屋敷に護送されたあとも、ともに話ができる状態ではなかったため、オルドは妹への事情聴取を諦めて本部へと戻り、部屋に戻されたセスリナもまた、結局眠れぬ夜を過ごしたのであった。

もっとも、例の大火球による被害は出ていないため、現場のセスリナを知らぬ者たちからは、あの新人は、実はものすごい実力を持っているのだと、逆に評価されてしまったりもしている現状である。

オルドとしても、立场上家宝『スタッフ・オブ・マーズリー』の関与については説明はできなかったのだ、妹の件は自分が責任を持つとの一言で、現場を収めるしかなかったのだ。

ベットを抜け出し、窓を押し開ける。

朝日の白い光が一枚の薄布になり、昨夜の恐怖の記憶にふわりと重ねられる。

これが明日、明後日と繰り返され やがて薄布は幾層にも重ねられ この恐怖の記憶も白い過去の思い出に変えてくれるのかなと、セスリナは常にないセンチメンタルな感傷を抱いた。

……でも、それは今すぐじゃないんだよね。

朝日が、新しい一日の始まりが、セスリナに小さなエネルギーを与える。

ペチン、と自分に活を入れる。

「ううん、私もラスケイオンに入ったんだから、こんなことじゃダメだよ。お兄ちゃんにも心配かけちゃったし」

とは言っても、自分でもなぜあんな大火球を産み出すことが出来たのか、いまでも判然らないのだ。

自分の魔力だけでは絶対に無理だし、また自分の知る限り『スタッフ・オブ・マーズリー』の力でもあれほどの炎を産み出すことはできない……と思う。

「そつえば」

そこで、ふと、思い出すものがあつた。
昨日、街でぶつかった失礼な男の人。

『杖を調律させてもらっただけだ。なに、悪くはなっていないだろう』

『はい？ ……意味が判然らないんですけど』

その時は何を言っているのかと呆れたわけだが、今思えばあの人は、杖を色々と見回していたではないか。

『スタッフ・オブ・マーズリー』はアーティファクトである。それに対して、何かをしたなんて考えにくいが、でもあのときになにかがあつたのは間違いない……と思う。

あの人を見つければ、きっと何かがわかる。
確か名前は

「ワークシートさん……だっけ」

惜しい。ワーズワードである。

大人になって、ちゃんと働くようになるまで、帝学と領地の屋敷以外、それほど外の街に出たことのない自分である。この広いユーリカ・ソイルでたった一人の人間を見つけることができるのだろうか？

絶望的な気持ちにもなるが、これは自分のためだけでなく、お父さんお兄ちゃん（マーズリー家、と言いたいらしい）、そして街を守るラスケイオンの一員として、行すべき任務だと思った。

「がんばる……っ！」

このまま家にいても、きつとお兄ちゃんに怒られるだけだと思うし！

精神的に大人になりきれていないセスリナだが、その頑張る気持ちには嘘ではなかった。

ドアを開け放ち、浴場に向かい歩きながら、身につけていた寝着と下着を脱ぎ散らかして行く。

子供の頃から直らないセスリナの癖だ。

「お嬢様、はしたのうございます!」

「大丈夫だよ、家の中なんだから」

部屋の前に控えていたセスリナつきのメイドが、浅い眠りから醒めると同時に、自分の主人を追って、その一枚一枚を拾い集めていく姿もまた屋敷では見慣れた光景であった。

「絶対に見つけなきゃ! ううんっと……昨日会った場所にまだ居るかなあ?」

限りなくゼロに近い可能性に起点にして、セスリナもまた行動を開始するのであった。

Wayfarer's Witchcraft-shop 02 (後書き)

新キャラがじじいとか誰得。

「俺だ！俺に売ってくれ！」

「ワイの方が先や！金ならいくらでも出すさかい！」

「おお、なんと美しい輝きだ……こんな炎見たことがない」

「いや、それよりも素晴らしいのは夜の明かりとして実に実用的だということだろう。夜間に明かりを灯す貴族はいるが、これがあれば、誰もが明るい夜を過ごせるようになるのだぞ」

「確かにそうだが、俺にはこの水の無くならない水筒の方が便利だと思うがなあ。冒険者にとっては、全ての財産と引き換えにしても売ってもらいたいものだ」

「ばかな！それこそが無駄な利用法の極地だ！この水筒一つで、どれだけの村が助かると思う！？まさに神の奇跡だとかいえん！」

「これほどの数のアーティファクト、どここの遺跡で発見したでしょうかあ？」

「アーティファクトじゃなく、マジックアイテムだって話だけど……ハテ、それって、なにが違うんだ？」

「知らないわよ。でもニアヴ様の絵が看板に描いてあるってことは、ここの品々は濬獣様ゆかりの品々ではないのかしら？それなら、冒険者が見つけてくるアーティファクトなどより、よっぽど価値があるのではなくて？」

「違いあるまいが、そんなものを店で売り出すとは、濬獣様に一体何があつたというのだ？」

「いいい、濬獣様がボクなんかに声を掛けてくれるなんて。ああ、ニアヴたん、かーいーなあ……あの看板の方を売ってほしいなあ」

「そんなことはどうでもいい！はやく、はやく、俺にそれを売ってくれ！」

「おい、押すな！今はまだ、商品説明だと店主が言っていただろ

う！」

日本時間で言えば、そろそろ11時か。

それは、オープンセールの大盛況、で済ませられるレベルの人ばかりではなかった。

結論を先にすれば、店先の大通りで【フォックスライト／狐光灯】を喧伝するニアヴの集客効果はすさまじかったという一言に尽きる。

ふむ、売れるか売れないかなどと、全くの杞憂だったな。

初めは何の店かと冷やかすつもりで見に来た客が、その驚きを他の客に伝染させ、商売の臭いを嗅ぎつけた商人が集まり始めた所から、『ワーズワード魔法道具店』の店先は既に収拾のつかない混乱と怒号のるつぼと化しはじめていた。

今しきりに、金に糸目をつけないから、全ての商品を買ってくれと騒ぎ立てているのは、おそらく貴族相手の商売をしている、大店の商人だろう。

店内に並ぶマジックアイテムを、ここで支払う以上の値段で貴族に売りつけることができるかと即座に判断したのだ。

いわゆるテンバイヤーというやつだな。だが、転売はあらゆる商売の基本でもある。

この短時間で、街の声を拾い自ら足を運んでくる情報収集力と行動力、また即座に商品価値を計る商売勘、大声でもって我を通そうとする押しの強さ、どれをとっても一流だ。

まさしく、俺が求めていた理想の客である。

俺も自らの作ったマジックアイテムの全てを安くばらまくことは考えていない。

高く売れるならそれに越したことはないからな。

今日用意した20ほどの商品は宣伝材料として適当にさばくが、それ以降は特定の商人を選定し、その商人を通して、販売を行う。そうして効率よく金を持つ貴族から利益を得るビジネスモデルを考えている。

重要なのは、商人や貴族とのパイプ　つまり人脈作りだ。

俺の作るマジックアイテムに価値を見いだすということは、つまり俺に価値を見いだすということ。

人脈の形成は、この世界における俺自身の土台作りであると共に、影響力増大戦略の第一歩となる。

人が己の人生の中でやりたいことをやっていくためには、数えるのも面倒になるほどの障害が発生し、それらを自らの力で解決していくことで、人は成長する。

だがそれは、すでに成長済みである俺のすべきことではない。俺から見れば、数ある障害、例えばそれが100あるのなら、その内99は金と権力のどちらかがあれば解決できてしまうものだ。故に、もっとも効率よくその二点を入手することが、俺の行動指針になる。

商品販売は金策の基^{もと}であり、商人や貴族との人脈は権力作りの基である。

そのために急ぎすぎるくらいに急いで準備した『ワースワード魔法道具店』だ。

アレク青年から預かったこの店は、いずれ国中にその名のところかせることになる。

とどろく名前が少し変わってしまうが、なに、そこは誤差の範囲というものだろう。

店では、午前中を魔法道具の説明と展示観覧のみとし、その後抽選での販売を行うと説明していた。

同時並行に、集まった客の中から今後の商売相手候補を選定する作業を行っている。

俺の琴線に触れたのは、3人と言う所か。彼らには後ほどアプローチをかけることにしよう。

ライトアップされた店内に殺到する人垣を押しつけて、さすがに疲労を見せるニアヴが戻ってくる。

「ご苦労。もう人集めはいいぞ」

「うむ。ワーズワードよ、なにやらものすごい人数が集まっておるようじゃが、大丈夫なのかや？」

「問題ない、上出来だ。今日はなんでも好きなものを食べさせてやれそうだ」

「この状況でよくそんな余裕があるものじゃな……妾の言ったとおりであろう。魔法道具を販売しようとする店など他にないのじゃ。これだけの人が集まるのも当然であろう」

「全くだな。俺にしてみれば売れるとわかればもう怖いものはない。こういった新しい商売は始めたもの勝ちだからな。俺の国には『先んずれば人を制す』という言葉もある」

「聞いたことのない言じゃが、なるほど理があるの。それより少し疲れたのじゃ、しばし休ませてもらうぞ」

「わかった。……そういえば、シャルが朝には来るといつていたのだが、外で見かけなかったか？」

「いや、見てはおらぬ。その内くるであろ」

さして気にもしていない様子で、ニアヴが手をひらひら振りながら、奥に消えて行く。

長い時間を生きているらしいニアヴの時間の概念は、イタリア人並なのかもな。

スローライフで羨ましい限りだ。

それはそれとして、あの素直な性格のシャルが約束を破るというのは考えにくい。何かあったのだろうか？

とそこに、

「道をあける！」「邪魔だ、どけ！」

「なんだ？」「ひっ」「うわっ」

金属音と悲鳴と伴って、人垣が左右に割れ始めた。

そこには、長槍をもって、集まった客を威圧する青甲冑の一団が姿があった。

先頭に、昨日会話を交わした、ルーケイオン隊長のオールド。そして、耳をしておしおにさせたシャルの姿があった。

さらにもう一人、赤いローブを纏った老人は初めて見る人物。源素光量はおおよそ3、800ミリカンデラ、なかなかのものである。

「『ワーズワード魔法道具店』、ですか。興味深いですな」

「うむむ、まさか宿をとらずに、このような店を……盲点でした」
「わ、ワーズワードさん……あのっ、そのっ」

なるほど。状況は理解した。

昨日の一件の重要参考人として、俺たちが搜索対象になるであろうことは、予測できていた。

だが、同時にニアヴの名が重しとなる以上、無理な強制逮捕はないとも予測していた。

どこかで接触を図ってくるにしても、それは穏便なものになるだろう、と。

その捜査網に一人宿を取っていたシャルがかかり、ここまで案内させられたのだろう。

ひどく怯えた様子だが、おそらくは単純に公権力に対して免疫がないだけなんだろうな。

あの赤ローブは確か、ラスケイオンの制服だったか。ならば、もう一人の老人。おそらくは、

「ようこそ。オールド隊長。それにあなたはラスケイオンの隊長殿かな？」

「貴殿がワーズワード殿であられるな。さよう、お初にお目にかか
る、ミゴット・ワナン・バルハスと申す。昨日の一件につきまして、
少々話をお聞きかせ頂きたく……ニアヴ様へのお目通りを願えます
かな」

その柔和な表情を崩さず、老人が人当たりの良い口調で答える。
そこに俺が感じたのは、小さな『偽』の臭いである。99%の人間は
気づけないであろう、かすかな臭い。

世界の敵たるこの身ゆえに、現実世界において、ありとあらゆる
リスクマネジメントを行ってきた俺の直感が、こいつは警戒すべき

対象だとアラートを鳴らした。

子曰く『吾、十有五にして学に志し、三十にして立ち、四十にして惑わず、五十にして天命を知る』。いくら総体の文明レベルが低いとはいえ、経年経験を重ねた相手は甘く見るべきではない。

こちらの情報は事前に確認済みのようなので、話が早くて助かるが、逆にこちらには相手の情報が全くない。となれば、なんにしてもまずは出方を見るしかあるまいか。

「もちろんだとも。その前に、彼女、シャルは道案内の役目だけで十分だろう。ひどく怯えているようなので、こちらで休ませてもいいだろうか？」

「あのっ……私、宿でっ、呼び出されて……っ」

「誤解のないようにお願いしたいが、我らは従者殿に危害を加えるようなことは誓ってしておりません。その点」

オールドが慌てたように、言葉をつなぐ。

「わかっているとも。オールド隊長の高潔英邁な人となりについては、昨日時点で了解している。誤解などしようはずもない。もちろん、『ニアヴ様』も同様だ」

「おお、感謝いたします」

あくまで上からの立ち位置として、言葉をかける。

「さ、シャルこちらに。あとは俺に任せてくれればいい」

戒めから解放されたかのように、パツとシャルが動き出す。

「すみません、私、びつくりしちゃって」

なにやら耳をすまなそうにへによらせて詫びてくるが、全く問題ない話だ。

「むしろ、ここまで彼らを案内してくれて助かったくらいだ。こちらから出向かずにすんだからな。奥でニアヴが休んでいるから挨拶をしてくるといい」

「はいっ」

シャルを奥に逃がしたところで、さてこれからどうしたものかと考える。

オールドとミゴットは、店内に展示した【狐光灯】と【ウォーターフォウル・ボトル／降鵜水筒】に目を奪われているようだが、そもその用向きは『アंक・サンプルス』の一件についてだろう。

その追求に対する回答は用意してある。しかし、今ここでその話を初めて、店に集まっている客を放置するわけにもいかない。

ルーケイオンとの接触は、今日の午後あたりになると読んでいたのだが、それより早いタイミングになったというのは、単純にルーケイオンの組織力を過小評価してしまっていたことが原因だろう。少し評価値を上げておく。

対応の優先順位についてはまあそうだな……ここは貴族や騎士の存在する封建国家なのだから、ルーケイオンへの対応が先でいいだろう。

「従者殿、これらの品々は……」

オールドが黄金の光を放つ瓶を一つを手に取り、感嘆の声をあげる。

「今日から開店したこの店の商品だ。それは蓋の開閉で光が灯るマ

ジックアイテムで、もう一つが、水の湧き出る水筒だ」

「信じられん……マジックアイテムとはどういう意味だろうか、これはアーティファクトではないのですか？」

「まあそう思っただけで貰える分には、訂正を入れるつもりはないが。厳密には異なるものだな」

「もう一つお聞きしてもよろしいですか？」

ミゴットが穏やかに質問を投げかける。

「お聞きしよう」

「ここは武器を扱う『竜と水晶の店』だったはずですな。新しい商売を始めたにしても、そこにアレク殿の姿がないのはどのような理由からでしょう？」

「それは」

「どうということだ。なぜ、この男がアレクの名を知っている？」

「アंक・サンプルスの件は想定内だとしても、アレクと俺との関係までは知り得たはずはない。」

「……ないはずだが、現時点では情報量で完全に負けているな。向こうの持つ情報量が判然らない以上、下手な小細工は逆に懷疑を招くか。しかたない。」

「アレクはアーティファクト探索の冒険へと旅だった。俺は彼から信を得て、店を預かったという理由になる」

「そうでしたか」

「ミゴット殿はアレクとはどのような関係で？」

「いえ、今はもう関係というものもございませんでな」

手の内は見せないと言うことか。やれやれ、面倒な相手だ。

「うむむ……その、ワーズワード殿」

と、そこでオルドが遠慮がちに声を発する。おっと、まずはニアヴの件だったかな。

「なんだろう」

「この【狐光灯】というマジックアイテム。売り物だというのであれば、私にも売ってもらえるだろうか」

そっちかよ！

おっと、俺としたことが残念な脳内ツツコミを入れてしまった。とはいえ、今後の話を有利に持っていくのに、それに興味を持って貰えるのはありがたい。賄賂的な意味で。

「あー！ 見つけたあ！」

了承の意を伝えようとしたところで、高い声が放たれた。声の主を見つけると同時に嘆息を落とす……そんな俺をズビシと指差すのは赤いローブにミニマントの女だった。

ああ、なんか昨日見た顔だな。

「人を指差すのはやめなさい」

「やっと見つけた！ あなた、ワームテールさん！ 昨日、私の杖に何かしたでしょっ」

「人違いではないか。俺はワーズワードだ」

「そうそれっ！」

人コードネームの名前をそれと言っな。

「セスリナ！？ お前が、なぜここにいる！」

「へ……あ。お兄ちゃん」

「一度制服に袖を通したなら、そうと呼ぶなと言ったはずだ！」

「オールドお兄様、ごめんなさい！」

「オールド『隊長』だ！」

そして、おもむろに説教を受け始めるセスリナ。漫才か。

というより、あのズッコケ魔法使いとオールドは兄妹だったのか…

…驚きである。

「ワーズワード殿はセスリナ嬢とも御面識があられたのですかな」

「御面識かどうかは知らないが、昨日少し話をしたな。それよりアレはミゴット殿の部下ではないのか。放っておいていいのか？」

「この老いぼれはラスケイオンの群兜マタと言っても、半分引退した身でしてな」

つまり、口を挟むつもりはないということか。

「ねえねえ、お兄様なにそれ？　すごいかわいい」

「話を聞かぬか！　……これはこの通り、黄金の光を灯す、『マジックアイテム』というものだそうだ」

「すっごいきれい！　お兄様私それほしいつ、や、ほしいですっ」

そこ、言い直した意味あるのか？

「む……実はお前がそう言うとおもってだな。今ワーズワード殿にお願いをしていたところだ」

「本当！？　お兄様大好き！」

喜び勇んでじゃれてくる妹に、まんざらでもない様子のオールド。

シスコンかよ！

おっと、俺としたことが残念な脳内ツツコミを二度も入れてしまった。

しかし、どこまで話が拡散させるつもりだこの兄妹は。

察するにセスリナの用件は、昨日の杖の調律についてか。実はあの杖は、アーティファクトだったらしいしな。その後なにか不都合でもあったのだろう。

正直無視したいが、彼女もあれでラスケイオンという公権力側の一員である。更にオルドの妹だというのであれば、適当に手懐けておいてもいいかもしれない。

「それで、ワーズワード殿、このマジックアイテムの件だが」

「……販売の件なら是非もなく」

「おおっ」

「やったあ」

「ちょっと待ったってや！」

突然の声に、何事かと振り返るオルド。

待ったをかけたのは一人の商人らしき男だった。

「伯爵様にはまいどお世話になります『ベルガモ商会』のオージャン・ベルガモ입니다。失礼を承知で言わせてもらいますが、そらあきまへんやろ。ここにならんどる商品は、これから公平な抽選で売る相手を決めるつちゅうンで、こうやってみんな待つとるんや。いくら伯爵様のご子息、ご息女言うたかて、そこへの割り込みはルール違反ちゃいますんか？」

「う、むむ……それはそうかもしれぬが……」

押しの強い商人らしい言いぐさである。金が絡めば、相手が貴族、公権力であろうと、ひるむことはないらしい。地球にも『金はなによりも強し』という格言があるしな。

極論すれば、爵位、権力も金で買えるものの一つだ。

オージャンに賛同するように当然現れたルーケイオンに対する不満の声が沸き起こる。

ちなみに、オージャンの発声には、なまりと思わしき語尾変化があったので、脳内で関西弁に変換してみた。

オージャン・ベルガモという男、俺が先ほど目をつけていたうちの一人でもある。

そして、オルドをして伯爵様のご子息ときたか。セスリナは、まあどうでもいい。

地球の概念で言えば、王族をトップとして、貴族階級は公・侯・伯・子・男の序列、そして男爵の下には騎士爵が並ぶ。伯爵といえば序列三位。かなりの高位だ。

つまりオルドは上級貴族の一員であり、かつルーケイオンの隊長職ということか。至極わかりやすい性格と言い、パイプを作る相手としてはこの上ないぞ。セスリナは、まあどうでもいい。

とはいえ、オージャンの言にも一理があり、彼とも今後友好な関係を築きたいと思えば、言葉に詰まっているオルドの代わりに、この場合は俺が仕切るしかあるまい。

「ベルガモ殿、ご指摘感謝する。確かに今日ここに並べた商品を購入する権利は、集まって頂いた全ての人間にあるべきだ。であれば、オルド殿も商品が欲しいというのなら、その抽選に参加して頂くの

が筋だろう」

「せやろ？ ニイさん、なかなかわかつとりますな」

商売に公平性がなければ、そこに信用は生まれない。

かと言つて、オルドの面目を潰すわけにもいけないので、当然フオローを入れる。

「だが、オルド殿には私個人として借り、いや恩がある。今店頭に並べてある分については、公正な抽選にて販売を行う。これらとは別の在庫があるので、オルド殿へはそこから一つ融通しよう。それでいいだろうか？」

在庫なんて実はないんだが、即興で作る方向で。シャルもきてくれたことだし、小瓶買い出しのおつかいくらいは頼めるだろう。

「そら問題あらへん。店に並んでないモンまで売れっちゅうんは、そらそれで話が通らんさかいな」

「ワーズワード殿……ご厚意痛み入る。こちらとしてもありがたい話です」

フオロー完了。

二人の了解が取れたところで、次は他にいる客全てに向き直る。

「もちろん、今後も継続的にマジックアイテムを販売する予定があるので、今日の抽選に外れた方は、次回に期待してほしい。そうだな、今回の外れ券を持っていれば、次回の抽選で優先することによよう。数に限りがあるのはどうしようもないが、何度も足を運んで貰えれば、その内購入できるだろう」

俺の提案に、ドツと歓声が沸く。

ざっと見渡したところ100人以上が集まっている状況だ。20程度しかない商品を購入できる確率は5%以下。何度も来ればその確率が上がるというのであれば、毎日でも訪れる客ができるに違いない。

商品の有無にかかわらず、毎日人が集まるとなれば、その宣伝効果は計り知れない。

そうなると、タスクの優先順位は再び入れ替わる。

「というわけで、先に抽選販売を終わらせてから、落ち着いて話をさせて頂くということではいいだろうか？」

「こちらこそ、商売の邪魔をして申し訳ない。ここで待たせてもらうことにしよう」

「私もそれでいいよ、や、いいですわよ」

何を訳知り顔でふんぞり返っているのか知らないが、お前には聞いていない。

「その抽選には、私も参加させてもらってよろしいのですかな？」

「……ええ。なんでしたら、オールド殿同様、別口で融通しましょうか」

ミゴット・ワナン・バルハス。出来れば、こいつには一つ貸しを作っておきたいところだ。

だが、

「いえ、そこまでして頂くのも気が引けますのでな」

「了解した」

当然そう来るだろう。ここで俺の誘いに乗るようなら、警戒する

必要がそもそも無い。

「そつえば、値段をきいておりませなんだな。あいにくと今は任務中でして、持ち合わせは少ないのです」

「それなら先ほど説明に追加したのだが、抽選に当たれば、しばらくは商品を予約扱いとするので、あとで金を持って来て貰えればいい」

「ほつほ、よく考えておられますな」

「ちなみに【狐光灯】は一つ1,800^{ジツ}旗だ」
「……………」

その価格設定に、さすがのミゴツトも二の句を継げず、沈黙を持つて驚愕を表す。

1,800ジツト。親子4人核家族における約2ヶ月分の生活費に相当するだろうか。

日本円換算なら約18万円。決して安くはない値段設定である。だが、この場にいる誰もが、全く同じ感想を持っていた。

「ありえへんわ。ワイやったら、最低でも一つ100,000ジツトで売る自信があらまんぞ。アホちゃうんか、あのニイさん……」

ワーズワードには聞こえない大きさのオージャンの呟きこそが、まさにその共通認識を示していた。

抽選は割り符方式を採用した。

古くは中国春秋戦国時代から日本江戸時代の朱印船貿易まで、地球人類総アホの子時代において、最高度のセキュリティをもたらした信頼ある方式である。

木片に、1から順の番号を振る。この際、木片の両の端に同じ番号を振るのがポイントだ。

木片を二つに割り、片方を客に渡しもう片方を抽選ボックスに入れる。

そこからランダムに木片を選び、同じ番号の客が当選者だ。

偽造された木片は、二つに割った木片をあわせたときに一致しないため、そこで偽物と判定できる。

「なんとという画期的な方法だ！」

その抽選方法を説明しただけで、客からは感嘆の声が漏れてくる。おまえら、どんだけ。

「あ、あの…… それでは抽選を始めさせていただきます」

『うおおおおおおおー！』

「ひゃう」

公平を期するため、木片を選ぶのはシャルの手を借りる。

だが、壇上に立つシャルは、自身に向けられる多くの瞳。それらは期待と祈り、或いは欲望に血走っている。の重圧に、既に負けそうになっている。

「やかましいのじゃ！ 主ら、ちいつとは落ち着かぬか！」

『うおおおおおおおおお！！』

「うおおおおおおおおお！！ ニアヴたん、うおおお
おお！！！！」

同じく、壇上で皆を睥睨する看板（に描かれた狐つ娘とよく似た）
娘のニアヴが叱責を加えるが、日頃目にすることのない濫獣^{ルーヴァ}の登場
に、抽選会場はヒートアップするばかりだ。

一人おかしなのが混ざっているがスル！。

暇をもてあましていたルーケイオン衛士どもに周辺警護をさせて
いるので、暴動が起こっても即座に鎮圧できる体制にはなっている
が、この会場が異常な熱気を孕んでいることには変わらない。

「あの、では一人目の方、読み上げますね…… 23番」

「うおおおおお、俺だ！ 俺が23バアアアアン！」

『あああああ〜〜』

一つの喜びと、数多の吐息が重なる。

「うむ。ではお主に【フォックスライトノ狐光灯】を買う権利をや
ろう…… のう、ワーズワードよ、これは全員に言わねばならぬ
のか？」

当然だ。

折角のお祭り騒ぎである。日本古来の作法を無視するなんてとん
でもない。

できれば、サムズアップでももらいたいが、サムズアップの

意味を説明するのが面倒だったので、とりあえずセリフだけで我慢しておく。

61番、8番と順に番号が呼ばれて行き、その全ての場面で喜びの声が上がり、吐息が落ちる。

「えと、142番です」

「ほっほ。私ですな」

……ミゴットか。まあ当然当ててくるだろう。

「うむ。ではお主に【狐光灯】を買う権利をやるう」

「おお……ありがとうございます、ニアヴ様。そしてお久しゅうございます」

ニアヴの前に、感極まった様子で声をかけるミゴット。

……ふむ。

「うん、妾を知っておるのかや？」

「覚えておられますでしょうか。私が冒険者として修行を積んでおりました折り『天輪の塔』を踏破したその帰りでした。我らが手に入れたアーティファクト『バルミス卷躊寧の翼』を奪い取るうという賊どもの手から、助けて頂きました」

「おお、覚えておるのじゃ！ 主はあるときコッズと共にあった小生意気な魔法使いかや。昨日はコッズの孫という小僧とも話をしたところじゃと言うのに、縁とは奇なものじゃのう！」

この街で最高位の権力を持つ魔法使いが、外見上は若い獣人の娘でしかないニアヴに、膝について、敬意を表する姿は、違和感を通り越して、神秘性すら感じさせる。

一同はしばしざわめきを収め、二人の語らう様子を窺う。

俺としても、特に口を差し挟む場面でもないが、わざわざそれをこの熱気渦巻く壇上でおこなったミゴットの狙いが読めない。

この行為には何が目的があるはずである。

となれば、ここは一つ己の流儀に従って分析してみよう。

ハッカーは、プログラミングコードを解析する技術力だけがあれば良いというものではない。そのシステムを作った側の人間、『開発者視点』の思考を読み、その思考の空隙を突く発想が必要である。そういった、別の人間の立場たる『第三者視点』で物事を捉える能力こそが、最も重要なのだ。

今のミゴットを自分と置き換え、この行為の意味を読み解く。

あれが俺であつたならば、一体どの様な目的で壇上のニアヴと語らうか？

当然、個人的な話がしたいのであれば、後でいくらでも時間がとれたはずだ。ならば、ニアヴと語らうこと自体が目的ではなく、自分とニアヴとの関係性を全ての客に知らしめることが目的となるが……それでは目的として少し弱いな。

高い地位にいるミゴットが、濫獣ニアヴと友好的関係にあつたとしても、それは特筆して驚くべきことではない。ならばここは、その関係性を知らしめる対象をもっと限定するべきだろう。

例えばこの俺……とかな。

自分がニアヴと既知であることを公衆の面前で印象づけることで、この後俺がニアヴについて少しでも適当なことを喋れば、公然とその矛盾をつくことができる。

楽観を捨て、更なる警戒を持って推測するならば、俺とニアヴの

関係になんらの実体がないことを、事前に見破られている可能性すらある。

「本当にたったの1,800ジットでよろしかったのですかな」

壇上から降りてきたミゴットが、商品引換所、つまり俺の元までやってくる。

その瞳から読みとれる感情は挑戦的なものだ。

つまり 先ほどの行為は「私は全てをしっているぞ」という意味を込めた、俺への牽制だということだ間違いないだろう。

厄介な相手になりそうだな。

だが今は、業務を優先しよう。

「もちろんだとも。割り符の照合をさせて頂きましょう」

この場面での符合わせは儀式的なものにすぎない。

が、身分に関係なくそれを実施することで、客には店の透明性を印象づけることができる。

頷き、割り符を差し出すミゴット。そこに、シャルから受け取った割り符を合わせる。

割り符はピタリと一致した。

その場で1,800ジットを受け取り商品を手渡す。

「おお……近くで見れば見るほど、ニアヴ様の「フォックスファイアノ狐炎」が思い出される美しい炎ですな」

「【狐炎】をご存知でしたか」

「ひとより少しばかり、長く生きておりますのでな。ですが、この割り符というものには驚かされました。よく考えられております。」

これもワーズワード殿が考えられたのですかな」

「いや。考えたのは別の誰かだ。俺はこういう方法もあると知っていただけにすぎない」

「ご謙遜を。それを人は、才気があるというのでしょ。その才気を持つて無垢なるニアヴ様をたぶらかされたのですかな？」

「どうだろう。丁度本人もいることだ。直接聞いてみてはいかがだろうか？」

「ほっほ。老いぼれの冗談でございます。失礼いたしました」

言葉はどこまでも丁寧で、表情は変わりなく柔和である。

一礼を行い、背を向け悠然と去って行く。

まずは挨拶。水面下の……いや氷面下で行われる名刺交換といったところか。

ネット上のコミュニケーション SNSに代表される己を晒すコミュニケーションツール上では、感情を表に出さない冷静さが求められる。

だが、ネットの真価はもう一つの特性、匿名性を利用したコミュニケーションツールにこそある。そこでは、どこまでも生々しい、感情的で攻撃的で、悪意にまみれた卑猥な汚物が毎昼毎夜吐き捨てられる。

悪意、害意、謀略、讒言、嫉妬 スツと染みいるそんな冷たい感情が、だが俺には心地よい。

ふむ、『ベータ・ネット』の連中は今頃どうしていることか。

やがて、全ての抽選が終了し、悲喜こもこも、主に悲の方を引きずった客が名残惜しそうに散開してゆく。

その場で引き換えた代金が21,600ジット。後日引換分が2

0、700ジット。計42、300ジット。日本円換算で約423万円。軽くジャパニーズ・リーマンの年収分は稼げた計算だ。

「シャル、すまないが、もういくつか用事を頼んでいいだろうか？」

「はいっ、なんでしょうか」

「あの男とあの男とあの男、三人にこの手紙を渡して来て欲しい。

そのあとは、今日中に引換にくる客がいるかもしれないので、店番を頼めるだろうか」

「わかりました、任せてくださいっ！」

耳をピンと立てて、元気に返事をするシャルに手紙を託す。

本当にいい子である。

これはバイト代を弾んでやらないといけないな。

表では、オールドとセスリナ、それにミゴットが作業の終了を待っている。

「お待たせした。さて、『ニアヴ様』をどこにお連れすれば良いのだろうか？」

「はっ。では、ご足労をおかけ致しますが、我らルーケイオンの本部まで起こし頂けますでしょうか？」

「了解した。良いですか、『ニアヴ様』」

「もうそれはよいわ！　しかし、これが人の行う商売というものなのじゃな、懐かしい者にも会えて、妾はこれほど楽しい日を過ごしたのは久しぶりじゃ、礼を言うぞワースワード」

「それはなにより」

鼻歌すら歌い出しそうなほど、ご機嫌なニアヴ。

「そういえば、セスリナ。屋敷から出るなとは言っていないが、な

「ここに来たのだ」

「ごめんなさい、お兄様、私も昨日のこと自分で調べようと思ったの。それで、昨日ぶつかった、そのワールプールさんを捜してたら、そこにお兄様がいて」

もう突っ込まないぞ。俺は諦めも早いのだ。

「どうせ同じ組織なのだろう。その本部とやらで一緒に話をすればいいのではないか？」

「そうおっしゃって頂けるのであれば。では、案内致しますのでこちらへ。セスリナ、お前もだ」

「う、うんっ」

「説明かや。妾が行く必要はないと思うのじゃがのう」

「は？ いえ、さすがにニアヴ様に来て頂かないことには……」

オルドが、濫獣様の気分を害してしまったのかとなにやら苦悩している。まあ実際問題狐は居ても居なくてもいい存在なので、間違ったことは言っていないのだが、一人にさせてそこで余計なことを喋られると俺の舞台計画が崩れる可能性もある。

「わがままをいうな。帰りに、なにかうまいものでも買ってやるから」

「妾は、童^{わいし}かや！？」

「それにだ。言っただろう　もう目を離さない、と」

その言葉に、狐の動きがピタリと止まる。

扱いやすいのはいいのだが、あまり人前でやらせて欲しくないものである。

「仕方ないのう。お主がそこまで言うのならついて行ってやろうで

はないか。くふふっ」

「話は付いた。では行こうか」

「……………」

本当に鼻歌を歌い出したニアヴ。

ミゴットが何を考えているのか、その表情からは窺い知れない。

だが、今はいいだろう。

見極める機会は遠からずやってくる。

シャルに後を頼み、昨日のデジャヴのように青甲冑に囲まれて、移動を開始する。

やれやれ、息をつく暇もないとは、忙しい異世界もあつたものだ。

Wayfarer's Witchcraft-shop 04 (後書き)

投稿するたびに誤字だらけですいません。

誤字を見つけた方は、各自お気に入りの誤字のない小説でお口直しをお願いします。

Wayfarer's Witchcraft-shop 05

ユーリカ・ソイル『北・右鍵地区』ルーケイオン本部。

本部と言うだけあり、アレクの店とは同じ石造りの家屋でも、その質は全く違っていた。

そもそも石は石でも、この白さは大理石だろう。マーブルの柱に、マーブルの床石。白亜の間ともいべき広さをもった立派な部屋である。

そこには同じく大理石の円卓が鎮座し、上座にニアヴと俺。下座にオルド、ミゴット、セスリナが位置する。

あくまでニアヴと俺は客、上位者の扱いであり、容疑者扱いではないことを示す意志が感じられる。

「ニアヴ」

「なんじゃ？」

まずは作戦会議だ。

口元を隠し、密かな声でニアヴに呼びかける。

「なにか説明を求められたら、全て俺から説明すると言え」

「それはよいがの」

「そして、俺が何を口にしても、さも当然という顔をしておけ」

「……なにやら良くないことを企んでいるのではなからうな？」

「『^{ル・ヴア}濇獣は人の地に干渉してはならない』」

「ぐっ……はあ、お主は本当に口から先に生まれてきたような男じやの。じゃが良からう、妾は一切干渉せぬ。それでよいのじゃな？」

「ああ、頼む」

作戦会議終了。

さて、では俺の舞台を始めよう。

「話を伺いたい件は二点、いえ、三点ございます」

「一点目は、昨日トルテ広場にて起こりました『アंक・サンプル』の異変についてでございます。今、町の全てを覆っている幻虹。その原因について」

「二つ目は、私の杖の件っ！ 昨日の『天空のかがり火』、アナタも見たでしょ、あんなの今までなかったの、もっと小さい、あ、それでもすっごく大きいんだけど、でも、昨日よりずっと小さいのしか出ないはずだったの！ あんなの、アナタが私の杖に何かしたとしか考えられないんだから、や、ないのです！ 責任をとってふぎゅっ！」

唐突に割り込んできたセスリナ、その頭を押さえつけて、黙らせるお兄ちゃん。

あー、あれをやったのは、セスリナだったのか。なるほど、そちらの状況も理解した。

何か言いたげな狐の視線を完全にスルーして、話の続きに耳を傾ける。

「……コホン、妹が失礼しました。最後に三点目でございます。それらを持って、昨日から街を騒がしている一連の事柄の全てにニアヴ様が関係しているのでは、と推察いたしました。もうそうであるならば、此度のニアヴ様の『ユーリカ・ソイル』ご来訪目的について、改めてお教え願いたく」

恭しくオールドが一礼を行い、論点をまとめ上げる。

「話はわかったのじゃ。説明はお主にまかせる、ワーズワード」

ここまでは先の打合せ通りだ。

「ということで、説明は俺が引き継ぐが、それで構わないかな？
オールド殿」

「もちろんです」

オールドとしても立場上、直接ニアヴに問いただすことは憚られる
ようで、むしろ安堵した様子で答えを返す。

「ではまず、アंक・サンプルスの件についてだ。あれは俺がやつ
た」

「はっ……………？」

「次にあの杖の件だったか。元の作りが酷かったので直してやった
わけだが、それにより杖の持つ魔法効果が強まったのだろう」

「なにそれ！？ うそ言わないでよ、や、言わないでくださいっ！」

「最後にニアヴの訪問目的だったな。訪問目的は『答えられない』
「ほっほ」

「以上、何か質問はあるか？」

「って、その答えはなんじゃ っ！！」

黙っておけと言ったろうに。

相手の疑問を一気に解消してやったのだからいいだろう。

「はっ、いや、あの……失礼ですが、その、あれらはワーズワード
殿が行ったものであると？ ニアヴ様ではなく？」

「そう言った」

「嘘でしょう」

「オールド殿に嘘をついても仕方ないだろう。結論だけ言えばアंक・サンプルスも完全な状態ではなかった。アーティファクトとは、はるか昔に作られたものだと聞いた。経年劣化による動作不順があるのも当然だろう」

「はあ」

俺の言葉の否定は、ニアヴの言葉の否定である。

そのため、どれだけ疑問があろうとオールドからそれ以上の追求はでてこない。

一方、そういった政治判断のできない子は別で、

「そんなことできるわけじゃない！　アーティファクトなんだよっ！？」

「実際にやって見せただろう」

「あ、あれ？」

「とはいえ、こちらも100%善意だったわけでもないしな。今のがイヤだというなら、元の良くない状態に戻してやるぞ」

それで問題は解決のはずだ。

「えええええ！？　ど、どうしようお兄ちゃん！　直してもらった方がいいの、や、いいですか？」

セスリナが兄に問いかける。

だが、俺の言葉に絶賛放心中のオールドからの、反応はない。

となれば

「ほっほ。なんとも信じがたいお話をお聞かせいただきましたな」

「だが事実だ」

変わらぬ穏やかな口調。

最後はやはりこの男 ミゴット・ワナン・バルハスである。

「マーズリー伯爵家がお持ちになられている『スタッフ・オブ・マーズリー』は我が国をして、至宝に数えられる『アーティファクト』の一つですな。それをして作りが悪いなど、おおよそ百凡の者には言えますまい」

「俺はその『百凡の者』とやらではなく、ワーズワードという単一個人だ。目の前に木があるのに、森について論ずるのは非効率にすぎるだろう」

「然り。なれば、まずはその木の根についてお聞きするべきでございましたな。あなたの言葉が全て真実であるのでしたら ワーズワード殿、あなたは一体何者なのでしょう？」

そう、当然その質問こそを真つ先に追求の俎上に上げるべきだ。ここまでわかりやすく誘導してやらなければ出てこないとは、どれだけ外堀埋めが好きなのだ。

とにかくやつと引つ張り出したその言葉である。

ミゴットの発したQ。それを受け止めた上で、沈黙をもってAとする俺に皆の視線が集まる。

俺という個人、ワーズワードという人間が何者であるのか、その疑問に相手の目と関心を集めることが舞台作りの一だ。

「それを説明するには、ここは少し狭い。外にどう？」
「えっ、なんで？」

女魔法師の素朴な疑問を完全に無視して、歩き出す。

説明のため、と言われれば俺を止める理由は誰にも存在しない。

外では30人からなるルーケイオンの青甲冑と、数的にはその半分程度のラスケイオンの赤ローブの魔法師たちが集結していた。

あまりにも早い俺たちの登場に、衛士たちは何事があつたのかと、ざわめきを見せる。

それでもすぐに整列を始めるあたり、そこそこ練度が高いと評価しても良いだろう。

ルーケイオン本部は門を入った場所が、いわゆる練兵場と呼ばれる戦闘訓練広場になっている。

だが、今集まっているのは事件の対応で集められた衛士たちだ。藁で作られた人形を突き殺す練習をしているわけでもなく、事件の取り調べ……いや瀆獣様のお話を伺うトップ会談というべきか、とにかく俺たちの話が終わるのを待っていた状況だ。

舞台としてはもう少し人目が多い方がよいのだが、ここからトルテ広場まで歩いていくとなると、俺がしんどい。

広さ的には問題ないしな。

「話を続けるにはもう少し広さが必要だ。皆に中央を空けて下がって貰えるように頼めるか？」

「わかりました……みな、中央をあけて、左右に控えよ！」

「ほっほ、ラスケイオンの皆さんはワーズワード殿の行動から決して目を離さぬように」

「はっ！」

オールドとミゴットの号令にざっと散開する衛士たち。

「ニアヴ、お前もそこで停止だ」

「む、わかったのじゃ」

俺についてこようとしていたニアヴを留め、俺はそこから更に数歩足を進め、広場の中央あたりでくるりと180度回転する。

なぜ、ニアヴの従者であるはずの俺が話を仕切っているのか。命令に従いながらも、衛士たちの耳はピコピコと忙しく動いて、その状況に対する疑問と興味を物語っている。

「さて、では俺が何者であるのか。実演を持って知って頂こう。オリジナル・マジック」

腕を広げての大きな身振り。アメリカ式パフォーマンスは、日本人としてはその行為自体に苦痛と羞恥を覚えるものだが、舞台効果を計算した上で必要性を認めるならば、理性は情動を凌駕する。

俺の身にまわりつく源素の中から、7つの源素を選び出し、それを頭上に掲げた手のひらに集める。

50人程度、都合100の瞳が俺の一挙手一投足に注がれる。

黄源素×1、赤源素×1、白源素×3、緑源素×1、青源素×1

七つの源素を制御し図形を作るのだが、今俺が作り上げているのは動きを持つ図形だ。

これまでの魔法は、立体的ではあるものの固定された図形であっ

たが、今俺が作り上げているものはそうではなく、円となり、クロスし、立方体へと変化し、波を作り、また円へと戻る動き。

色が二色ほど異なっているが、存在しない黒と紫源素の代わりに白源素で補ってやることで、この五色の源素でも限定的な効果が発動できることは、昨晚のうちに検証済みである。

劇場型演出として、本来不要な【コール／詠唱】の手続きを持つて発動させるそれは、

「 隔絶せよ【コール・アंक・サンプルス・ライト／瞬らぬ卵・機能制限版】」

魔法の発動光と共に、俺を中心とした半径三メートルほどの虹の輪が産み出される。いや、虹と言うには色が足りない。五色だけの不完全な虹。故に機能制限版である。

絶句により場の空気が凍り付き、これももう見慣れたものだが、一同の目が極限まで見開かれる。

当然そこには、オールドとセスリナ、それにニアヴ、外見上の反応は少なめだがミゴットも含まれる。

「このように、魔法、あるいは『マジック・アーティファクト』と呼ばれるものもつ魔法効果を解析し、それを再構築する技術を持つ者。自称を持って、俺が何者かを教えるならば、こう呼ばれるべきだろう」

日本人が死ぬまで日本人であるように。三つ子の魂が百を超えて不変であるように。

世界が変わるうとも、人の在り様は変わらない。俺はどこまでも俺でしかない。

結局言い直させられ、死にたくなっている俺。

「『はつかー』？」

「なんだ『はつかー』って、魔法使いじゃないのか!？」

「いやそもそも【プレイル／祈祷】なしに魔法を【コール／詠唱】したぞ！ そんなことができるのは濫獣様^{ルヴァ}だけじゃないのか!？」

「でも実際、これは『アंक・サンプル』……だよな。嘘だろ？」

「ああ、信じられないが、間違いない」

「何者なんだ、あの男……」

ざわめきは止まらない。

……とりあえず、舞台を第二幕に進めよう。

「ニアヴ」

「なんじゃ」

「『アंक・サンプル』の持つ魔法効果はわかっていない。わかっているのは三つ『破壊不能』^{イモータルティ}『存在固定』^{ドナムフ}『反魔法』^{アンチ・マジック}の効果だけだという話だったな」

「そのはずじゃ」

何事もなかったかの様に話を進めるだけの図太い神経を、元から持ち合わせているというわけではない。

今の自分が、舞台上に立つ役者の役をこなしていると認識しているからこそ、理性的行動である。

「その認識は同じと考えてよいのか？」

これはミゴットに向けた言葉だ。

「ニアヴ様の仰るとおり。それ以上の効果は未だわかっておりませんな」

うなずき、同意を示すミゴット。

ならば舞台装置としての効果は問題なさそうだ。

「さて、先ほども言ったが、アंक・サンプルスの調律は俺がしたことだ。そしてその結果、アंक・サンプルスの持つ魔法効果のうち、追加3つの効果を解析することができた。解析された6つの効果の内、5つの魔法効果を再現したものが、この【アंक・サンプルス・ライトノ孵らぬ卵・機能制限版】の魔法だ」

「……は？」

「アंक・サンプルスが持つ魔法効果がわかったって？ えっ、そうなの」

「お主、昨日は魔法効果は判然らぬと言っておったじゃろうが！？」

「その後検証したのだ」

ハッカーの夜は遅い。判然らないものを判然らないまま放置するほどに、俺は魔法というものに無関心ではない。

「興味本位ではあるが、街にかかる本家『アंक・サンプルス』の魔法効果を調べようと思ってな。結果、このように限定的な効果であれば通常魔法として発動することもできるようになった」

「なっ、国が長年かけて調査してもわからなかったものを、一晩で！？」

単なる状況説明がさらに衝撃の波を広げる。

俺には源素が見えるというアドバンテージがあるだけなのだがな。

「それは……ぜひ教えて頂きたいですな」
「いいだろう。まずアंक・サンプルスの基本的な魔法属性について」

俺の言葉に、赤ローブのラスケイオン魔法師たちこそが著しい反応を示す。

俺の行動から目を離すなど言ったミゴットの言葉の意味を、今や
つと理解したのだろう。

「検証した結果、アंक・サンプルスは一種の結界魔法であり、その効果は拠点防衛機能に特化されていることがわかった。つまりは、この街を護るための魔法だろうと言うことだ」

「はい。確かに古の文献にも、それらしき内容がかかれております」
「なるほど。俺の検証結果が的はずれでないと確認できたな。では次に個別の効果についてだ。その効果の一つの『イモータリテイ』だが、この【ライト／機能制限版】では再現できない魔法効果なので、説明は飛ばさず」

それはここにはない黒と紫、そのどちらかの源素によりもたらされる効果なのだろう。

「なので、『アンチ・マジック』。まずはこれは実証してみせよう」

誰にし、よ、う、か、な、

「セスリナ」

「わ、私？」

「ああ、お前ちょっと俺に向かって魔法を撃ってみろ」

「ええー！！」

いや、そんなに驚くことじゃないだろ。

「くふつ、そのような面白い役なら妾が」

「お前はダメだ」

「なっ!？」

「その役、私ではだめですか？」

狐の参加を即拒否したところで、ミゴットが穏和な調子で口を挟んできた。

「ミゴット殿が？ いや、それは願ったりだ。ではお願いしよう」

「ほっほ。攻撃魔法など久しぶりですので、失敗しましたら、申し訳ございません」

言つと、ミゴットは目の前で指を組み、呪文のようなものを口ずさみ始める。内容的には呪文というより、祈りか？

神様お願いします系の意味が聞き取れるが、文章としての意味は捕らえにくい。

だが、それに合わせて源素が集まって行く様は、ニアヴのそれと大きく変わることはない。

昨日ニアヴは俺が【コール／詠唱】なしに【バニシングバード・エア／澁空鳳】を発動したことに驚いていたが、理屈でいえばニアヴもまた、この呪文のようなものを必要とせず【詠唱】のみで魔法を発動させている。

とすれば、全ては方式論、もしくは熟練度だけの違いでしかないのだろう。

そんなことを考えている内に、ミゴットの手には、いくつかの源

素が集められていた。

青源素×14、白源素×1

上下の尖った六角柱結晶、その青い水晶図形の中心に白源素が一つ入っている。

使用源素も多く、図形としての崩れも少ない。さすがはラスケイオンの長といったところだろう。

「ミゴット様、その魔法は危険すぎます！」

図形構築を終えたミゴットに、なにやら焦った様子で赤ローブ（多分上級魔法師）が話しかける。

「問題ありません。そうですね、ワースワード殿」

「そうだな」

「ほっほ。ではゆきます　ここえませい【コール・マルセイオズ・フローズン・アクス／水神氷斧】」

魔法の発動光とともに、ミゴットから激しい冷気が迸る。

冷気は、ピキピキピキ　と音を立てて凍り付いてゆき、最後には宙に浮く巨大な氷製の斧の形をなした。

質量を無視して浮遊するそれを、いまから振り下ろしますよーと言われれば、それは大いなる恐怖だろう。

その巨大さ、重量感から、どれだけの破壊をもたらす魔法なのか、容易に想像ができてしまう。

これは　大丈夫か？

さすがにこれだけの破壊力を反^{アンチ}でできるかまでの検証はできていない。

リスクが高まるが、ここで舞台を降りるわけにもいかない。

「おお、あれは先の大戦で山の形を変えたという、ミゴット様の最強魔法」

「待て！ それはいくら何でもやりすぎじゃ、もっと他の魔法が」

俺の身を案じてか、制止に入ろうとするニアヴだが、ミゴットの魔法発動の方が、一瞬早い。

ヒュン！

その質量を計算に入れていないかのような超速度で氷の斧が振り下ろされる。

ドッ ゴオオオンツツツツツ

「うおっ！」「きゃああ！」「うわああああ！！」

大地が大きく震えた。

砂埃が舞い上がり、その視界を奪う。

立っていることすらできず、大地に投げ出される衛士たち。身を挺して妹を庇う姿はさすが兄といったところか。

砂煙が徐々に晴れてゆく。

まともに立っているのは、ミゴットと辛うじてニアヴ、それに

この俺くらいか。

俺を包んでいた【孵らぬ卵・機能制限版】の虹に変化が起こつていた。

虹は消え、うつすら青い膜、いわゆるシャボン玉のような姿に変わっている。

そして、俺に向かい振り下ろされた氷の斧は、そのシャボンに触れた部分がゴツソリと消失し、シャボンの外側の大地のみを大きく抉っていた。

「おお この魔法すら打ち消してしまわれるとは、まさにアंक・サンプルスの『アンチ・マジック』の効果」

「……実証実験への協力感謝する。これだけの強力な魔法にも耐えられることが確認できたのは俺にとってもプラスだ」

俺は巻き上がった砂埃を手を払って散らしながら、その実、安堵に胸をなで下ろした。

さすがに、検証不足で最大負荷実験をするのはリスクが高いわ。

「……全く心配させおつて」

『うおおおおおおーッ!!』

ニアヴは安堵の表情を見せ、衛士からは大きな歓声が沸き上がった。

魔法防御が失敗していれば、俺は今頃ミンチ確定だった。

その場合でも、言い出したのは俺だということで、全ては自業自得。

こんなタイミングで仕掛けてくるとは、賞賛すら贈りたくなる。素晴らしい判断だ。

いやはや、全く油断できない。

青いシャボンの膜が、元の五色の虹に戻る。虹はくるりくるりと俺の周囲を回転する。

ミゴットがどこまでの策を持って行動しているのか、それは未だ定かではないが、確実に俺を排除しようと考えていることは間違いない。なさそうだ。

ならば俺もまた、生き残りをかけ、対峙せねばなるまい。

だが、それは最優先のタスクではない。今は生き残ることを前提にしたタスクの方が優先される。

「 続けよう。このように、『アンチ・マジック』の効果は虹の円周の外から内に向けられた魔法効果を打ち消す。虹の内部では魔法を発動することもできない」

正確には、源素の図形接続までは出来るのだが、その後の効果発動が抑制される効果があるようだ。

その説明にざわめきと感嘆がつながる。

「それはおかしい！」

「はい、その赤ローブくん」

「いまはこの街全体がアंक・サンプルスの幻虹の中にあるはずでしょう！ それなのに魔法は使えていますよ！」

おお確かに、と相づつ声。

「いい質問だ。これは詳細な条件についてまだ検証できていないが、アंक・サンプルスは、その発動時点で『敵』と『味方』を識別しているのではないかと考えられる」

「敵と味方？」

「そう、昨日俺はアंक・サンプルスを一時停止し、その後に再起動させた。その時点で、虹の内側の人間を『味方』、そして、それ以外を『敵』と識別して動作し始めたものと思われる。昨日から街の中にいた人間は魔法を使えるし、街に居なかった人間は今後この街の中では一切魔法を発動できない」

「はああああ!？」

「そして、味方と識別された人間には、その虹の内部におけるいくつかのメリットが付与される。それがこれから見せる新しい魔法効果だ。つまり 古の時代につくられ、そのまま放置されたアंक・サンプルスはその後街に住み着いた人間の全てを『敵』と判定して動作していたため、『味方』に対して発動されるべき効果が出なかったのだろう」

「ほ、本当に? ……でも、確かにそれならば道理が通っているよな」

「能書きはよいわ! はよう、その新しい効果とやらをみせい!」

「いいだろう。では一番わかりやすい方法で一つ目をみせよう」

ヒュゴゴゴゴ……

もついい加減慣れてしまった【フォックスファイア/狐火】の魔法を、軽く無詠唱発動させる。

もついい加減慣れてしまった衛士の驚きは無視する。

「静まれ」

俺の命令により、衛士たちが息を止めて、声を飲み込む。よし、いい子だ。

俺の言葉に従うということは、彼ら全員が俺の存在を『ニアヴの従者』ではなく、アーティファクトの力を操りミゴットの魔法すら無効化する、自分よりも『上位の者』として、認識し始めたことの証だ。

ここで重要なのは、ニアヴを抜きにして、俺個人に対する認識として、それを持たせることである。

「虹の内部で『味方』が発動させた魔法を外に向かって撃ち出すと」

黄金の炎は俺の手のひらに収まるほどの、小さな火球にしてある。その炎のボールを上空に向け、射出する。

火球が【瞬らぬ卵・機能制限版】の虹の円周を通過する瞬間、虹はうつすら黄色いシャボンの膜へと姿を変える。

ドンツツツ！！

シャボンの膜を通り過ぎると同時に火球は急激に膨張し、テニスボールサイズだった火球は大砲へと変わった。

「ええええええええええええ！！？」

続いて、上昇して行く火球が、本家『アंक・サンプルス』の虹に接触する。もちろんそこでも先ほどと同じことが起こる。

ドゴンッッッ！！

大砲サイズの火球は、昨晚の『天空のかがり火』に匹敵する大きさにまで増強される。

「はあああああああああ！！？」
「なんと」

ニアヴの瞳はキラキラと輝き、衛士の目はカートゥーン・ワールドの住人のように、前へ前へと飛びだしてゆく。
それ以上の魔法維持は必要ないので、適当なところで、爆散させる。

黄金の火の粉をキラキラとばらまきながら大気に溶けるように【狐火】の魔法効果が消失してゆく。

このデッカイ花火は街のどこからも見えたことだろう。今日の冒険者たちの酒のつまみは、この話題になるのか、それとも魔法道具店の方になるか、少し楽しみである。

「これが3つ目の効果『魔法増幅』^{マジック・ブースト}だ。虹の内部より外に向かい放たれた魔法は、その効果を数倍する」

先は長いので、いちいち質疑応答は受け付けない。
どんどん行こう。

「次は安全なもので、軽く紹介しよう」

俺の意志に反応し、発動者たる俺を中心点としてくるりくると回っていた【孵らぬ卵・機能制限版】の虹がほどけ、一本の光の帯になる。

さて、どこにしようか。まあ普通に考えれば、建物の屋上だろう。

伸縮自在の光の帯は地を這う様にシユルリと練兵場の中心から建物の屋上へと伸びて、一本の虹の道となる。
レインボーロード

「4つ目の効果」

レインボーロードが緑単色に染まり、淡く発光。俺の身体は皆の目の前から消え去り、同時、

「エクソダス
『大脱出』」

建物の屋上に転移した。

「おおおおお、転移魔法!?!」

「バカな、最難度魔法の一つだぞ!?! それをこんなにも簡単に発動できるものなのか!」

「ふおおおお!?!」

ブーストからのエクソダス、狐さんもぶあつさぶあつさと尻尾を振つての大興奮である。

俺が転移したあと、先ほどの虹の道は消え去り、再び練兵場の中心で無人となった球状の虹にもどる。

「付け加えるならば、これは虹の内部全ての『味方』を転移させる効果だ。拠点防衛の考えから見れば、緊急脱出を可能とする魔法効果は絶大なセーフティだろう。そして『存在固定』の魔法効果だったか。この魔法は一度発動させると、その位置を動かすことができないという特性を持つので、まあ魔法効果というよりは、単なるマ

イナス効果だな」

壇上……というにはいささか高すぎる屋上からの演説。

『反魔法』と『魔法増幅』だけでも強力すぎる効果なのだ。マイナス効果の一つぐらいには眼を瞑ろうというもの。

ぽかんと俺を見上げる衛士たちの瞳に、俺を濫獣の従者と見る色はない。

ならば 目的は達したも同然なので、もはや舞台を維持する必要はないな。

では、最終幕を持って、舞台を閉じるとしよう。

「最後だ。5つ目の効果」

地上に残った【孵らぬ卵・機能制限版】に向かって伸ばした手を、ぐつと握る。

もちろん、魔法効果の発動にそんな行動は必要ないので、パフォーマンスとしてだが。

興奮さめやらぬまま皆の目は俺から、【孵らぬ卵・機能制限版】へと再び戻る。

虹が今度は白い薄膜へと変わる。

地上に現れた白い球体 アंक 視覚的意味において、この姿がもつとも卵に近い。

『アंक・サンプルス』 『孵らぬ卵』、なぜ孵らない、なぜそんな名前が付けられたのか。

名前には意味がある。その名の通り、卵は決して孵らないのだ。

昨晚【孵らぬ卵・機能制限版】を効果検証を行っている際、もしこの第5の魔法効果を下手法所で発動させていれば、俺は今この場には居なかったので、命があつてラッキーである。

ピキ

卵が割れた。

目に見える魔法効果はそれだけだ。

そして、卵は魔法効果もろとも消えゆく。割れた卵の中には何も無い。何も、ありませんよ？

ヒュッと少しばかりの風が吹き込む。

おそらくは、その内部で消失したものの中には、空気すらも含まれるのだろう。

全ての魔法効果が消え去った練兵場の中心。その地面が少しへこんでいた。半円の形。クレーターと言うには少しばかりその規模は小さい。

「……穴？」

「地面を掘る魔法効果なのか？」

これまでの派手な効果に比べて何とも地味な効果に、衛士たちは失望とも安堵ともとれる反応を見せる。だが、違う反応を見せるものがいた。

一人は、太い尻尾をブワツと逆立たせて、そのへこんだ地面を凝視している。

ズザッ……

もう一人は、戦き^{おの}とともに、一歩足を後退させる。

さすがだ、ミゴツト。この魔法効果を正確に認識したか。
さすがのポーカークフェイスも今ばかりは青みを帯びて……頭上、
街を覆う虹を見上げた。

ゴウンゴウンゴウン……

「どうさないました、ミゴツト殿。……ニアヴ様？」

いち早く二人の異変に気付いたオールドが声をかける。二人からはだが、反応はない。

困った風にこちらに視線を送ってくるのは、状況の説明を求めていることだろう。

「これが第5の効果、『デイスインテグレーション』だ」

「『デイスインテグレーション』？」

「そう、『自壊^{デイスインテグレーション}』だ。範囲内の全てと共に自壊する効果だ。これは敵味方の区別なく、全てを消し去る」

「……………は？」

言葉の意味の浸透には個人差がある。言葉が脳に届き、意味を繋ぎ、そして理解に至る。

ざわり……

「消し去る？ 消した？」

「穴を掘ったのではなく……地面がきえた？」

「幻虹の中にあるもの全て？」

「それって」

ざわ……ざわ……

皆の間に空を見上げる青ざめたさざ波が拡がって行く様は、全体を見渡せる位置にいる俺にしかわからないだろう。

うむ、なかなか壮観である。

へこんだ地面を凝視していたニアヴが、ゆっくりと俺の方に向き直り、厳しい目つきで見上げてくる。

だがその口から出てくる言葉はすでに予測されているので、聞くまでもなくその答えを口にする。

「昨日、虹に『内側の人間をすべて殺す』効果なんてないだろうと憶測を喋ったが、それは否定された。アंक・サンプルスあの虹には、人間どころか、街の全てを消し去る魔法効果がある」

それも一瞬のうちに。

「はあああああああああああ！！！！？」

もはや声も枯れ果てたかと思いきや、なんだ、みんなまだまだ声が出せるじゃないか。

Wayfarer's Witchcraft-shop 06 (後書き)

ハッピー、メリークリスマス・イブです。

いや、あとがきスペースはこういう風に使うものではないか。

街の虹が消えました。

「ワーズワード殿、どうか、どうか……っ」

とか泣きそうな顔で言われたので。

『アंक・サンプルス』の虹は元の半径二メートルほどの大きさに戻り、そうすると観光客は現金なもので、やっぱり大きい方が良かったなどと騒いだりもしたので、そっちにしておこうか？ お、できんの？ とライトな会話を交わしたりもしたのだが、

「お願いですううう、やめてくださいいい」

とか泣きつかれたので。

結局は元通りである。

「別にそれほど危険ではないと思うぞ？ そもそも魔法効果のいくつかが新たに判明したものの、結局現時点では俺以外にどうこうできる者はいないのだからな」

「阿呆っ、生きてきた中で初めて命の危険を感じたわっ！」

「大げさな」

ニアヴと二人、店への帰り道である。

まずは状況が解明／解決されたので、今日の所は釈放と相成った。

オールドとしては「後日改めて話をさせて頂きたい」らしいが。

今日の出来事　魔法道具店の開店、さきほどの舞台演出を含めた事実の全て　は瞬く間に街中に伝播されることだろう。もちろん、雲上の権力者たちにも。

そいつらが俺の力を利用したいと考えてくれれば、御の字である。

あとの問題はミゴットだが……

俺の見立てでは、ミゴットは老練であっても、熾烈ではない。俺にとつてはむしろ与しやすいタイプのはずである。俺が苦手とするのは駆け引きの通じない、ロボット型人間だ。命令されたことのみを忠実に実行し、己の思考を挟まない相手は、相容れない。

故に、日本の社会システムになじむことが出来ず、ドロップアウトした結果が『エネミーズ23』である。

ふむ、地球からもドロップアウトしてまった今となつては、なるべくしてなつたと言いたいようがないな。

「それにしても、じゃ」

「なんだ」

「なぜ、あそこまで全てを明らかにした？　お主であれば、自分しかもっておらぬ情報を元に、なんぞやの駆け引きでもするものかと思つておつたぞ」

たった一日で、俺に対する正当な評価痛み入る。

「駆け引きはあつたぞ。全て俺のシナリオ通りだ」

「お主の力を見せつけることが目的じゃったと？」

「それは手段だ。その結果どうなる」

「む……そうじゃな、少なくとも今日のことは生涯忘れえぬものになったじやろうな」

「そうだ。彼らの脳の記憶野には『ワーズワード』の名が深く刻みつけられた」

「名を売るのが目的じゃったということかや？」

「その更に先だ」

「どうということじゃ」

さすがにその先までは、考えが及ばないか。まあ、誰しも自分自身のことは判然らないものだしな。

「そもそも、今回の件でルーケイオンが探していたのは誰だ？」

「それは全ての元凶たる、お主じやろう」

「違うな。彼らが探していたのはお前だ」

「にやあ！？」

「当然だろう。瀟獣^{ルーヴァ}が街にやってきた日に、アーティファクトに異変が起こる。さて、怪しいのは誰だ」

「……なるほどのう。そう考えれば、確かに妾かや」

「それが妥当だろう。では、誰もがお前に疑いを持つ中、俺が言葉だけで全てを説明したとして、お前ならばそれを信じるか？」

「信じぬじやろうな」

「だが、今はもうお前のことを欠片も疑ってはいいない。」

「それはそうじやろうな。あれだけ派手にやらかしたのじゃ……あ」

と、そこで狐の足が止まり、耳がピンと立つ。

信じられぬと言わんばかりの、驚いた表情。

『アंक・サンブルス』事変と題された舞台には、始め、ニアヴ

一人が立っていた。

その舞台上に、別の男が現れ、大立ち回りを演じる。
観客の目は、そちらに集められ、結果、ニアヴを見るものはない。
なる。

幕が閉じた後、舞台の感想を言い合いながら席を後にする観客たち。

その記憶の中にニアヴの姿は、もはやどこにもない。

ワーズワードの名が大きくなるということは ニアヴの名が小さくなることと同義。

故に今回の舞台では、ニアヴは一切の行動と発言を封じる必要があり、ニアヴからの『アンチ・マジック反魔法』への実証協力の申し出も、丁重にお断りしたのだ。

「まさか、お主の行動は 」

「『濬獣は人の地に干渉してはならない』」

そして、深き山林では人は濬獣の定めに従う、か。

「……妾のために？」

「勘違いするな。俺のためだ」

もし、ニアヴが『アंक・サンプル』事件に関わったと疑うのであれば、その不可侵条約が破られたと、そう疑うこともまた難しくない。

濬獣からの一方的な条約破棄、そんな疑わしき状況を残しておけば、そこにつけ込もうとする人間は、必ずでてくるだろう。

人とは、とにかく狡猾な生き物だからな。俺が言うのだから間違

いない。

行動を共にしている以上、ニアヴ対するいらぬ疑いを持たれたままでは都合が悪い。

故に、ニアヴに対する疑いは、早急かつ明確に晴らさねばならなかった。

本当に、俺のためだぞ？

他人のために何かをするなんてそんな恥ずかしいこと、この俺に出来るわけないじゃないか

「きゅううう……」

奇妙な鳴き声を上げて、ニアヴの頬が無意識に染まってゆく。

「話は終わりだ。帰るぞ」

歩き始めたところで、ギュッと左腕に加重がかけられる。

「おい」

「これくらい、よいじゃろう？」

俺の腕にしがみついた狐が、ずいと顔を寄せてくる。

その上気した頬は桃よりは林檎に近く。

狐の瞳に映る俺の表情は、なんとも表現しがたいものだ。

「……重くなったら、引き離すぞ」

「わかったのじゃ！」

肩をくすぐる、狐の耳の感触に……俺はその頭蓋がどのような形

状になっているのかと、構造的疑問を覚えた。

「……………」

その疑問故に、寄り添い歩く俺たちをみつめる赤い影に気づくことはなかった。

「あ、おかえりなさい、ワーズワードさん、ニアヴ様」
「うむ、今帰ったのじゃ」

店では、前掛けをかけたシャルが、給仕仕事をしていた。

「別にそんなことまでしなくてよかったんだぞ？」
「いいえっ、大丈夫です、時間がありましたから！」

そこですいと、一人の男が身を差し込んできた。

「ワイもそないな気遣いは無用やとお願いしたんですけど、やめてくれないのですわ。いやほんま、気だてのエエ娘さんですなあ」

にこやかな笑顔で腰も低く握手を求めてくる。

「いや、待たせして申し訳ない。俺はワーズワードだ」
「かまへんかまへん。むしろ声かけてもろて、ありがたい限りですわ。改めてご紹介させてもらいます、『ベルガモ商会』のオーシャン・ベルガモいます。どうぞオーシャン言うてください」

「よろしく頼む、オージャン」

そこにもう一人、慌てた様に椅子から立ち上がる男。
ターバンを巻いた、地球で言うところのインド風な服装である。
肌も褐色だが、如何せん鬚が青い。

「おお、おお……！　ワタクシも是非にご紹介されたく。ワタクシは『シズリナ商会・ユーリカソイル支部』支部長を務めまするイサン・ラニアンと申しまする」

「ワーズワードだ。イサン、と呼んでも？」

「おお、おお……！　まさしくありがたく」

大仰な喜びを表しながら、深々と腰を折るイサン。

【ウォーターフォウル・ボトル／降鵜水筒】を入手するために、
20人からの人手を動員、統括していた人物だ。統制の取れた集団で、おそらくは全員が同じ店の使用人なのであるうと思われたので、目をつけたのだ。

それだけの人数を雇えるならば、かなりの規模の店だろうからな。

二人の脳内では今、俺とパイプを持つことの価値を計算するソロバンが激しく弾かれ続けていることだろう。

ソロバンで。俺も大概懐古主義だな。

そして、二人の後ろで、所在なさ気にこちらを窺うもう一人の若い獣人の男。

「よく来てくれた、ワーズワードだ。名前を聞いてもいいだろうか？」

「あ、はい。えと、俺は『クェス鉄腕工房』で働いてる狼族のウルクウット・ゼアです」

恐縮したように俺の手を握りかえしてくる。世間慣れしてない受け答えは、職人故か、それとも獣人さんとはこういうものなのだろうか。

オージャン・ベルガモ。

イサン・ラニアン。

ウルクウット・ゼア。

先ほどシャルに頼んで、伝言の手紙を届けてもらった相手だ。

「ワーズワードよ、彼らは何者じゃ？」

「これから一緒に商売をしたいと考えている『ビジネスパートナー』候補だ」

俺の言葉に、二人の商人は喜色満面の笑みを浮かべ、一人の職人はとまどいを見せる。

「ワイら商人が安全に商売できますのンも、ニアヴ様が交通の安全を保って頂けるお陰です」

「おお、おお……！ ご拝謁の栄光、まさしくありがたく」

ニアヴに向かい、深々と頭を垂れる姿は、まさに生き神に対するそれだ。

リアルに交通の安全を守っているらしいので、それも当然か。

「よいよい。ニアヴの地は人の通行を許可しておる、人を見守るのも妾の役目じゃ。じゃが、商売の話というのであれば、妾には無縁の話のようじゃな」

「ヒマなら、部屋の掃除でもしててくれ」

「掃除？ ふむ、それは初めての体験じゃのう、任せておくのじゃ！」

「あわわ、ニアヴさまにそんなこと、それなら私がっ」

ご機嫌もよろしく腕を振り回すニアヴを追いかけて、シャルが慌てて奥の部屋へと消えてゆく。

俺の言葉と、それに対するニアヴの反応に、オージャンとイサンは驚愕に満ちた表情を見せる。

「ニアヴ様にあないな口を利用して許されるやなんて、ニイさんホンマなにもんでつか……」

その呟きには、先ほど答えてきたばかりだ。故にスルー。

「さて、改めて俺の呼びかけに応えて集まってくれたこと、感謝させてもらおう。そして、来てくれたということは、俺の話に乗ってくれるという認識でよいだろうか」

「あの……」

そこで、おそろおそろというように手を挙げたのはウルクウツだ。

「『ベルガモ商会』さん、『シズリナ商会』さんつていや、誰でも知ってる大きい商会で、そんな所の旦那さんと一緒だなんて、俺だけ場違いっていうか」

なるほど、先ほどからのとまどいはそれが原因だったのか。

「何で俺なんかが呼ばれたんですか？ ここに来たのはそれだけ知りたいってだけで」

「まず始めに言っておこう。これは二人にも聞いてもらいたいのだが『ベルガモ商会』という名も『シズリナ商会』という名も俺は全く知らなかった。故に、大きな商会の人間だからという理由で声をかけたのではない。俺と一緒に商売をしたいと思った人間にだけ声をかけたのだ」

「おお、おお……！」

「うれしいこと、いつてくれはりますな」

半分以上は世辞の部類だがな。『巧言令色鮮なし仁』とはよく言ったものだが、商人同士の会話に仁は必要なく、巧言と令色はコミニケーションの潤滑油である。どんどん使っていこう。

「そして、ゼア殿」

「ウルクウツトでいいです」

「では、ウルクウツト。君に声をかけた理由だが、君は【フォックスライト／狐光灯】を手にとってかなり熱心に見回したあと、失望したような表情をしていなかったか？」

「失望なんてそんな！ すいません、そんなつもりじゃ」

「いや、良い。何が君を失望させたのか、俺に教えて貰えないか？」

例え答えがわかっていても、本人に答えさせることが大事な場面もある。

「あの、失礼だったらごめんなさい。【狐光灯】っていうあの魔法道具、本当にすごいものだとおもったんです。でも、もったいないなっ」

「もったいない？」

「はい。魔法の炎はすごい綺麗なのに、瓶がその……」

そこでまた口ごもるウルクウツト。

しかし腰の低いやつだ。もっとワイルドに生きろよ、狼くん。

「いいんだ、言ってくれ」

「はい、それじゃ。あの瓶って多分ですけど、切り傷用の薬瓶ですよ。普通のランプにいれるだけでも、もっと良くなるのにつて」

「そして『自分ならもつといい物にできるのに』」
「だろう」

「そ、そんなこと！」

「いいんだ、正直に言ってくれ」

「……あの。はい、そう思いました」

「答えてくれてありがとう。つまり、それが君に声をかけた理由だ」

全く理解できないという困った表情のウルクウツト。

「指摘の通り、あれはその辺に転がっていた瓶を再利用しただけだなにせ、昨日思いついて作ったものだから。全く雑な仕事で、本来ならば売り物にするなど恥ずかしいだけの代物だ」

「えっ？ 昨日思いついて？ 作った??」

ぽかんと口を開けて、驚きを表現するウルクウツト。

オージャンとイサンはさもありなんと口元をゆがめる。

彼らはあれが遺跡からの発掘された一点モノなどではなく、量産可能なものと推測できていたのだろう。故に、継続的な商売になると確信し、ここにいるのだ。

「イサン。これらの魔法道具は、王族や貴族たちに好まれると思うだろうか」

「おお、おお……！ まさしく」

「オージャン」

「確実に売れる。せやけど、薬瓶ちゅうんはいただけ。貴族相手に売るんやったら、これじゃアカン」

期待通りの回答ありがとう。

「ということだ。ウルクウツト お前の手で【狐光灯】をデザインしてしてみないか？」

「俺の手で……？」

「そうだ。お前は自分で最も素晴らしいと思う器を用意しろ。それに俺が魔法の明かりを灯す。それをオージャンとイサンが売る。世界中の貴族がお前の作った道具を愛用する未来を想像してみろ」

「俺の作った道具が世界中の貴族さまに使ってもらえる？ ……」

「くお」

「くお？」

「くおおおおおん！！」

突然高い声をあげるのは止めて頂きたい。俺がびっくりするので。

「あ、す、すいません！ 俺興奮しちゃうつい」

「かまわない」

「でも……本当に俺なんかでいいんですか？」

もちろんお前でいいし。お前じゃなくてもいい。

誰でもいいという観点で考えるならば、ウルクウツトの気弱な性格が多少うつとおしいが、その分御しやすい。選択肢としては悪くない。

「もちろんだ。ウルクウツト、お前以外の誰にも頼むつもりはない。どうか、俺を助けてほしい」

「初めてあった俺なんかをそんなに信用してくれるなんて……」

お、俺、頑張ります、是非やらせてください！」

感動にむせび泣くウルクウツト。

「ありがとう。もちろん十分なリターンが約束できる仕事だ。そして、仕事である以上、俺のチェックは厳しいと思ってくれ」

「わかりました。必ず期待に添うものを、いえ、ご期待以上のものを作って見せますっ……………くおおおおおん!!」

だからそれはやめろというに。

交渉にもならなかったが、獣人君の引き入れ成功つと。
あとはオージャンとイサンの両名である。

さあ、心躍る商談を開始しよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3817y/>

ななしのワーズワード

2011年12月25日13時03分発行